

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』 翻訳と注釈 (6)

中 沢 敦 夫

富山大学人文科学研究第 81 号抜刷

2024 年 8 月

翻 訳

『ノヴゴロド第一年代記（新編集版）』翻訳と注釈(6)

中 沢 敦 夫

6664(1156) 年

ノヴゴロド人は、スーディオ¹⁾ (Судило) [A-23]²⁾ を市長官職から追放した³⁾。そして、かれは追放されて5日目に死んだ。そして、その後、市長官職はヤクーン・ミロ斯拉ヴィチ⁴⁾ (Якун Мирославичъ) [A-22] に与えられた。

その春、ノヴゴロド大主教ニフォントが逝去した⁵⁾。4月21日だった⁶⁾。[かれは]府主教に対抗してキエフに行ったことがあった⁷⁾。多くの他の者たちは、「かれは聖ソフィア〔聖堂の財産〕

1) スーディオ [A-23] は、ユーリイ手長公 [D17] 支持派の市長官として、1141年に市長官になり、1144年まで務めたのちに、1147年に再任された〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注358, 361, 416〕。それ以降、1156年までの10年間という長い間市長官職に就いていた。

2) 本連載の(6)から、本年代記に頻繁に登場するノヴゴロドの市長官を特定するための便宜として、「市長官番号」を付すことにした。その番号の振り方の原則は次の通りである。

「市長官表」A表とB表ともに、もしくはA表のみに名がある市長官の番号は、[A-00]のように記す。A表には名がないがB表に名がある市長官の番号は、[B-00]のように記す。以上について00の数字は、[Янин 2003: C. 501-511]のУказательで与えられている番号を用いる。A表とB表ともに名がないが、年代記などの他の史料で、市長官と想定されたり、市長官と親族関係にある人物については、[B-00]のように記す。この場合00の数字は独自に振った番号である。

3) スーディオの追放は、記事の時系列から見て1156年3月～4月のこと。追放の直接の理由は不明だが、一年後の1157年3月頃に顕在化する、貴族によるムスチスラフ [D17A] のノヴゴロド公座からの排斥の動きの準備として、ユーリイ手長公派のスーディオがまず市長官職から排除されたのではないか。

4) 「ヤクーン・ミロ斯拉ヴィチ」[A-22]については〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注292〕を参照。このときは、反ユーリイ門で親ロスチスラフ門（スモレンスク）の政策をとっていたか。

5) 府主教コンスタンティン（一世）は、キエフ公座に就いたユーリイ手長公の要請を受けて、1155年秋に帝都でキエフ府主教に叙任され、1156年初めにキエフへと出発した（到着はこの年の夏頃）。大主教ニフォントは、新府主教を出迎えるためにノヴゴロドからキエフへ行き、滞在先の洞窟修道院で病を得てそこで没した。これについては *Ил*6664(1156) 年記事の冒頭に詳しく記されている [ПСРЛ Т.2: Стб. 483]。

6) *Ил*6664(1156) 年記事（前注）では、ニフォントの命日について、「かれは13日間病に伏して、4月15日に永眠した。光明週間の土曜日だった」とある。1156年の「光明週間の土曜日」は「4月21日」に相当する（復活祭は4月15日）ことから、本 *Ил* 記事の「4月21日」が正しい。*Ил* の「4月15日」は、復活祭の日付と混同したものだろう。

7) ニフォントはノヴゴロド大主教在任中に、①1135～36年〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注254〕と②1141～42/43年〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注343, 355〕、さらに③1148年夏／秋～1150年3月〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注431, 433, 446〕と④死の直前の1156年（上注5）の4回にわたってルーシ（キエフ）に使節として行っているが、ここでは「府主教に対抗して」（противу митрополита）とあることからかれが府主教クリメント叙任に反対して洞窟修道院に足止めされた三回目のキエフ行のことを言っている。

を奪い取って⁸⁾、帝都へと行ってしまった⁹⁾」などと言っており、かれを誹謗して多言を費やしているが、これは自ら罪を重ねることなのである。

次のことをわれらは考慮すべきだろう。どの主教が、このように〔すばらしく〕聖ソフィア〔聖堂〕を〔壁画で〕飾ったのか？ その啓蒙所に壁画を描いたのか¹⁰⁾？〔その外壁に〕壁龕¹¹⁾ (кивот) を造ったのか？〔聖堂の〕すべての外装を飾ったのか¹²⁾？ また、プスコフにおいては聖救世主 (святого Спаса) の石造りの教会¹³⁾ を建て、ラドガで他の〔石造りの聖堂〕聖クリメント教会 (святой Климент)¹⁴⁾ を〔建てたのはどの主教だったのか？〕

わたしは考える。われらの罪の故に、神はかれ〔ニフォント〕の棺をわれらに与えて〔われらを〕慰めることを望まなかったのではないか。〔それゆえ神は〕かれを導いてキエフへと去らせ、〔ニフォントは〕そこで逝去した。かれ〔の遺骸〕は再びその、尊い洞窟修道院で《聖母教会のそばの洞窟で》安置されたのである¹⁵⁾。

同じ年、すべての〔ノヴゴロド〕城市が、その人々が集まった。かれらは望んだ。自分たちのために、神によって選ばれたアルカージイ¹⁶⁾ (Аркадин) という名の聖なる人士を主教

8) 「奪い取る」と訳した語には異読があり、*Сн* полупивь, *Км* лупив, *Ак* грабивь とそれぞれ異なっている (意味はほぼ同じ)。Сн, Км の読みが本来に近く、Ак は 15 世紀の語感によって言い換えたものだろう。

9) ここで引用されている中傷的言辭は、ノヴゴロドの反ニフォント派の聖職者たちから出た言葉であり、死の直前のかれのキエフ行を (上注 5) 悪意に解釈したものと考えられる。なお、この中傷については、16 世紀の『ニーコン年代記』では «нецыи новгородцы глаголаху сице, яко: Нифонтъ еископъ церковнаго святыя Софии имѣнна много истоши, и раздаде ово патриарху Константиноградскому и прочимъ сущимъ тамо, ово митрополиту Киевскому и инымъ многимъ» [ПСРЛ Т. 9: С. 206-207] と拡大して書かれている。

10) このことは、本年代記 1144 年記事の「聖ソフィア教会の啓蒙所のすべてに尊い〔聖像画を〕描いた」の記事に対応している。

11) 「壁龕」(кивот) は、ここでは、ソフィア聖堂の外壁のフレスコ画を保護するために造られたくぼみと庇 (屋根) からなる建築装飾のこと。西欧聖堂建築の「ニッチ」にはほぼ相当する。

12) このことは、本年代記 1151 年の項のニフォントが「聖ソフィアの全体を完全に鉛で葺いた。そして、周り全体を石灰に塗った」の記事に対応している。

13) この教会建設については、本 HI の記事に何年に建てられたという記述はないが、これは、プスコフ市内に現存する、ミロージ修道院の聖救世変容主教会 (Спасо-Преображенский собор Мирожского монастыря) のことを指している。

14) 本年代記の 1153 年にニフォントが「ラドガへ行った。そして、聖クリメントの石造りの教会を定礎した」という記事があり [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 456]、これに対応している。

15) この段落のように、年代記記者はニフォントに親近感を抱いており、また上注 9 のようにノヴゴロドの聖職者仲間たちの、ニフォントへの中傷に対して強く反発している。以上のことから、この年代記記者は、ニフォントに近い人物、すなわち『暦法研究』『問答集』の著者キリクであることの傍証を提供してくれる [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 390, 393]。

16) 「アルカージイ」(Аркадин) については、1153 年の記事に聖母就寝教会 (修道院) の典院として言及されている [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 468]。

に任命することを。すべての民は行くと、かれを修道院から、〔その〕聖母教会¹⁷⁾ から連れて来た。そして、ムスチスラフ・ユーリエヴィチ公 [D17A]、聖ソフィア教会のすべての教衆¹⁸⁾ (крилось),〔ノヴゴロド〕城市のすべての司祭たち、典院たち、修道士たちがかれ〔アルカージイ〕を〔ソフィア教会へと〕連れて来た¹⁹⁾。そして、聖ソフィアの〔主教〕館において主教職の委任を行った²⁰⁾。それは、府主教がルーシにやって来る時までのことで、「その時になったら、そなたは叙任のために〔キエフへ〕行きなさい²¹⁾」ということだった²²⁾。

同じ年、[217] 海外商人たちが²³⁾ 市場区²⁴⁾ (Торговищи) で、聖ピャトニツァ教会²⁵⁾ (святыя Пятница) を建てた。

17) アルカージイの「修道院、聖母教会」とは、1153 年記事にある彼自身が建てた「聖母就寝教会」と同名の修道院のこと〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注 457, 458〕。

18) 「教衆」(крилось)とは、教会勤務者を総称する言葉で、司祭・輔祭などの聖職者と聖歌隊員、堂役などの聖務者からなる。

19) 「かれを連れて来た」は *Сн, Км въведоша/введоша и, Ак възведоша его на стени* の異読がある。*Ак* は「〔アルカージイを内城の〕壁の上に載せて」と理解でき、なんらかの委任の儀式を示唆しているように読めるがよくわからない。いずれにせよ *Ак* は固有読みである。

20) このような形で、ノヴゴロド人の手による主教の選任はこれまでなかった。そのため、この 1156 年のアルカージイの選任から、主教を市民が選ぶという制度が始まったという説もある〔松本 2002: 73 頁〕。

21) 「行きなさい」は *Сн, Км поидеши, Ак поидоша* の異読があるが、*Ак* のアオリスト形は系列が混乱しており、明らかな誤記である。

22) 「府主教がルーシにやって来る」とは、クリメントの後任（対立府主教）として帝都から召喚されたコンスタンチン一世のことで、1156 年夏にキエフに到着している。同じ頃ノヴゴロド大主教に選任されたアルカージイは、実際に 1158 年 8 月 10 日にキエフでかれの手で正式に叙任されている（下注 46）。およそ 2 年間は、アルカージイはいわば「大主教代理」のかたちで、職務に就いていたことになる。

23) 「海外商人たち」(заморськыи [купци])とは、もっぱら海外、とくにスウェーデン、デンマーク、ゴットランドとの取引を行っていたノヴゴロドの貿易商人(гости)たちのこと。かれらについては 1130 年、1134 年記事で、デンマークで事故に遭ったこと、1142 年には「スウェーデン公」に襲撃されたことが伝えられており〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注 176, 226, 375〕、災難から自分たちの利益を守るために一種の組合を組織していたと考えられる〔ヤニン 2008: С. 364-365〕。この組合の手で、かれらの守護聖人（下注 25）に献堂した教会が建てられたのである。

24) 「市場区」(Торговище)は地名で、商業地区(Торговая сторона)の大橋(Великий мост)詰めから 300m 四方ほどの空間を指し、もっとも古くから市場(いちば)があり、取引の中心地だったところ。

25) 「聖ピャトニツァ教会」(святыя Пятница)は、3 世紀の殉教聖女コニア(イコニウム)の聖パラスケーヴァ(Святая Параскева)に奉献された教会のこと。商業地区ヤロスラフ館近くに、「パラスケーヴァ＝ピャトニツァ教会」(Церковь Параскевы Пятницы на Торгу)として現存している。ギリシア語の Παρασκευή が、「安息日の準備」の意味を持っていることから、東スラヴ世界では、その前日である「金曜日」すなわち пятница と意識され、これが聖女として人格化されて、聖ピャトニツァ(Святая Пятница)と呼ばれるようになった。スラヴ世界では、聖パラスケーヴァは商人や旅行者の守護聖人と見なされていた。

6665(1157) 年

民衆のあいだに悪しき諍いがあった。〔ノヴゴロド公〕ムスチスラフ・ユーリエヴィチ [D17A] に対抗して〔人々が〕決起して、ノヴゴロド〔の内城〕からの追放を始めた。かれ〔ムスチスラフ〕に味方して、商業〔地区〕の民が武装して派遣された²⁶⁾。

兄弟たち²⁷⁾が喧嘩を行った。ヴォルホフ川にかかる橋〔大橋〕を取り壊し、橋脚には見張りを立てられた。あちらの側〔ソフィア地区〕では別の〔見張りが立った〕。少人数であり、互いに僅かな流血の事態にもならなかった²⁸⁾。

その頃、スヴァトスラフ [J4] とダヴィド²⁹⁾ [J3] の、ロスチスラフ [D116:J] の二人の息子たちが入城し、その日の夜にムスチスラフ [D17A] はノヴゴロドから逃げ出した³⁰⁾。その三日後にはロスチスラフ [D116:J] が自ら〔ノヴゴロドに〕入城した³¹⁾。兄弟たちは会合して³²⁾、いかなる悪

26) 「商業〔地区〕の民が武装して派遣された」の原文は、торговых же люди послаша въ оружии で Ак, Км (Км は люди がいない) の読み。Сн は търговый же полъ стаха въ оружии (商業地区は武装して布陣した) になっている。どちらが本来の読みであるか定めたいが³⁾、полъ стаха > послаша と誤記されて伝えられた可能性が高い。

27) ノヴゴロド内部の紛争のときに、市民の同胞意識を喚起する言葉として「兄弟たち」(братия)の言葉が使われるのはこの箇所が初めて。6726(1218)の内争のときにも、市長官トヴェルディスラフが同様の状況の中で братия を使っている。

28) 年代記記者は、ノヴゴロドの両地区の人々の和解を求める立場からこの文言を入れたと考えられる。

29) ダヴィド [J3] は 1154 年 12 月に父ロスチスラフの手でノヴゴロド公座に就いているが、一か月ほどでノヴゴロド人により排除されて、スモレンスクに帰っている〔ノヴゴロド第一年代記 (5) : 注 465, 466〕。この度はスモレンスク軍を率いて、ノヴゴロドの親ムスチスラフ派貴族に圧力をかけるために、ロスチスラフの手で派遣されたものだろう。

30) ムスチスラフ [D17A] は 1155 年 1 月 30 日にノヴゴロド公座に就いており〔ノヴゴロド第一年代記 (5) : 注 468〕, 「ノヴゴロド公表」[107]によると、かれは「2 年 1 か月」公座に座していたとあるので〔ノヴゴロド第一年代記 (2) : 注 519〕, ノヴゴロドを「逃げ出した」のは 1157 年 3 月という計算になる。なお、16 世紀の『ニーコン年代記』によれば、逃亡先については、в Ростов, к болшему брату своему князю Андрею Боголюбскому (ロストフへ、自分の長兄アンドレイ愛神公のもとへ) と解釈している [ПСРЛ Т.9 : С. 208]。

31) *И*n6666 年の項では「ノヴゴロド人がムスチスラフを追放し、スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチを据えた」という記事があり [ПСРЛ Т. 2: Стб. 491], *Л*ев では同様の記事が、6665 年の項に置かれている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 348]。両記事ともに、ユーリイ手長公の死の記事のあとに置かれており、本記事に比べると事件の順序が反対になっている。これは、両記事における編集によって生じた時間錯誤によるもので、本記事の時系列が正しい。

32) この「兄弟たち」(братия)は上注 27 の言葉遣いの共通性や文脈から見て、それまで対立していたノヴゴロドの市民たち(ソフィア地区と商業地区を含めた)のことを指しており、「会合した」(снидошася)とは集まって和解の話し合いをしたことを指しているだろう。なお、16 世紀の『ニーコン年代記』はこの「兄弟たち」を諸公のこと(おそらくスヴァトスラフ [J4] とダヴィド [J3])としているが [ПСРЛ Т.9 : С. 208] , ここでノヴゴロドの年代記記者が二人の関係を論ずる必然性はなく、モスクワ的な視点からの誤解釈もしくは意図的改変と考えられる。

しきこともなかった³³⁾。

この年の春, ユーリイ公 [D17] がキエフで逝去した³⁴⁾。そして, キエフでは³⁵⁾ イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が公座に据えられた³⁶⁾。

この年〔の夏〕, 聖なる聖母³⁷⁾〔修道院〕の典院アンドレイ³⁸⁾が逝去した。オレクサ³⁹⁾ (Олекса) がかれの代わりに**典院職**に据えられた。

この年の秋, 非常に恐ろしいことがあった。雷と稲妻があり, 雹はリンゴよりも大きかった。11月7日の夜の第5刻⁴⁰⁾のことだった。

6666(1158) 年

ロスチスラフ [D116:J] がスモレンスクへ行った⁴¹⁾。公妃と一緒にだった。自分の息子スヴァト

33) 上注 28 と同様にノヴゴロド両地区の和解を勧め, 和解を評価する立場からの言葉である。

34) ユーリイ手長公の死については *Ин* に詳しく, 1157 年 5 月 15 日に急病により没している [ПСРЛ Т. 2: Стб.489]。

35) 異読があり, *Сн кыяне* (キエフ人が) に対して *Км, Ак в Киевѣ* (キエフでは) となっている。後者は *в Киевѣ* の句が繰り返されて不自然であり, またイジャスラフはキエフ人の要請を受けてキエフに入城している (次注) ことから, 前者が本来の読みだろう。

36) 本文では「据えられた」(*посадиша*) として主語が明示されていないが, ここで「据えた」のはキエフ人 (貴族, 上級市民) である。*Ин* 記事によれば, 公座を狙ってキエフへの遠征途上だったチェルニゴフ公イジャスラフ [C35] のもとに, ユーリイの死を知らせ, キエフ公座就位を要請するキエフ人の使節団が現れる。そして, 4 日後の 5 月 19 日 (1157 年) にはイジャスラフはキエフ公座に就いている [ПСРЛ Т. 2: Стб.489]。

37) 「聖なる聖母」(*святая Богородица*) とは, この箇所の年代記記者と想定されるキリクが, 当時は司祭として勤めていた, アントーニイ修道院の主教会「聖母生誕教会」のことである [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 118, 278, 390, 418]。

38) アントーニイ修道院典院アンドレイは, 本年代記によれば, 1147 年に典院アントーニイの死去を受けて就任しており [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 419], 10 年間典院を務めていたことになる。

39) 「オレクサ」(*Олекса*) は *Алексей* のノヴゴロドにおける通用名。かれは, 6670(1162) 年に没している。

40) 「11 月 7 日夜の第 5 刻」(*в час 5 ноши*) は当時の一日の計測法で, 日の入りから日の出の時間帯 (「夜」) を 12 に分割した, 日の入りから数えて 5 番目の時間帯を指しており, 現代の時刻表示に直すと, ほぼ 11 月 7 日の零時頃ということになる (一日は夜⇒昼と移行する)。

41) 年代記の時系列から見て, 1158 年 3 月頃のことと考えられる。ノヴゴロド公就位から約 1 年が経って統治が安定したことから, ノヴゴロド地方の公座を息子たちに託して, 自分は本来で領地であるスモレンスク地方の統治に専念し, さらに, キエフ公座を狙う態勢を整えようとしたのだろう。

スラフ [J4] をノヴゴロドの公座に据えた⁴²⁾。他方、ダヴィド [J3] をノーヴィ・トルグ⁴³⁾〔の公座に据えた〕

この年〔の夏〕、われらの罪ゆえに、多くの人々のあいだに疫病があった。そして、多数の馬が死んだ。城市を通過しても、濠 (гребли) に沿って行っても、平地を通っても、市場まで到達できないほどだった⁴⁴⁾。なぜなら、ひどい悪臭があったからである。さらには、角のある家畜⁴⁵⁾ も同様に死んだ。

この年〔の夏〕、〔聖母教会典院〕アルカージイは主教の叙任のためにキエフへと出発した。そして、府主教コンスタンティン (Костянтин) によって叙任された⁴⁶⁾。そして、ノヴゴロドへ帰って来た。9月13日の聖十字架崇拝祭の前日だった。

この年〔の夏〕、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1](Мстиславъ Изяславичъ) はイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35](Давыдовичъ Изяславъ) を打ち負かした。そして、〔ムスチスラフはイジャスラフを〕キエフから追い出して、自分の父方の叔父ロスチスラフ [D116:J] をキエフの公座へと呼び招いた⁴⁷⁾。

42) *Ип*6669 年記事によれば、ノヴゴロド人はこのとき、ロスチスラフ [D116:J] に対して、息子のスヴァトスラフ [J4] を終身のノヴゴロド公として受け入れる旨の誓いを行っている [ПСРЛ Т.2 : Стб. 510]。これは、ロスチスラフの武力を背景にした圧力によるものである。

43) 城市ノーヴィ・トルグ (Новый Торг) (別称「トルジョク」(Торжок)) はノヴゴロドの有力な附属城市 (пригород)。ノヴゴロド地方の南東端に位置する商業都市でロストフ＝スーズダリ地方と接することから、この地方を拠点とするユーリイ手長公の息子たちからの、ノヴゴロド地方防衛のために、ダヴィドが公として派遣されたのだろう。この城市に公座が置かれることは、これまでにない異例のことだった。

44) この「市場」(Торг) は商業地区 (торговая сторона) の橋詰にある一帯のこと。かりに、記事を書いたと想定される司祭キリクが務めるアントーニイ修道院から市場まで行くとすると、直線で 2km ほど離れており、南下しなければならないが、城市 (商業地区のこと) に入って城内に行くことも、城市を取り囲む城濠に沿って歩くことも、城外の平地を経由して大廻りで市場に行くことも、すべて悪臭に包まれて歩けないということ。商品運搬用の馬が市場の周辺のいたるところに倒れ死んで、死骸を片付けるいとまもないほどだったということだろう。

45) 「角のある家畜」(скот рогатыи) とは主に牛のことを指している。

46) 1156 年の記事で言われキエフで府主教の手による大主教叙任手続き (上注 22) がこのときになされたことが記されている。*Ип*6667 年記事には、8月10日 (1158 年) に叙任が行われたことが記されている [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 498]。また、14 世紀のアルカージイの伝記 (Пролог. РГАДА. Ф. 381. № 162. лл. 31об. в : Макарійов [『大聖人伝』 9月18日の項に収録されている [ВМЧ Сент. 14-24: Стб. 1247]) によれば叙任の日付は「8月6日」になっている。

47) *Ип*6667 年記事によれば、12月22日 (1158 年) にムスチスラフ [I1], ウラジーミル [D181], ヤロスラフ [A1211] がキエフに入城し、イジャスラフ [C35] の財産を掠奪した。さらに、かれらはロスチスラフ [D116:J] を、キエフ公座に呼び招くための使者を派遣したとある [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 502-53]。本記事は、ムスチスラフだけを主語にしてこれを取りまとめたものである。

この年の秋、聖ユーリイ修道院の⁴⁸⁾ (у святого Георгия в монастырь) 典院としてディオニシイ (Дионисии) が叙任された。

6667(1159) 年

ロスチスラフ⁴⁹⁾ [D116:J] はキエフへ行き、キエフで公座に座した。

この年〔の夏〕ルーシの府主教コンスタンティン (Костянтинь) が逝去した。チェルニゴフにおいてだった⁵⁰⁾。[218]

6668(1160) 年

ノヴゴロド人はスヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] を捕らえると、かれをラドガへと送った。一方〔かれの〕公妃を聖ヴァルヴァラ修道院に幽閉した⁵¹⁾。また、かれの従兵たちを地下

48) 「聖ユーリイ修道院の」 у святого Георгия в монастырь の下線部は *Сн* にはない。これは明らかに *НІ-М* (*Км*, *Ак*) 編集段階における補足的追加である。なお、「聖ユーリイ修道院」については〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注129〕を参照。

49) ここは大きな異読があり、*Сн* Мьстислав に対して *Ак*, *Км* Ростислав となっている。*Ин*6668 年記事の冒頭で、「ロスチスラフ・ムスチスラエヴィチは公座に就くためにスモレンスクからキエフに出発し、入城した」[ПСРЛ Т. 2：Стб. 504] とある。これは、先の記事でキエフに入城したムスチスラフが叔父のロスチスラフに公座を移譲したことによるもので、1159 年 4 月 12 日の出来事である。本記事が 6667(1159) 年の冒頭に置かれていることから、これに拠ったと考えられ、*НІ-М* (*Ак*, *Км*) の読みが妥当である。*Сн* の読みは明らかに誤りであり、*НІ-М* 編者がこれを *Ин* に拠って訂正したものと考えられる。

50) *Лвр*6667 (1159) 年記事の冒頭に、То же лѣта преставися митрополить Кыевьскыи Костянтинь Черниговѣ. [ПСРЛ Т. 1：Стб. 349] の文言があり、本記事と言葉遣いはほぼ一致しており、この記事を採用したと考えられる。ただし違いは、本記事では下線部の Кыевьскыи の代わりに Рускыи となっていることで、これは、ノヴゴロドの編者の手によってノヴゴロドの視点から置換されたものだろう。

51) 1160 年 3 月～4 月のノヴゴロド公座交代事件については、『キエフ年代記』(*Ин*) の 6669 年(超三月暦で 1160 年に相当)の記事が非常に詳細に伝えている。これによると、この年の春に先ずノヴゴロド人は民会の決定として、スヴァトスラフ [J4] に対して「二人の公は要らない」という理由で、トルジョク(ノーヴィ・トルグ)公のダヴィド [J3] の退去を要求して、ダヴィドを出身地のスモレンスクへ追い払うことに成功する。さらに民会のノヴゴロド人は、ロスチスラフ [D116:J] と結んだ終身公座受け入れと忠誠の誓いを破って、城塞地区(городище)に乱入して、スヴァトスラフを「小屋に閉じ込め、公妃を修道院へと連行し、かれの従士たちを枷で縛めた。そして、かれとその従士たちの財産を掠奪した。その後、公をラドガへと連行し、かれに多数の監視をつけた」[ПСРЛ Т. 2：Стб. 510-511]。このように事件の経緯の記述はほぼ一致している。

なお、聖女ヴァルヴァラ修道院は、リューディン区にある女子修道院で、1138 年の政争のときにもスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C43] の公妃の幽閉場所として使われた。

牢に閉じ込めた⁵²⁾。

そして、〔ノヴゴロド人は〕ユーリイ [D17] の孫にあたる⁵³⁾ ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] を〔ノヴゴロドの公座へと〕導いて来た⁵⁴⁾。6月21日だった⁵⁵⁾。

この年の冬、市長官職がネジャタ⁵⁶⁾ (Нѣжата) [A-24] に与えられた。

スヴァトスラフ [J4] をラドガへと連れて行った⁵⁷⁾。そして、〔スヴァトスラフは〕そこからスモレンスクへと逃げた⁵⁸⁾。

この年の冬⁵⁹⁾、ロスチスラフ [D116:J] は、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] をベルゴロ

52) スヴァトスラフ [J4] の従兵たち (дружина) が「地下牢に閉じ込められた」(в погребѣ всажаша) (『キエフ年代記』では а дружину его исковаша) ことについては『キエフ年代記』に後日談がある。それによれば、キエフのロスチスラフ [D116:J] にこれについての報告がもたらされると、かれは報復として、キエフに滞在していたノヴゴロド人たちを逮捕して、ペレセチェンの地下牢 (Пересѣченський погреб) に投ずることを命じた。この措置のために、一夜のうちに14人のノヴゴロド人有力者が死んだ。これを知ったロスチスラフは自分のなしたことを後悔して、生き残ったノヴゴロドを解放したという [ПСРЛ Т.2 : Стб. 511]。

53) 本年代記で人名に「～の孫にあたる」(вънука) が付されるのは、同時代に同名、同父称の公がいるので混同を避けるためと考えられる。例えばこの箇所では、「ムスチスラフ [D11] の孫」にあたる「ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5]」が同時代に存在するために、この語句が挿入されたのだろう。このような挿入は後代の編集過程で行われたのかもしれない。なお、以下にも同様の事例がある。

54) この、1160年5月～6月のムスチスラフ [D1711] を公座へ招聘した経緯についても、*Ил*6669年記事が詳しい。すなわち、ノヴゴロド人は、スーズダリのアンドレイ愛神公 [D173] のもとに使者を遣り、まずかれの息子をノヴゴロドの公にするよう請願した。しかし、アンドレイは息子を与えず、兄弟のムスチスラフ [D17A] を与えようとした。ノヴゴロド人は以前にムスチスラフが公だったときの不手際を理由にこれを望まず、結局アンドレイは甥のムスチスラフ [D1711] を行かせることになった [ПСРЛ Т.2 : Стб. 511]。なお、このことは、*Леп*6668(1160)年記事にも、スーズダリ (アンドレイ愛神公) の立場から短く語られている [ПСРЛ Т.1 : Стб. 351]。

55) 招聘した公の到着日を記すのは、この年代記記者特有の手法である (〔ノヴゴロド第一年代記 (5) : 注 461, 468] および下注 64 を参照)。

56) ネジャタは1137年記事では、フセヴォロド [D111] 支持者として記され、その弟スヴァトボルク [D114] がノヴゴロド公だった1144年に市長官に選ばれている [ノヴゴロド第一年代記 (5) : 298, 388]。しかし、この年にはロストフ＝スーズダリ派に転じたらしく、ユーリイ手長公の孫ムスチスラフ [D1711] がノヴゴロド公座に就くと、すぐに市長官に選任されている。

57) この6668年記事の冒頭で、スヴァトスラフ [J4] はすでに「ラドガへ送られて」(послаша его в Ладугу) おり、ここでさらに、「スヴァトスラフをラドガへ連れて行った」(ведоша Святослава в Ладугу) と書かれているのは不自然である。編集上のダブリかもしれない。

58) スヴァトスラフ [J4] のラドガからの逃亡については、*Ил*6669年記事に記述があるが、本記事とはやや異なったことを伝えている。それによれば、「神が、また尊い十字架の力が、スヴァトスラフ [J4] を解放した。かれはポロツクへ行った。ログヴォロド [L11] は、かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕をポロツクからスモレンスクまで連れて行った」[ПСРЛ Т.2 : Стб. 511] としている。これによると、スヴァトスラフ [J4] はラドガから、水路でラドガ湖、ネヴァ川経由でフィンランド湾、バルト海に出て、現在のリガから西ドヴィナ (ダウガヴァ) 川をさかのぼってポロツクへ到達した可能性がある。

59) 1161年2月～3月の出来事である。次注参照。

ド(Бѣлогород)の近くで打ち負かした。かれ〔イジャスラフ〕自身は殺害された⁶⁰⁾。そして、多くのポロヴェツ人が斃れた⁶¹⁾。

6669(1161)年

ロスチスラフ[D116:J]とアンドレイ[D173]はノヴゴロドについて約定を結んだ。二人は、ユーリイ[D17]の孫ムスチスラフ[D1711]を〔公座から〕斥けた。かれは丁度1年間に1週間足りない期間⁶²⁾〔ノヴゴロドの公座に〕座していた。そして、スヴァトスラフ[J4]が再び〔公座へ〕導かれた。かれの完全な意志によるものだった⁶³⁾。9月28日だった⁶⁴⁾。

そのとき、ネジャタ[A-24]から市長官職が取り上げられ⁶⁵⁾、《ザハリヤ》⁶⁶⁾ [A-25]に与えら

60) ロスチスラフ[D116:J]とイジャスラフ[C35]とのキエフを巡る戦いと後者の戦死については、*In*6669-70年記事に詳しい。これによると、イジャスラフは1161年2月にポロヴェツ人の支援を得てキエフに入城し、キエフ公ロスチスラフは近郊の付属城市ベルゴロドに逃げた。イジャスラフはベルゴロドを一月ほど包囲したが、その間にベルゴロドに向けて、ムスチスラフ[I1]、リューリク[J2]諸公の軍勢がロスチスラフへの援軍として近づいた。これを知ったイジャスラフは包囲を解くが、今度はロスチスラフがベルゴロドを出てかれを追撃し、キエフ南西12kmほどのジェラニ川でイジャスラフを発見して、これを殺害した。1161年3月6日のことだった[ПСРЛ Т. 2: Ст.6517-518]。

61) イジャスラフの援軍である「多くのポロヴェツ人が斃れた」(множество половець паде) ことについては前注の *In* 記事には記されていない。この戦いにロスチスラフへの援軍として参加したノヴゴロド人がもたらした情報を使ったものか。

62) 「丁度1年間に1週間足りない期間」(год до года без недѣли) (*Км* год без недѣль だが同じ意味)は、厳密を期して期間を言うときの表現。計算すると「365日マイナス7日」で358日になる。ムスチスラフ[D1711]は1160年6月21日にノヴゴロド公座に就いていることから(上注55)、かれが公座に就いていた最後の日は、計算の上では1161年6月14日ということになる。

63) 「かれの完全な意志による」(на всен волѣ его)の表現の背後には、このスヴァトスラフ受け入れが、ノヴゴロド人の意志に反した不本意なことだったことが強く示唆されている。

64) ムスチスラフ[D1711]が1161年6月14日に公座を離れたとすると(上注62)スヴァトスラフ[J4]がノヴゴロド公座に再度着任した9月28日までの3か月と2週間の間は公座は空白だったことになる。この期間に、次注にあるロストフ＝スーズダリ派の市長官ネジャタ(上注56)の解任と、スモレンスク派(スヴァトスラフ[J4]派)の市長官ザハリヤ[A-25]の選任(下注67)が行われたと考えられる。

65) 6672(1164)年記事でネジャタはラドガの市長官(посадник)として記されていることから、ノヴゴロド市長官の職を解かれてすぐに、かれはラドガへ派遣されたことがわかる。

66) 市長官の名に異読があり、*Сн* (*НІ-С*)はЗахарія(ザハリヤ)であるのに対して、*Ак*, *Км* (*НІ-М*)はОзарья(オザリヤ)である。*Сн*のЗахарія(Захарья)が以下の*НІ-М*の記述で市長官として記されていることから(下注84, 92参照)、こちらが正しく、*НІ-М*のОзарья(旧約の聖人Азаріяのノヴゴロド方言形)は編集者(写字生)の誤記・誤写によるもので、オザリヤという市長官は存在しなかった可能性が高い[Янин 2003: С. 47]。ただし、ノヴゴロド市長官表Bには、НежатаとЗахаріяの間にОзарія Феофилактовичの名が記されていることから[НПЛ: С. 472], *НІ-М*編集者(写字生)はこれを参照した可能性もある。

れた⁶⁷⁾。

この年の夏に、ずっと日照りが続いた。あらゆる穀物⁶⁸⁾が枯れた。また、秋には厳しい寒気が春蒔き麦⁶⁹⁾を台無しにした。さらに、われらの罪ゆえに、この邪悪は止むことがなかった。再び冬になると⁷⁰⁾、冬中ずっと暖気と雨と雷が続いた。われらは、小さいカジ〔小桶〕⁷¹⁾〔ライ麦〕をクナ⁷²⁾ (куна) で買わざるを得なかった。おお、人々の間になんと大きな悲しみと窮乏があったことか。

6670(1162) 年

聖なる聖母〔修道院の〕典院オレクサ (Олекса) が逝去した。かれのあとにマヌイル (Мануила) が典院として叙任された⁷³⁾。

67) ザハリヤは、ネレフスキ区の貴族で、スヴァトスラフ [J4] 派の代表として、ムスチスラフ [D1711] が公座から斥けられるとすぐに、この公を支持していたネジャタと交替するかたちで市長官となった。かれは、1167年にスヴァトスラフが公座から追放されるとまもなく、キエフ公ムスチスラフ [I1] 派の市民によって殺害されている（下注 127）。

68) 異読があり、*Си всѣ житю; Ак, Км всякое житю*. 意味としては「様々な種類の穀物」ということで同じである。早魃によってあらゆる穀物（ライ麦、小麦、燕麦など雑穀）が「枯れて」（пригорѣ）実らなかったということ。

69) 「春蒔き麦」（яръ）とは、春（3月～4月）に播種して秋（8月～9月）には収穫するライ麦・小麦のことで、ここでは結実期の秋に寒気（мороз）に襲われて実りがなかったということ。

70) 1161/62 年冬のこと。

71) この「小さいカジ」（малая кадка）のは本来は「小さな桶」を指すが、ここでは穀物（主要穀物のライ麦）の秤量単位として使われている。「桶」を意味する「カジ」が穀物秤量の基本単位で（後代にはライ麦 230kg に相当した）、それが「小さい」のは、おそらく *HI1127,1128* 記事で記されている「オスミンカ」（осминка）（カジの 1/8 の意味）と同じ単位で、その言い換えではないか。その場合、「小さいカジ」は 29kg ほどになる。

72) 「クナ」（куна）は、「貂（テン）」（куница, куний）の毛皮をあらわす куна を語源としており、テン毛皮を当時流通していたアラブ・ディルハム銀貨と同等とみなす商習慣があったことから、金銭単位の名称として使われるようになった。取引の少額単位としてよくクナが用いられている。11 世紀の『ルーシ法典』（簡素版）では計算上は銀重量で 2.04g で、グリヴナの 1/25 [0.04] に相当したが、12 世紀の拡大版ではグリヴナの 1/50 [0.02] と半分の価値になっており、ここでも 1 クナは 1/50 グリヴナ [銀重量 1.02g] と見るべきだろう。これによれば、7 クナは、0.14 グリヴナに相当する。

73) 「聖なる聖母の」（святые Богородица）は、年代記記者と想定されるキリク（Кирик）が修道司祭として勤めていたアントニー修道院（Антоньев монастырь）のことで、この修道院についての一連の関連記事のひとつ。

この年〔の夏〕聖霊《降臨》⁷⁴⁾〔修道院〕の典院に、聖サヴァ〔教会の〕司祭⁷⁵⁾ サヴァ (Сава) が叙任された。

6671(1163) 年

ノヴゴロド大主教⁷⁶⁾ アルカージイ (Аркадии) 狓下⁷⁷⁾ が逝去した。9 月 19 日だった。〔遺骸は〕大いなる名誉をもって、聖ソフィア〔聖堂〕の啓蒙所 (притвор) に安置された⁷⁸⁾。

6672(1164) 年

スウェーデン人 (свѣя) がラドガの城下まで到来した。ラドガ人は自らの家屋を焼いて⁷⁹⁾、自分たちの市長官ネジャタ (посадник Нѣжата)⁸⁰⁾ [A-24] とともに内城に (в городѣ) 立て籠もった。そして、公を、ノヴゴロド人を呼ぶための使者を派遣した。

かれら〔スウェーデン人〕は内城の城下まで進軍した。土曜日だった⁸¹⁾。内城へと〔突入

74) 「聖霊降臨修道院」(Сн святын Дух Съшествия, Ак, Км святын Дух) は、ネレフスキイ区と接する濠の外側近くにあり、ソフィア聖堂から北方 1.1km ほどのところに位置している。本記事が年代記の初めての言及で、1357 年に石造りに建て替えられるまでは木造聖堂だった。Духов монастырь として三位一体主教会 (Троицкая церковь) の建物が現存している。

75) 「聖サヴァ〔教会の〕司祭」(попин святого Савы) は *НІ-М(Ак, Км)* だけの読みで、*НІ-С(Сн)* にはない。「聖サヴァ教会」については 6662(1154) 年記事でその創建が伝えられており〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注 462〕、聖霊降臨修道院からも近いことから、史実に対応していると考えられる。

76) 異読があり、*Сн епископъ*; *Ак, Км архиепископъ* となっている。後者は後代の挿入による *НІ-М* の固有読み。

77) 異読があり、*Сн, Ак Аркадии*; *Км владыка Аркадии*。後者は後代の挿入による *Км* の固有読み。владыка (狓下, 主宰者) は、主教に対する呼び名であり、親近感が込められている。

78) ここでは、遺体を棺に納めて「啓蒙所」の地下に埋葬したということ。「啓蒙所」(притвор) とは聖堂玄関を入ったすぐの、奥の「聖所」(церковь, narthex) の手前にある空間の名称。アルカージイの棺は 1243 年の記事で、大主教マルティールイ (1193-99) が埋葬されている同じ場所にあるとされている。考古学発掘でもその位置が確認されており、主聖堂の南玄関 (現在は封鎖) を入ったすぐの左側の、現在の「マルティールイ側廊」(Мартирьевская паперть) がその場所に相当している [Янин 1988: С. 37-41, 194 (схема № 7)]。

79) ラドガ内城の城下に木造家屋を立てて住んでいた住民たちは、攻城戦の際に敵の遮蔽物として利用されたり、家財・物資を掠奪されないために、家屋を自ら焼き払って内城に籠ったのである。

80) 上注 65 を参照。ネジャタは一種の追放地としてラドガに住んでいたと考えられる。

81) これは 1164 年 5 月 23 日の土曜日に相当する。

することは] まったく上手く行かず⁸²⁾、大きな損害を受けた。そして、ヴォロナイ川⁸³⁾ (рѣка Воронаи) まで撤退した。

それから5日後に、スヴァトスラフ [J4] が、ノヴゴロド人と市長官ザハリヤ (посадник Захария) [A-25] とともに到来して、かれらに《襲撃を仕掛けた》⁸⁴⁾。5月28日、聖エラディオスの祝祭日⁸⁵⁾、木曜日の第5刻のことだった。そして、神の助けによってかれらを打ち負かした。ある者は斬り殺し、[219] ある者は捕虜に捕った。かれら〔スウェーデン人〕は55隻のスネッケ船⁸⁶⁾ でやって来たが、43隻を捕獲した。かれらのうち僅かの者が逃げ帰ったが、その者たちも傷を負っていた。

6673(1165) 年

イリヤ⁸⁷⁾ (Илья) 〔イオアン二世〕が、府主教イオアン⁸⁸⁾ 〔四世〕 (Иоан) によってノヴゴロド

82) 「まったく上手くいかず」 (не успѣша ничтоже) の表現は、1142年記事でやはりスウェーデン軍の行動について用いられている〔ノヴゴロド第一年代記(5):注374〕。後代の *HI* 編集者 (13世紀中頃か) の手による加筆部分である可能性が高い。

83) 「ヴォロナイ川」 (рѣка Воронаи) は、現在のレニングラード州 (Волховском районе Ленинградской области) のラドガ湖にそそぐヴォロネジカ川 (Воронежка) のこと。ラドガ内城からその河口までの距離は北北東方向に36kmほどあり、スウェーデン軍は河口に船団を停泊させて襲撃の拠点としており、ここまで撤退したのだろう。

84) 「襲撃を仕掛けた」は異読があり、*Сн наворопиша на ня* (襲撃を仕掛けた) ; *Ак, Км наворотишася на ня* (かれらの方へ転換した)。前者のほうが文脈として自然であることから、*Сн* の読みを採用した。

85) 6-7世紀のローマの殉教者主教エラディオス (священномученик Елладий, Ελλαδῖος) の祝祭日は11～14世紀の典礼書では5月28日になっている [Лосева 2001: С. 349]。

86) この「スネッケ船」 (шнека) については〔ノヴゴロド第一年代記(5):注373〕を参照。一隻に25～40人が乗船していたと考えられる。

87) 「イリヤ」 (Илья) は、修道士としての名はイオアン (Иоанн) と言い、研究史の上ではノヴゴロド (大) 主教「イオアン二世」 (Иоанн II) と呼ばれている。リューディン区の聖ヴラシオス教会 (церковь св. Власия, Василия) の司祭を務めていたことがあり、本年代記では司祭の時の名がそのまま使われている。イリヤはその後得度して修道士イオアンと改名している。1163年の主教アルカージイ没後 (上注76) 主教に選任され、この年1165年にキエフに赴いて府主教から正式な叙任を受けたことになる。1186年9月に没するまで大主教座にあり、教会建設や内政の指導などに力を尽くした [Великий Новгород 2009: С. 224]。

88) 府主教イオアン四世 (ギリシア人) については、*HI* では初めての言及。*Ип*6672年記事の冒頭にかれが帝都からキエフにやって来たことが記されており、1164年春～夏からキエフ府主教を務めていた [Поппэ 1996: С. 458-459]。

大主教⁸⁹⁾に叙任された。ルーシの**大いなる公**⁹⁰⁾ロスチスラフ [D116:J] のときだった。3月28日の聖枝祭主日⁹¹⁾のことだった。そして、〔イリヤは〕ノヴゴロドに到来した。5月11日のことだった。スヴァトスラフ公 [J4] のときで、市長官ザハリヤ⁹²⁾ [A-25] のときだった。

同じ年、盾作り職人たちが聖三位一体教会を建てた⁹³⁾。また、スヴァトスラフ公 [J4] が城塞地区 (городищи) に別の〔教会〕聖ニコライ (святого Николы) 教会を建てた⁹⁴⁾。

同じ年、典院ディオニーシイがルーシへ行き、合意して戻って来た⁹⁵⁾。〔ノヴゴロド主教イリヤ〕猊下に対して、大主教座〔を設けるよう〕府主教〔イオアン〕から命じられたのである。その年の冬に逝去した⁹⁶⁾。

この年の冬、酷寒 (силныи морзы) が続いた。

89) ここでは、*HI-C* と *HI-M* の写本すべてが архиепископ (大主教) となっており、上注 76 のような異読はない。この呼称は、この年、1165 年夏～秋に正式にノヴゴロドの主教座が大主教座に昇格したこと (下注 95) に拠っているが、厳密に言えば、イオアン (イリヤ) がキエフで叙任されたのはまだ「主教」(епископ) としてである。

90) 異読があり、*Сн, Ак при князи русѣмь, Км при великом князѣ русѣмь* となっている。この表現は次に述べられるノヴゴロド公スヴァトスラフ [J4] との対比のために付されたもので、*рускии* はノヴゴロド (новгородский) との対比で、*Км* の固有読み。 *великии* (大いなる) は、息子スヴァトボルクに対比して親であるという意味がこもっているだろう。

91) 「聖枝祭主日のとき」(на вербьницю) の「聖枝祭」(вербьница) とは復活祭一週間前の日曜日 (主日) のことで、неделя вайй とも言う。1165 年の「聖枝祭は確かに 3 月 28 日の日曜日に当たっている。

92) 市長官ザハリヤ [A-25] については上注 66 参照。

93) 「聖三位一体教会」(церковь святых Троицы) はソフィア地区内リューディン区 (Людин конец) のリャジャティナ街 (Редятна улица) にあった木造教会のこと [Великий Новгород 2009: С. 510]。現在は 18 世紀の石造りの聖堂が現存している。「盾職人たち」と訳した語は、*Сн шетициници, Ак шетенич, Км шетиници* と異読があるが、これらは «щетиници» の通用形 (話し言葉形) と考えられる。щетиник は щитник (щитъникъ) と同じで、軍用の盾 (щит) を制作する職人のこと。本年代記の 6735(1227), 6742(1234) 年記事にそのような職業者について言及がある。この場所に集住していた盾職人たちの拠点 (守護聖人教会) として建てられたか。

94) ノヴゴロドの城塞地区 (городище) には、1136 年頃にスヴァトスラフ [C43] が自分のためにニコライ教会を建てているが [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 284]、それとは別に、スヴァトスラフ [J4] が自分のための聖堂を建てたものだろう。歴代のノヴゴロド公が自分の守護聖人に献じて建てた小規模の木造の聖堂だったと思われる。

95) 「ディオニーシイ」(Дионисин) は 1158 年からユーリイ修道院の典院 (上注 48)。キエフで主教の叙階を受け、1165 年 5 にノヴゴロドに帰着したイオアン二世 (イリヤ) (上注 89) は、すぐにノヴゴロドの主教座を大主教座に昇格させる請願の使者として、ディオニーシイをキエフの府主教のもとに派遣したのである。「合意して」(с любовью) とは、大主教座昇格が認められたということ。

96) 「その年の冬に逝去した」は *Ак, Км* だけの読みで、*Сн* にはない。主語がない不完全文だが、前の記事からのつながりで見ると、キエフ府主教イオアン四世を指すと考えられる (前の記事のノヴゴロド大主教イオアン二世 (イリヤ) の没年は 1186 年、典院ディオニーシイの没年は 1194/95 年)。ただし、文章が不自然であり、次の 1166 年記事の冒頭に府主教イオアン四世死没の記事がある (下注 97) ことから見て、この文は *HI-M* 編集の初期段階での挿入と考えられる。

6674(1166) 年

府主教イオアン〔四世〕がキエフで逝去した⁹⁷⁾。

この年、聖なる救世主 (святый Спасъ) の石造りの教会が、聖ユーリイ修道院 (монастырь святого Георгия) の門上に定礎された⁹⁸⁾。

同じ年の冬、ロスチスラフ [D116:J] がキエフからルーキ⁹⁹⁾ (Лукы) へやって来た。そして、〔ロスチスラフは〕ノヴゴロド人を〔約定の〕協議のために呼び寄せた¹⁰⁰⁾。〔呼ばれたノヴゴロド

97) 府主教イオアン (四世) (上注 88) の死没については本記事が年代記における唯一の史料の言及。18 世紀歴史家タティシチェフはその日付を 5 月 12 日としているがその典拠は不明 [Карпов 2017: С. 171]。記事の時系列から見て、1166 年 3 月以降の春・夏と推定される。かれは、府主教として最初に「全ルーシの」(всѣ Руси; της πάσης Ῥωσίας) の称号を名乗ったと考えられる [Поппэ 1996: С. 458]。

98) この聖堂は、修道院を囲む城壁の主門の上に建てられる「門上教会」(надвратная церковь, храм) と呼ばれるタイプの教会で、城壁・城門が石造りであることから通常は石造りの建設になる。このタイプとしてはノヴゴロドにおいて最初に建てられたもの。主の変容の祝祭日 (Преображение Спаса, Господня) に献じられている。[Робежник 2016]。И16681 記事によると、7 年後の 1173 年に完成して、大主教イオアン (イリヤ) によって献堂 (освящение) されている (下注 223)。

99) 「ルーキ」(Лукы) は、現在のヴェリーキエ・ルーキ (Великие Луки) に相当するロヴァチ川沿岸の都市。ノヴゴロドから 250km ほど南の、スモレンスクへ行く途上にある。1167 年記事から推察すると、ノヴゴロドの領内ではあるが、スモレンスク領と接していることから、スモレンスク人も居住しており、かれらの相互扶助的な共同体が存在していたと考えられる。

100) このロスチスラフの 1166-67 年のノヴゴロド行きについては、И16676 年記事に「ノヴゴロド人が、かれ〔ムスチスラフ〕の息子スヴァトスラフ [J4] と良好に共にあることができなかったからである」[ПСРЛ Т. 2 : Стб. 528] という説明がある。さらに、ノヴゴロド人との協議 (поряд) については「ノヴゴロド人は十字架に接吻して、ロスチスラフに対して、死が両者を分かすまで、息子 (スヴァトスラフ) を自分たちの公とすること、他の公を求めないこと〔を誓った〕」[ПСРЛ Т. 2 : Стб. 529] とある。これから見て、ノヴゴロドでは反ノヴゴロド公派の勢力が力を付け、スヴァトスラフ [J4] を公座から追い落とす動きがあったと思われる。1158 年にスヴァトスラフ [J4] がノヴゴロド公座に就いたとき、ノヴゴロド人はロスチスラフ [D116:J] に対して、息子のスヴァトスラフ [J4] を終身のノヴゴロド公として受け入れる旨の誓いを行っているが [ПСРЛ Т.2 : Стб. 510] (上注 42)、この誓約が破られるのを防ぐために、ロスチスラフはノヴゴロド人に圧力をかける行動を自ら起こしたと考えられる。

人は〕竈役¹⁰¹⁾ (огнищаны), 平従士¹⁰²⁾ (гридьба), 上級の商人たち¹⁰³⁾ (купць вятъшии) だった¹⁰⁴⁾。

そして、〔ロスチスラフ〕自身はそこで病気になる、もとの所へ戻ることにした。かれはその道中で逝去した¹⁰⁵⁾。そして、〔遺骸は〕キエフへ運ばれて、聖テオドロス¹⁰⁶⁾〔修道院〕に安置された。

6675(1167)年

ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] がキエフで公座に就いた¹⁰⁷⁾。

101) 「竈役」(огнищаны) は家政の中心である「竈（かまど）」を意味する古語 огнище からきていることから、徴税、府庫、調達などノヴゴロド行政府の経済を管理統括する高官の役職名で、ノヴゴロドの在地貴族たち(бояре)のことがこの定型表現（下注 104）で呼ばれている。この役職は『ルーシ法典』にも記されており、拡大版では князь мужь（公の家臣）と言い換えられているが、本記事では、かれらはノヴゴロドの行政府に属している。

102) 「平従士」(гридьба) も、前注の「竈役」同様に、『ルーシ法典』や他の年代記では、公に仕える従士(дружина)を指す言葉として用いられているが、ここでは、ノヴゴロド行政府の軍事を統括する役職名として使われている。

103) 「商人」(купци) はノヴゴロドの経済活動の大きな部分を担う階層を指しているが、その「上級者」(вятъшии) は、ノヴゴロド行政府の政治的な意思決定にも関与していたことがわかる。

104) 以上の「竈役、平従士、商人」は、文脈から見て、ロスチスラフが約定(ряд)について協議する相手方の「ノヴゴロド人」(новгородци)、すなわちノヴゴロド代表団を、三つの階層で示したものと考えられる。このノヴゴロド行政府代表を三階層で示す表現は、本年代記の 1195 年と 1234 年記事にもあり、定型表現になっていることがわかる [Горский 2019: С. 94-95]。

105) ロスチスラフの発病と死去については、In6676 年記事に詳しく記されている。それによれば、1166 年秋～冬にロスチスラフはキエフを發ってチチュルスク、スモレンスクへ行き、それぞれ大歓迎を受けた。さらに、スモレンスクから北へ 190km ほど行ったスモレンスク領トロペツ(Торопечь)（現在のトロペツ市）まで行ったところで発病した。当初ロスチスラフは、ノヴゴロドまで行くつもりだったが、病気のため、ノヴゴロドの要人たちを呼び寄せることを決め、使者を遣って、トロペツからさらに 70km ほど進んだノヴゴロド領ルーキ（現在のヴェリーキエ・ルーキ市 Великие Луки）で会合する手はずを整えた。そして、1166/67 年冬にノヴゴロドからやってきた息子のスヴァトスラフ [J4] およびノヴゴロド人と会合して約定を結ぶと、引き返してスモレンスクへ向かい、さらにキエフを目指した。しかし、病状は悪化して、1167 年 3 月 14 日、スモレンスクとキエフの間のザループ(Заруб)で、ロスチスラフは息を引き取った。遺骸はそのままキエフに運ばれて、3 月 21 日にキエフのテオドロス修道院(у святого Феодора)で棺に安置された [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 528-532]。

106) テオドロス教会（修道院）(святыи Феодор) はキエフのウラジーミル街区にあった。ロスチスラフの父ムスチスラフ [D11] が、1129 年に定礎して、自ら 1133 年にここに埋葬されていた。また、1154 年に兄弟のイジャスラフ [D112:I] が逝去したときも、この聖テオドロス教会に埋葬されている。

107) In6677 年記事によれば、ロスチスラフ [D116:J] の死後（上注 105）、ウラジーミル [D115]、リユーリク [J2]、ダヴィド [J3] はキエフの公座をうかがったが、当時ヴラジミル＝ヴォルィンスキイ公だったムスチスラフ [I1] は大規模な遠征部隊でキエフに向かい、小競り合いの末に、かれらは約定を交わして、1167 年 5 月 19 日に、ムスチスラフ [I1] はキエフに入城して正式に公座に就いた [ПСРЛ Т. 2: Стб. 534-535]。

この年の春、ソトコ・スティニチ¹⁰⁸⁾ (Сотко Сытиниць) が『殉教』聖人¹⁰⁹⁾ ボリスとグレーブの石造りの教会を定礎した¹¹⁰⁾。スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] 公が立ち合い、大主教イリヤ (Илья) [イオアン二世] が立ち会った¹¹¹⁾。

この年、府主教コンスタンチン (Костянтинъ митрополит) がルーシに来た¹¹²⁾。

この年、スヴァトスラフ公 [J4] は、ノヴゴロドを出てルーキ¹¹³⁾ へ行った¹¹⁴⁾。そして、ノヴゴ

108) *Сн Съдко, Ак, Км Сотко* の異読がある (下注 1101049 年記事の綴りは *Сотько*)。このソトコ・スティニチ (Сотко Сытиниць) については、1049 年記事 [155] [ノヴゴロド第一年代記 (3) : 注 333] に言及がある。内城の内側に自らの守護聖人に奉献した聖堂を建てるくらいだから、ノヴゴロドの上級貴族だったと推察される。なお、通説では、ノヴゴロド・ブリーナ¹¹⁵⁾ の主要な登場人物「富裕な貿易商人サドコ」(Садко, богатый гость) の名は、この人物の名称に拠るとされている。

109) *Сн святую мученику, Ак, Км святого* の異読がある。1146 年記事 (次注) では全写本が *святую мученику* となっていることから、*Сн* が本来の読みで、*Ак, Км* は *Н1-М* 編者の改変によるものだろう。

110) この教会は、1146 年に木造で建てられており [ノヴゴロド第一年代記 (5) : 注 407]、この定礎は、石造りの聖堂への建て替えのことを言っている。また、*Н1-М* の 6557(1049) 年記事には、この年の 3 月 4 日 (土曜日) の木造の古い聖ソフィア聖堂焼失について記されているが、そこに加筆記事として「そのときは、聖ソフィアは主教街の端に (конецъ Пскупль улицъ) 建っており、そこは今では、ソトコ (Сотько) が石造りのボリスとグレーブの教会をヴォルホフ川の上 (над Волховом) に建てた場所である」という文言がある。「主教街」は内城を南北に貫く街で [Великий Новгород 2009: С. 460]、その南端にあたる場所を示している。現在の内城城壁のボリス＝グレーブ城塔 (Борисоглебская башня) の内側にあたる位置で、現在将軍アンドレアス教会 (Церковь Андрея Стратилата) が建てられている場所に当たっている。なお、この石造りの聖堂は建築が長引き、1173 年に完成して献堂されている (下注 221)。

111) この原文 *при князи Святославъ Ростиславиць, при архиепископи Ильи* は「立ち会った」と訳したが、ノヴゴロド公と大主教の二人が定礎式の儀式に出席したということ。諸翻訳 (邦、英、ポ、独) は「～の在世に、～の治世に」と訳しているがこれは誤り。同時代の事件を記者が書き留めている本記事で「～の在世」の意味で使うことは不自然であり、ここでは、この教会建設の意義を強調するためにこの句が付け加えられたと考えるべきだろう。

112) 前任のギリシア人府主教イオアン四世 (おそらくルーシで没した) を次いで、コンスタンティノポリスから派遣されたギリシア人。コンスタンチン二世と称され、1167-1170 年の期間府主教座にあった。

113) 「ルーキ」(Лукы) すなわち現在のヴェリキーエ・ルーキ (Великие Луки) については、上注 99 を参照。

114) スヴァトスラフ [J4] がノヴゴロドを脱出するに至る経緯については、*Ин6677* 年の記事に詳しい。それによれば、1167 年 8 月に「ノヴゴロド人は、屋内で密かに民会を開いて、自分たちの公スヴァトスラフへの造反を始めた。スヴァトスラフの支持者たちは、公が居住する城塞地区にやって来て、『公よ、民衆が夜中に民会を開いて、あなたを捕まえようと企んでいます。どうか、自分のことを配慮して下さい』と告げた。スヴァトスラフはこの通報を聞いて、従士たちにこのことを伝えた。従士たちは『あなたの父の死後も、今まではノヴゴロド人全員が十字架接吻で忠誠を誓っていましたが、忠誠心を持たない者はいるものです』と言って、自分の安全を配慮するよう忠告した」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 537] とされている。それゆえに、スヴァトスラフは 9 月 1 日 (下注 140 参照) にロヴァチ川河岸の都市ルーキへいったん逃れて、そこノヴゴロド人との交渉を試みようとしたのだろう。結果的に交渉は成立しなかった。

ロドへ使者を遣って、かれらにこう言った¹¹⁵⁾。「お前たちのもとで公として座することをわしは望まない」。ノヴゴロド人は聖なる聖母〔の聖像に〕接吻して〔誓って〕自分たちの間で言った¹¹⁶⁾。「われらはかれを〔公として〕望まない」。そして、〔ノヴゴロド人は〕進軍して、かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕をルーキから追い出そうとした。かれは、かれら〔ノヴゴロド人〕が自分を攻めようと進軍していることに気が付くと¹¹⁷⁾、トロペツ¹¹⁸⁾ (Торопец) まで行った。

他方、ノヴゴロド人はルーシのムスチスラフ [I1] に使者を遣って、その息子〔ロマン [I11]〕¹¹⁹⁾〔のノヴゴロド公としての派遣〕を求めた。

スヴァトスラフ [J4] はヴォルガ川へ行った¹²⁰⁾。[220] そして、アンドレイ〔愛神公〕[D173] はかれ〔スヴァトスラフ [J4]〕に支援を与えて、ノーヴィ・トルグ (Новый Торжок) を焼いた。そこで、ノーヴィ・トルグ人 (новоторжцы) はノヴゴロドへと撤退した。〔アンドレイの軍は〕かれら〔ノーヴィ・トルグ人〕の家に多くの悪行をなし、かれらの村を荒廃させた。

かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕の兄弟ロマン¹²¹⁾ [J1] とムスチスラフ¹²²⁾ [J5] はルーキ (Луки) を

115) 「かれらにこう言った」(так о глаголю имъ) は *Км* だけの補足説明的な固有読み。

116) 「自分たちのあいだで言った」(рече к собѣ) も前注と同じく *Км* だけの補足説明的な固有読み。

117) 異読があり、*Сн* услышавъ (聞くと)、*Ак*, *Км* учювъ (気が付くと)、どちらが本来の読みかは定めがたい。

118) 「トロペツ」(Торопец) (現トヴェーリ州トロペツ市 Торопец) はルーキから東へ 70km ほど離れているが、当時はスモレンスク領内であり、スヴァトスラフ [J4] は交渉の余地なしと見て、ノヴゴロド領を離れたことになる。ロスチスラフ [D116:J] のノヴゴロド行のときにも、スモレンスク⇒トロペツ⇒ルーキという行路を通っており、トロペツは街道沿いの都市だったことがわかる。当時、ロスチスラフ [D116:J] の年少の息子ムスチスラフ [J5] が公座に就いていたか。

119) この「息子を求めた」(по сынь)の息子は、以下の事態の進展から、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] であることがわかる。ロマンは 1155/56 年の生まれで、当時まだ 11-12 歳の少年であり [Домбровский 2015: C. 262], キエフで父ムスチスラフ公 [I1] の庇護のもとにあっただろう。ノヴゴロドの反スヴァトスラフ [J4] 派貴族が、キエフ公になったばかりのムスチスラフ [I1] の支援をあてにした行動だったことは明らかである。

120) 「ヴォルガ川へ行った」(иде на Волгу) とは、スヴァトスラフ [J4] とその従士たちは、トロペツからヴォルガ川最上流に入って、ヴォルガ川を下って、アンドレイ愛神公 [D173] が支配するロストフ＝スーズダリ領まで到達したということではないか。スヴァトスラフはアンドレイの援軍を得ての反攻を準備したのである。

121) ロマン・ロスチスラヴィチ [J1](Роман Ростиславич) は、当時スモレンスク公だった。

122) ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [J5](Мстислав Ростиславич Храбрый) は年少の兄弟で、当時は兄のロマンとともにスモレンスクに住んでいたか、あるいは 1169 年記事から推察してトロペツに公座を得ていた可能性もある。

焼いた。ルーキ人 (лучане) は警戒して、内城¹²³⁾へと撤退した¹²⁴⁾。他にプスコフ¹²⁵⁾ (Плесков) へ撤退した者たちもいた。

そして、アンドレイ [D173] はスモレンスク人とポロツク人と同盟を結んだ。そして、行路を占拠した。そして、至る所でノヴゴロドの使者を捕らえた¹²⁶⁾。〔ノヴゴロド人に〕キエフへの、ムスチスラフ [I1] 公への報告をさせなかったのである。

こうして、〔アンドレイは〕スヴァトスラフ [J4] を実力によってノヴゴロド〔の公座〕に据えようとして、次の言葉を〔ノヴゴロド人に対して〕言った。「お前たちにとって、スヴァトスラフ [J4] を除いて、他の公はいない」。

ノヴゴロド人はこれ〔この言葉を〕無視して、市長官ザハリヤ¹²⁷⁾ (Захария) [A-25] および、ネレヴィン¹²⁸⁾ (Неревин) とネズダ¹²⁹⁾ (Несда)〔の二人の〕伝令官¹³⁰⁾ (биричь) を殺害した。スヴァトスラフ [J4] を支持して、自分たちへの裏切りを行った〔という理由〕からであった。

そして、〔ノヴゴロド人は〕ヴァチコ¹³¹⁾ (Вячко) 〔ヴァチエスラフ [L21]〕とヴォロダ

123) 「内城」と訳した город は、ヴェリーキエ・ルーキ中心部のロヴァチ河岸の、現在は «Вал» もしくは «Крепость» と呼ばれる場所に築かれていた城砦のこと。H16706 [1198] 記事にも、ポロツク人とトリトニア人が来襲して家屋を焼いたとき、住民は「内城に籠った」(избыша в городъ)とあり、ここと同じ場所を指しているだろう。

124) 「内城へと撤退した」(Си отступиша в город, Ак, Км уствпиша в город) は異読がある。次のプスコフへの撤退も含めて、主に、商品の掠奪を恐れたノヴゴロド商人たちのことを言っているのではないか。

125) ヴェリーキエ・ルーキからは、陸路でザヴォロチエ (Заволочье) 地方〔ノヴゴロド第一年代記 (5) : 注 187〕を経由してヴェリーカヤ川 (река Великая) 上流に至り、そこから水路 (川沿い) でオポチカ (Опочка) を経由してプスコフにいたる商業路があった。これを使って逃げたのだろう。

126) 「行路を占拠した」(пути заяша) とは、ノヴゴロドからキエフへ行くための主要な交通路である、ロヴァチ川 (Ловать) 上流⇒ウスヴァト (Усвят) ⇒ウスヴァチ川 (Усвях) ⇒カスプリヤ川 (Каспля) ⇒スモレンスク⇒ヴォルガ川の水路の連水陸路地点などの要所に軍隊を派遣して関所をつくり、ノヴゴロド人の使者の通行を妨害したということ。ウスヴァチ川、カスプリヤ川は西ドヴィナ川の上流支流であり、ポロツクやヴィテブスクからほど近い場所にあった。

127) 「市長官ザハリヤ」[A-25] については上注 67 を参照。

128) 「ネレヴィン」(Неревин) はネレフスイ区の貴族。かれの息子ザヴィド [A-29] は、1170 年代後半に市長官職に就いていると考えられる (下注 249)。

129) 「ネズダ」(Несда: Незда) はリューディン区の貴族。かれの息子ミロシカ (Мирошка Несдинич) も 1190 年代に伝令官 (次注) を務めており、後には市長官にもなっている。

130) 「伝令官」(биричь) は、行政や裁判を執行する責任ある役職で、裁判取り調べを主宰する高官。「親衛従士」(дѣтский) と同等の上級官吏だった。ノヴゴロドでは、市長官に選任されるような上級の貴族層が就いていた [Горский 2019: С. 15-17]。

131) 「ヴァチコ」(Вячко) はヴァチエスラフ (Вячеслав) の通用形で、当時ポロツク=ヴィテブスク公だったヴァチエスラフ・スヴァトスラヴィチ [L21] を指している。

リ¹³²⁾ [L53](Воладарь)を攻めて、自分たちのために行路を切り開いた¹³³⁾。そして、ダニスラフ・ラズーティニチ¹³⁴⁾ (Даньславъ Лазутичъ)は従士たちとともにキエフへ、ムスチスラフ [I1]のもとに行き、〔かれの〕息子¹³⁵⁾〔ロマン [I11]〕を〔公として〕求めた¹³⁶⁾。

他方、スヴァトスラフ [J4] は、スーズダリ人、二人の兄弟〔ロマン [J1] とムスチスラフ [J5]〕、ポロツク人とともにルーサ¹³⁷⁾ (Руса)へと到来した。ノヴゴロド人は〔貴族〕ヤクーン (Якун) [A-26]とともに、かれらに対抗して進軍した。かれら〔スヴァトスラフ [J4] 勢〕他の者たち¹³⁸⁾ は、〔ルーサに〕到達せずして引き返した。上手く行かなかったのである。

その頃、ヤクーン (Якун)[A-22]([A-26]?)に市長官職が与えられた¹³⁹⁾。ノヴゴロド人はヤク

132) 「ヴォロダリ」(Воладарь)は、ウラジーミル(Владимир, Володимер)の通用形で、ポロツク公の場合、年代記ではこの表記が慣習的に使われている。ここでは、当時ミンスク=ポロツク公だった、ヴォロダリ・グレーボヴィチ [L53](Воладарь Глебович)を指している。

133) 「行路を切り開いた」(налезоша собѣ путь)とは、おそらく、キエフへの交通を妨害するために西ドヴィナ川上流ウスヴァト付近に布陣していた(上注 126)ポロツクの二人の公の部隊を打ち破って、ヴォルガ川方面へ通り抜けたということ。

134) 「ダニスラフ・ラズーティニチ」(Даньславъ Лазутичъ; Лазутиничъ)はノヴゴロドの軍司令官で、翌年の1169年には徴税官(данник)としてヴォルクの向こうへ徴税遠征を行っている(下注 157)。キエフへの使者であるダニスラフが「従士たち」(дружина)、すなわち自前の軍隊を引き連れているのは、アンドレイ愛神公と同盟したポロツク諸公、スモレンスク諸公の交通妨害(上注 126 および前注)を實力で排除するためである。

135) 「ムスチスラフの息子」については上注 119 を参照。

136) このノヴゴロド人使節によるロマン [I11] 招聘については、*Ип*6678 年記事に次の短い言及がある。「ノヴゴロド人の使節がムスチスラフ [I1]のもとにやって来て、かれの息子〔の公としての派遣を〕要請した。かれはかれらにロマン [I11]を与えた」[ПСРЛ Т.2 : Стб. 543]。

137) 「ルーサ」(Руса)は、イリメニ湖の南のポリスチ川(Полисть)とポルーシヤ川(Порусья)の合流地点にある城市で、現在のスターラヤ・ルーサ(Старая Русса)市に相当する。この箇所が年代記史料における初めての言及。ノヴゴロドからは南へ60kmほどしか離れていない。スヴァトスラフ [J4]の軍勢は、ヴォルガ川の最上流地帯からポーラ川(Пола)を経てルーサへ向かったと思われる。

138) 主語にあたる語には異読があり、*Сн* они же; *Км*, *Ак* инни жеとなっている。*Ак*, *Км*の「他の者たち」は二次的な固有読みだろう。

139) これは1137-41年、1156-60年に市長官だったヤクーン・ミロスラヴィチ [A-22]と同一人物だとすると、かなりの高齢だったはずである(ヤーニンとは別の人物 [A-26]と考えている[Янин, 2003])。

ンの配下にあつて¹⁴⁰⁾、シメオンの日 (Семень днь) から¹⁴¹⁾〔復活〕大祭 (Велик днь) まで¹⁴²⁾、公なしで座していた。ムスチスラフ [I1] から〔派遣される〕息子〔ロマン [I11]〕を待っていたのである¹⁴³⁾。

この年の冬、ムスチスラフ [I1] はポロヴェツ人を攻める遠征を行った。そして、かれらを打ち負かした。そして、捕虜をルーシの地へ連れ帰った。その数は甚だしく、数えきれないほどだった¹⁴⁴⁾。

《この年、聖女ヴァルヴァラ¹⁴⁵⁾〔女子修道院〕の典院、神の僕（しもべ）アンナが逝去した。そして、その職位〔典院〕にマリミヤナ (Марьяна) が任じられた。》¹⁴⁶⁾

6676(1168) 年

ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] 公、イジャスラフ [D112:I] の孫が、ノヴゴロドの公座にやって来た。4月14日だった。《大祭の後の第2日曜日で、第一インディクトの年だった。》¹⁴⁷⁾ ノヴ

140) 「ノヴゴロド人はヤクーンの配下にあつて……公なしで座していた」(сѣдѣша новгородци без князя <...> о Якунѣ) とは、本来公とその配下の者が行うべき、ノヴゴロドの軍事、司法、行政、徴税などの活動・業務を、市長官ヤクーンの采配のもとで、ノヴゴロド人（貴族たちとその配下の者）自らが担っていたということ。

141) 「シメオンの日」(Семень днь) は5世紀のビザンツ聖人柱頭行者シメオン (Симеон столпник; Συμεών ὁ Στυλῖτης) の祝祭日で、この場合1167年9月1日に相当する。

142) 「大祭」(Велик днь) は復活大祭 (Пасха, день Воскресения Христова) のことで、この場合1168年3月31日に相当する。前年の9月1日（前注）から約7ヶ月（212日）のあいだ、公座は空白だったことになる。

143) ノヴゴロド人がムスチスラフ [I1] の息子を公として招聘したことについては上注136を参照。

144) 1167/68年冬のキエフ公ムスチスラフ [I1] が組織した、対ポロヴェツ人遠征については、*Ин*6678年記事に浩瀚で詳しい記述がある。それによれば、1168年初め（2月頃）に、ドニエプル下流域のキエフとビザンツを結ぶ通商路に展開するポロヴェツ人討伐のために、ムスチスラフはルーシの諸公を招集して、大軍勢をもって3月2日出陣した。諸公はウグラ川（現オレリ川）でポロヴェツ人を掠奪し、オスכול川まで到達して多数の捕虜を捕り、3月31日に帰還した [ПСРЛ Т. 2: Стб. 538-540]。

145) 「聖女ヴァルヴァラ修道院」(святая Варвара) は、ソフィア地区リューディン区のチェルニツィナ街 (улица Чернинцны) にあった女子修道院。この修道院の関係記事は以下にも、1195, 1218, 1219, 1220の項にあることから、12世紀後半～13世紀第1四半期の期間この修道院は政治的に重要な場所であったことが推察される。

146) 本記事が *Сн* のみにあるのは、前注に示したような修道院の意義が薄れた15世紀の *Н1-М* 編者がこの記事を削除したことによるだろう。

147) この日付は1168年4月14日に相当する。この年の復活祭は3月31日に当たることから、その「第2日曜日」、すなわち次の次の日曜日は確かに4月14日になる。また、この事件はビザンツ暦では創世紀元6675年（1167年9月～1168年8月）に起きており、この年は第1インディクトの年に当たっている（なお、インディクト年は、創世紀元年を15で割って、割り切れたら、インディクト1年になり、以下は余り+1がインディクト年に相当する）。

ゴロド人は自分たちの願い〔が叶った〕ことを喜んだ。

この年、ノヴゴロド人はプスコフ人とともに、ポロツク¹⁴⁸⁾へ向けて遠征した。そして、〔ポロツク公の〕所領(волость)を焼き、〔ポロツクの〕城市から30ヴェルスタの地点まで〔到達してから〕、戻った¹⁴⁹⁾。

この年の暮れから春に¹⁵⁰⁾、〔ノヴゴロド公〕ロマン [I11] は、ノヴゴロド人とともにトロベツへ向けて遠征した。かれら〔トロベツ人〕の家を焼き、多くの数の捕虜を捕獲した¹⁵¹⁾。

同じ時¹⁵²⁾、ロスチスラフ [D116:J] の息子たちは¹⁵³⁾、アンドレイ [D173] の息子¹⁵⁴⁾、〔22I〕スモ

148) 当時のポロツク公は、上の1167年記事(上注131)で「ヴァチコ」(Вячко)と蔑称で記されているヴァチェスラフ・スヴァトスラヴィチ [L21](Вячеслав Святославич)だった。

149) この遠征は1168年夏～秋に行われた。ノヴゴロド公ロマン [I11] の名が記されていないことから、ノヴゴロドとプスコフの行政府が組織した市民軍兵による、ポロツク領への掠奪遠征であり、ポロツク城市への攻撃は意図していなかったと考えられる。プスコフからヴェリカヤ川をさかのぼってポロツク領へ侵入する行路をとったのではないか。

150) 「この年の暮れから春に」(тому же лѣту исходу, на веСну)とは、創世紀元3月暦で6676年、すなわち1168年3月～1169年2月の年が暮れるころから春にかけてということだから、1169年2月～3月の期間を指している。

151) これは、おそらくキエフ公ムスチスラフ [I1] の指示によって、ロマン [I11] がノヴゴロド市民軍とともに行った、スモレンスク勢に対する偵察・掠奪遠征のこと。当時のトロベツは、年少のムスチスラフ [J5] が公座に就いていた可能性があり、またノヴゴロドから追われたスヴァトスラフ [J4] が、公座復帰のためにノヴゴロドへ攻め上るときには拠点地になる可能性があった。それをあらかじめ阻止する意図があっただろう。

なお、*Ин*6678年記事に、キエフ公「ムスチスラフ [I1] はミハルコ・ユーリエヴィチ [D175] をコウイ人……とともにノヴゴロドの息子〔ロマン [I11]〕のもとへと派遣していた」[ПСРЛ Т. 2: Стб. С544]とあるのは、このロマンのトロベツ遠征へ、援軍を差し向けたことを指していると考えられる。この援軍は成功せず、ミハルコは途中で捕らえられて捕虜となった。

152) これは、1169年2月～3月に行われた、スーズダリ公アンドレイ愛神公 [D173] が派遣した、キエフ遠征と大規模なキエフ攻略・掠奪の事件の記事。*Ин*6678年 [ПСРЛ Т. 2: Стб. 543-544] および *Лер*6676年 [ПСРЛ Т. 1: Стб. 354] の項には、参加した11人の諸公の名とともに遠征と掠奪の経緯が詳しく記されている。

153) 「ロスチスラフの息子たち」(Ростиславици)とは、前注の *Ин*, *Лер* 記事によれば、スモレンスク公ロマン [J1]、ヴルーチイ公リユーリク [J2]、ヴィシエゴロド公ダヴィド [J3]、トロベツ公ムスチスラフ [J5] のこと。なお、*Ин*, *Лер* 記事では、アンドレイ愛神公 [D173] の息子ムスチスラフ [D1732] が遠征軍の総指揮官として諸公の筆頭に挙げられているが、本 *HI* 記事では、「ロスチスラフの息子たち」が初めに書かれている(ただし名は示されていない)。これには、当時のノヴゴロド人のアンドレイに対する強い反感(上注126)が反映しているだろう。実際の遠征はアンドレイの指示によって組織されたと考えられる。

154) 「アンドレイの息子」(Андрѣвиць)は単数形で、ムスチスラフ・アンドレイヴィチ [D1732] のこと。この遠征の総指揮官を父から命じられていた(前注参照)。

レンスク人, ポロツク人, ムーロム人, リャザン人とともに¹⁵⁵⁾, ムスチスラフ [I1] を攻めるべくキエフへと遠征した。かれ〔ムスチスラフ [I1]〕はかれらと戦わず, 自主的にキエフから撤退した¹⁵⁶⁾。

6677(1169) 年

ダニスラフ・ラズーティニチ¹⁵⁷⁾ (Даньслав Лазутиниць) が徴税官 (даньник) として, 自分の従士たちとともに¹⁵⁸⁾ ヴォロクを越えて¹⁵⁹⁾ (за Волок) 進んだ。そして, アンドレイ [D173] は, かれらを攻めるために自分の部隊を派遣した。そして, かれら〔ノヴゴロド人たち〕と戦った。

ノヴゴロド人は400人いた。スーズダリ人は7000人いた。そして, 神はノヴゴロド人を助けた。かれら〔スーズダリ人〕が斃れたのは1300人だった。ノヴゴロド人は, 15人の家臣 (мужь)

155) 「スモレンスク人」 (смоляны) はスモレンスク諸公 (前注) が率い, 「ポロツク人」 (полочань) については, スモレンスクと同盟していたポロツク=ヴィテブスク公が派遣したのだろう。「ムーロム人, リャザン人」 (муромци и рязанци) は, 遠征に参加していたアンドレイの年少の弟フセヴォロド [D177:K] と甥のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ [D1711] が引き連れていたと考えられる。

156) 「戦わず自主的にキエフから撤退した」 (не бияся с ними, нь отсупи волею ис Кыева) とは, 遠征軍による3日間の城市包囲と1169年3月8日の攻略, その後2日間の大規模な掠奪, キエフ公ムスチスラフ [I1] のヴラジミル=ヴォルィンスキイへの逃走を, ムスチスラフびいきの年代記記者が婉曲的に表現したもの。*Ип* 記事によれば, 「ムスチスラフ [I1] はキエフに籠城した。城内から戦い, いたる所で激しい戦闘が起こった」 (Мьстиславу затворившюся въ Киевѣ. бьяхутся из города. и бысть брань крѣпка)[ПСРЛ Т. 2: Стб. 544] と, 実際には戦いが行われていたことが分かる。

157) この「ダニスラフ」については, 上注134を参照。

158) 異読がある。*Сн*, *Ак съ дружиною*; *Км съ дружиною своею*。 *Км* の *своею* はこの写本の補足的な固有読み。

159) 「ヴォロクを越えて」 (за Волок) の「ヴォロク」の場所について明示されていないが, オネガ湖 (Онежское озеро) の南とペロオゼロ湖 (Белое озеро) を結ぶ волок すなわち連水陸路と解釈するのが通説である [Погодин 1848][ИГР-3][Соловьев 1988: С. 505] (次注160も参照)。この волок の西側のノヴゴロドの地 (Новгородская земля) は五つの行政区画 (пятина) に分けられて徴税や行政の体制が整えられていたのに対して, その東側のヴォルクの向こうの, いわゆる「ザヴォロチエ地方」 (Заволочье) では, 徴税部隊を派遣して原住民 (植民スラヴ人やチューズ人などのフィン=ウゴル系の原住民) からの徴税・徴発を行っていた。この場合, ペロオゼロ湖 (Белоозеро) 周辺とシェクスナ川沿岸地帯では, ロストフ=スーズダリ公領の徴税官が活動しており, 管轄権を巡る紛争が常に起こっており, この場所での紛争だろう。

が斃れただけだった¹⁶⁰⁾。そしてノヴゴロド人は撤退した。

〔ノヴゴロド人は〕再び戻ってきて、すべての貢税を取った。他方、スーズダリの領民(смерд)からも別の〔貢税〕を取った。そして、かれらはみな無事に帰って来た。

同じ年の冬¹⁶¹⁾、スーズダリ人がアンドイ[D173]の息子¹⁶²⁾〔ムスチスラフ[D1732]〕とともに、ロマン[J1]とムスチスラフ[J5]が、スモレンスク人およびトロペツ人とともに¹⁶³⁾、ムーロム人とリャザン人が二人の公¹⁶⁴⁾とともに、ポロツク公¹⁶⁵⁾がポロツク人とともに、そしてまったくの全てのルーシの地¹⁶⁶⁾が、ノヴゴロドの城下に到来した。

ノヴゴロド人は、イジャスラフ[D112:I]の孫のロマン・ムスチスラヴィチ公[I11]、および

160) この戦闘については、「しるしの聖母」(Знамение Богородицы) イコンの加護によってノヴゴロド勢に勝利がもたらされたとする伝説が伝えられ、それを主題とした奇跡物語『ノヴゴロド人の対スーズダリ人戦闘物語』(Сказание о битве новгородцев с суздальцами)が、14世紀中頃に成立している。その冒頭には、戦闘の前史として、ダニスラフの徴税遠征について次のような記述がある「その時、ドヴィナ人(двиняни)はノヴゴロドに貢税を払おうとせず、スーズダリ公アンドレイに服従していた。ノヴゴロド人はドヴィナ〔川流域〕に徴税官ダニスラフ・ラズーチニチを派遣した。かれと一緒に、諸街区から100人ずつの家臣(мужи)が行った。アンドレイ公はこれを聞くと、対抗するために自分の家臣たち、すなわち1500人の軍勢を派遣した。かれら〔軍勢〕はペロオゼロ(Белоозеро)でかれら〔ノヴゴロド人〕を妨害し始めた。戦いが始まった。神はノヴゴロドの家臣を助けた。アンドレイの部隊の800人の家臣が殺され、他の〔家臣は〕逃げた。ノヴゴロド人で倒れたのは15人だった」[БЛДР Т. 6: С. 444]。これによれば、戦闘は徴税部隊がドヴィナ川流域へと向かう途中のペロオゼロで起こったとされており、ヴォロク(連水陸路)を超えたすぐのあたりということになる。なお、『物語』ではアンドレイ側の軍勢と死者の数が少なくなっているが、これは年代記の数(7000人と1300人)が多すぎると判断した後代の編者による改変によるものだろう。

161) 記事の配列から1169/70年の冬のことで、1170年2月のこと。以下の事件が、『ノヴゴロド人の対スーズダリ人戦闘物語』(前注)の主な戦闘を述べたもの。またこの戦闘場面とイコンの奇跡を描いたイコンも存在する。

162) この「アンドレイの息子」(Андрѣевичъ)はムスチスラフ[D1732]のこと。*Лер*6677年と*Ин*6681年に共通の並行記事では、「アンドレイは息子のムスチスラフ[D1732]に、すべての従士たちとともに派遣した」[ПСРЛ Т.1: Стб. 361][ПСРЛ Т.2: Стб. 559-560]と、「息子」が「ムスチスラフ」であると名指されている。このムスチスラフは、前年1169年のキエフ攻略遠征、1170/71年冬のブルガール人討伐遠征にも、父アンドレイ愛神公の命令を受けて、遠征軍を指揮している。

163) 当時ロマン[J1]はスモレンスク公だったことから、構文から判断して、年少のムスチスラフ[J5]はトロペツ公であり、配下のトロペツ人を率いて遠征に加わったと考えられる。

164) 「ムーロム人とリャザン人が二人の公とともに」(с муромци и с рязанци съ двѣма князьма)の二つ都市からの部隊は1169年キエフ攻略遠征にも参加している。*Ин*6681年、*Лер*6677年記事にもムーロムとリャザンからそれぞれ公が派遣されたこととあるが、その名は記されていない。

165) この「ポロツク公」(полоцкый князь)は当時ポロツク公だったフセスラフ・ヴァシリコヴィチ[L221]のこと。スモレンスク公との同盟関係によって動員されたものだろう。

166) 「まったくの全てのルーシの地」(вся земля просто Руская)の表現については〔ノヴゴロド第一年代記(5):注68〕を参照。遠征軍が大軍であったことについては、*Ин*6681年記事に「これは非常な大軍であり、数えることができないくらいだった」[ПСРЛ Т.2: Стб. 560]とある。

市長官ヤクーン [A-26] の下に布陣して、内城 (город) の周りに城柵¹⁶⁷⁾ を築いた。

かれら〔スーズダリ軍〕は日曜日¹⁶⁸⁾に城下に集合して、3日のあいだ協議を行い¹⁶⁹⁾、4日目の水曜日¹⁷⁰⁾に〔スーズダリ軍〕は実力で〔内城への〕突入をはかった。そして終日戦い、夕方近くに、当時まだ子供だった¹⁷¹⁾ ロマン公 [I11] は、ノヴゴロド人とともにかれらを打負かした。十字架の力と聖なる聖母、および篤信のイリヤ親王〔イオアン二世〕の祈りによるもので、2月25日の帝都総主教聖タラシオスの祝祭日¹⁷²⁾のことだった。

ある者たちを斬り殺し、他の者たちを捕虜に獲った。残りの者たちは無残にも逃走した。そしてスーズダリ人は、一人あたり2ノガタ¹⁷³⁾で売買¹⁷⁴⁾された¹⁷⁵⁾。

167) 「城柵」にあたる語は、*Сн, Ак острогъ; Км город* と異読がある。前者が本来の読み。後者は *устроиша город около города* の句が不自然であり、解説的に読み替えたと考えられる。*около города* の *город* はソフィア地区を囲む「外城(外周城市)」(*окольный город*)を指すという解釈も可能だが(都市・城市として「ノヴゴロド」と言うときには、通常はこの外城の内側を指している)、イコン画を見ると城壁に矢を射かけてことから、「内城」(*детинец*)のことと判断した。*острог*(城柵、逆茂木)とは、丸太や木枝の先端を鋭くとがらせたものを柵状に組んだ防御設備のことで、内城を囲む濠の上の土塁に設置したのだろう。

168) この「日曜日に」(*в нѣделю*)は1170年2月22日の日曜日のこと。

169) 「協議を行い」にあたる語は異読がある。*Сн, Ак съѣздися*(協議を行い); *Км сходитася промежи себе о уряди*(両者は約定について双方の間で協議を行い)。これは、のちに描かれたイコン(上注161)の場面にあるように、包囲したスーズダリ勢と籠城したノヴゴロド勢の間で行われた講和についての協議のことを言っている。*Км*の読みは、そのことを説明的に改変したもの。

170) 「4日目の水曜日」は1170年2月25日にあたり、聖タラシオス(次注)の祝祭日に相当する。

171) 「当時まだ子供だった」には異読があり、*Сн* テキストなし; *Ак нѣ дѣтескъ быше; Км нѣ еще бо тогда дѣтескъ быше сын*。構文の不自然さから見て、*Ак, Км*の読みは明らかに後代の編者の補足によるもの。ロマン [I11] は1170年時点で13-14歳と考えられ(上注119)、たしかに少年の年齢だった。

172) 異読があり、*Сн на святого епископа Тарасия; Ак на святого Тарасия; Км на память святого отца Тарасия, патриарха Цесаряграда*。*Км*は解説的な補足による読みだろう。聖タラシオス(*Πατριάρχης Ταράσιος*)はコンスタンティノポリス総主教(784-806)で、第七回全地公会議でイコン崇拜を復活させ、列聖されている。

173) 「ノガタ」(*ногата*)は『ルーシ法典』ではグリヴナ(*гривна*)の1/20の価値の金銭単位で、銀重量換算すると2.55g。2ノガタなら銀重量5.1gに相当し、捕虜の売値としては安価だった。ちなみに、「2ノガタ」は、次の6678(1170)年記事の物価高騰時のパン一個の値段に相当している(下注178)。

174) 「売買」にあたる語は異読があり、*Сн, Ак купляху; Км продаваху*。前者が本来の読みで、後者はノヴゴロド人の立場から書き換えたものだろう。『物語』の後代の写本では *продати, продавати* の動詞が使われている[Дмитриев 1976: С. 52]。なお、戦争捕虜は貿易商人や外国からの商人(*гость*)の手によって外国に奴隷として売られた。さらに身代金を取って解放した場合もあった。

175) この、多数の捕虜を獲ったため売値が安くなったという内容の文には、20年後ほど後に成立したとされる『イーゴリ軍記』(*Слово о полку Игореве*)に類似の表現がある。それは「もしそなたがいれば、女奴隷(チャガ)は1ノガタの値、男奴隷(コシチェイ)は1レザナの値になっただろう」(125. *Аже бы ты быть, то была бы чага по ногатѣ, а кощей по резанѣ*)というもので、このような表現は、大きな勝利を讃えるときの当時の定型表現だったのだろう。

6678(1170) 年

ノヴゴロドで「モノの」値段が高くなった¹⁷⁶⁾。ライ麦 1 カヂを 4 グリヴナで¹⁷⁷⁾、パン 1 個を 2 ノガタ¹⁷⁸⁾で、また蜂蜜は 1 プードを 10 クナで¹⁷⁹⁾ 売買していた。[222]

そして、ノヴゴロド人は協議して、ロマン公 [I11] に「去るように」道を示した¹⁸⁰⁾。他方で、[ノヴゴロド人] 自身はアンドレイ [D173] のもとに、「[和平要請は] われらのまったくの自由

176) このノヴゴロド城市における物価高騰は、記事の時系列から見て 1170 年春～夏のこと。これまでの記事では高騰の原因は自然災害によるものだったが、ここでは原因についての言及がない。おそらく、1170 年 2 月の戦いでノヴゴロド城市攻略ができなかったスーズダリ勢（アンドレイ愛神公 [D173]）とスモレンスク勢（ロマン・ロスチスラヴィチ [J1]）が、武力の威嚇によって食料（主に穀物）搬入を阻止したことが、物価高騰の原因と思われる。ここでは、ノヴゴロドの経済的弱点を言うのを憚って、故意に言及しなかったのだろう。

177) この 18 年後の 6696(1188) 年の物価高騰の記事では「ライ麦は 1 カヂ 6 グリヴナ」と、さらに高騰している。

178) *HI*1123 年記事で、エミ人討伐遠征の道中は過酷であり「パン一個を 1 ノガタで買った」とある。2 ノガタはさらにそのときの倍額であることから、高騰の程度は酷かったのだろう。アンドレイ愛神公の食糧封鎖策（上注 176）は非常に効果があったと思われる。なお、6696(1188) 年の物価高騰の記事（前注）にも「パンを一個 2 ノガタで買っていた」という記述がある。

179) 「プード」(пуд) は重量単位で 16.38kg に相当する。また、「10 クナ」は、当時のグリヴナに基づく貨幣価値では、0.2 グリヴナに相当する。なお、『ルーシ法典』（広版）の第 76 条に蜂蜜を巣洞（うろ）から盗み出し回復不可能な場合の賠償金が、同じ 10 クナとされており（おそらく取引単位の 1 プードあたり）、罰金相当額の高額であることがわかる。

180) 「道を示した」(показаша путь) は自主的な退去を促したということで、本人に大きな非がないような場合に用いられる。なお、*Ип*6681 年記事にはロマン退去の経緯が詳しく書かれている。それによれば、ロマンは父ムスチスラフ死去（下注 190）の報を受けて（1070 年 8 月末～9 月初め）、自分の従士たちやノヴゴロドの支持者と協議の上で、もはやノヴゴロドの公座を維持することができないと判断して、兄弟たちのいるヴラジミル＝ヴォルィンスキイへと出発したという [ИПЧП T. 2: Сг6. 561-562]。このロマンの公座からの退去は、ロマンの側の事情によるところが大きかったのだろう。

意志による¹⁸¹⁾。われらに公を与えよ¹⁸²⁾ という和平を求める¹⁸³⁾ 使者を遣った¹⁸⁴⁾。

同じ年、リューリク・ロスチスラヴィチ¹⁸⁵⁾ [J2] が、ノヴゴロドにやって来た¹⁸⁶⁾。10月4日《聖イェロテオスの祝祭日》¹⁸⁷⁾ だった。

同じ年、神を愛するノヴゴロド大主教イリヤ〔イオアン二世〕は、兄弟のガヴリール¹⁸⁸⁾ (Гаврил) とともに、聖なる聖母受胎告知の修道院と教会¹⁸⁹⁾ を建立した。

181) 「われら（自分たち）のまったくの自由意志」（на всѣи воли свои）とは、アンドレイ愛神公の食料封鎖に屈服して、不承不承（по неволе）和平を求めたのではなく、公が不在になったという別の理由（前注）から和平を求めたと、ノヴゴロドの使者は主張しているのだろう。

182) この文には異読があり、Сн по миръ на всѣи воли свои; Ак, Км на мир на всеи воли нашей и даи же намъ князь. 前者が本来の読みで、後者はこれを敷衍・解釈した補足的な改変である。HI-M(Ак, Км)の「アンドレイに公の派遣を求めた」という補足的解釈の典拠は不明だが、現実にはスモレンスク領からリューリク [J2] が公として赴いていることから（下注 185）、この補足はやや誤った解釈と言えるだろう。

183) 「和平を求める」（по мир; на мир）とは、の基本的な意味は、和議によって戦争状態（ратъ）を解消することであり、ここでは、ノヴゴロドの使者がアンドレイと交渉して、武力による食料搬入阻止をやめさせ、その代わりに新しい公の受け入れることを合意したということだろう。

184) この記事によって、ノヴゴロド行政府の主導権が、ムスチスラフ [I1] 一門支持派貴族から、アンドレイ [D173] 一門支持派貴族の手へと移ったことが分かる。記事には記されていないが、この時点（1170年9月頃）で、1170年2月にロマン公 [I11] を補佐して籠城戦を成功させた市長官ヤクーン（上注 139）はその職を離れ、アンドレイ派のジロスラフ（Жирслав）が市長官に選ばれている。

185) リューリク [J2] については HI ではここが初めての言及。かれは、1168-1173 年にオヴルーチ（Овруч）の公座にあった。In6681 年記事にはかれのノヴゴロド行の経緯が詳しく、それによれば、アンドレイ愛神公 [D173] がリューリクのもとに使者を遣って「かれに大ノヴゴロドを与えた」。そして、リューリクはオヴルーチから先ずスモレンスクへ行き、弟のダヴィド [J3] に自分の領地（オヴルーチ）の管理を委ねて、1170年8月8日にノヴゴロドへ向かったという [ПСРЛ Т. 2: Стб. 562]。

186) 異読があり、Сн, Ак вниде（入城した）; Км прииде（やって来た）。

187) 「聖イェロテオスの祝祭日」（на святого Иерофея）は Сн のみの読みで、HI-M (Ак, Км) にはない。聖イェロテオス（Иерофей; θεομωθέτης Ἱερόθεος）は 1 世紀のアテネの殉教司祭で、祝祭日は 10 月 4 日（1170 年）。

188) 「兄弟のガヴリール」（Гаврил）は、大主教イオアン（イリヤ）の実の弟で、ノヴゴロド貴族の出身者。のちに兄の後継として大主教になり、1187 年 3 月 29 日～1193 年 5 月 24 日の期間大主教職に就き、死後列聖されている [Карпов 2017: С. 81-82]。「ノヴゴロド主教表」[109]（[ノヴゴロド第一年代記 (2): 注 621]）に死の前にスヒマ修道士となった「グリゴリーイ」の名でリストアップされている。これ以降の、大主教イオアン（イリヤ）が手掛けた建設事業の記事には、「兄弟とともに」（с братом）という句が繰り返し記されていることから（1179, 1180, 1182, 1184 年記事）、この句は、ガヴリールの事績を讃えるための後代の挿入である可能性が高い。

189) この「聖なる聖母受胎告知の修道院と教会」（монастырь и церковь святых Богородица Благовещение）は、内城から南西方向 3.7km ほどのミヤチノ湖（Мячино）南湖畔にある、現在のアルカージイ受胎告知教会（церковь Благовещения в Аркажах, на Мячине）に相当している。木造の教会を建て、そこに修道院を同時に設けたということ。1179 年には石造りの聖堂に建て替えられている [Великий Новгород 2009: С. 478]。

同じ年、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] がヴラジミルで逝去した¹⁹⁰⁾。

同じ年、キエフにおいて、グレープ・ユーリエヴィチ [D178] が逝去した¹⁹¹⁾。そして、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] が〔キエフへ〕導かれた¹⁹²⁾。

6679(1171) 年

ウラジーミル [D115] 公がキエフで逝去した。〔かれは〕3ヶ月のあいだ公座にあった¹⁹³⁾。

同じ年、リユーリク公 [J2] が、ノヴゴロドにおいて市長官職をジロスラフ¹⁹⁴⁾ (Жирослав) [A-27] からとり上げ¹⁹⁵⁾、かれをノヴゴロドから¹⁹⁶⁾ 追放した。〔ジロスラフは〕スーズダリへ、アン

190) この記事は大きな異読があり、*Сн Володимиръ вѣнук* (ウラジーミルの孫) : *Ак, Км в Володимирѣ*. (ヴラジミルにおいて) となっている。ムスチスラフ [I1] の父はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112: I] だから、「ムスチスラフの孫」になり *Сн* の読みは誤認によるもの。キエフ公だったムスチスラフは、1069年3月のキエフ攻略によってヴラジミル=ヴォルィンスキイに逃げている。*Ин*6680年記事によれば、その後ムスチスラフは、1070年3月に大軍を率いてキエフに迫るが占領できず、4月13日にはヴラジミル=ヴォルィンスキイへ帰還している。そして、1170年8月19日にヴラジミルで病没している [ПСРЛ Т. 2: Стб. 549, 559]。以上のことから、*Нл-М(Ак, Км)* の読みが本来のものであることが分かる。

なお、ムスチスラフの死去がきっかけでロマン [I11] がノヴゴロドから退去したにもかかわらず (上注 180)、退去の記事が前に置かれており、さらに、1170年10月4日のリユーリク [J2] 到来記事 (上注 187) の後に8月のムスチスラフ死去の記事が置かれている時系列錯誤は、本年代記の編者が、遠いヴラジミル=ヴォルィンスキイにおける死去の日付を把握していなかったことによるだろう。

191) グレープ [D178] は、1169年3月のキエフ攻略でムスチスラフ [I1] が逃走した (上注 156) 後に、キエフの公座に就いていた。*Ин*6681年記事によれば逝去した (おそらく病没) のは1171年1月20日のことだった [ПСРЛ Т. 2: Стб. 563-564]。

192) *Ин*6681年記事によれば、ドロゴブージ (Дорогобужь) 公だったウラジーミル [D115] は、甥にあたるダヴィド [J3] とムスチスラフ [J5] の要請に応じて、キエフに向かい、1171年2月15日 (5日?) にキエフの公座に就いている [ПСРЛ Т. 2: Стб. 566]。ウラジーミルの生年は1131年であり [ПСРЛ Т. 2: Стб. 294]、当時は41歳の壮年だった。「導かれた」(введоша) とあるのは、このような受動的な公座就位のことを言っているのだろう。

193) ウラジーミル [D115] の死については、*Ин*6682年記事冒頭に、重病になり5月30日 (1171年) に逝去したとの記述がある。さらに公座にあったのは「全部で4か月のあいだ」とある、2月15日 (5日?) に公座に就いた (前注) ことから、実際には3か月と15日 (104日) (もしくは25日) だから、3か月とも4か月とも両方の解釈が可能である。

194) ジロスラフ (Жирослав) [A-27] は記事には記されていないが、1170年9月頃にヤクーンに代わって市長官になっていた (上注 184)。

195) この事件は、記事の時系列から判断すると1171年6月頃に起こっている。リユーリク [J2] は、アンドレイ愛神公 [D173] の命令によって1170年10月にノヴゴロド公座に就いた (上注 185, 186, 187) が、それから9ヶ月を経過して、アンドレイ派の市長官を追放したということは、アンドレイ公から政治的に離反したことが分かる。

196) 異読があり、*Сн из города; Ак, Км из Новагорода*。どちらが本来か定めがたいが、後者が前者の読みの明確化修正である可能性が高い。

ドレイ [D173] のもとへ¹⁹⁷⁾ 行った¹⁹⁸⁾。

その頃、市長官職はイヴァンコ・ザハリニチ¹⁹⁹⁾ (Иванкови Захарыничию) [A-28] に与えられた。

同じ年、キエフの公座にロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が座した²⁰⁰⁾。

同じ年の冬、リューリク [J2] はノヴゴロドから去って行った (иде)²⁰¹⁾。

そこで、ノヴゴロド人は、〔ノヴゴロド公に〕息子²⁰²⁾を求めて アンドレイ [D173] のもとへ使者を遣った²⁰³⁾。そして〔アンドレイは〕ジロスラフ [A-27] を、〔ノヴゴロドの〕市長官に就かせるために、自分の家臣とともに派遣した²⁰⁴⁾。

197) 異読があり、*Сн, Ак* къ Ондрееви; *Км* къ князю Андрѣю。この年の記事ではアンドレイ愛神公 [D173] に対しては、*князь* が付されていないことから、前者が本来の読みで、後者は後代の固有読み。

198) 「行った」には異読がある。*Сн, Ак, иде*; *Км* онъ пондѣше。前注と同じく、前者が本来の読みだろう。主語は文脈から判断してジロスラフのこと。ジロスラフが「アンドレイ公のもと」、すなわちスーズダリへの逃亡したは、かれが武力によって強制的に追われたからであり、支持する公のもとに身を寄せたのである。

199) 「イヴァンコ・ザハリニチ」[A-28] は市長官ザハリヤ [A-25] (上注 67) の息子と想定され、ネレフスキ区²⁰⁵⁾の貴族。リューリク公 [J2] 支持派、すなわち、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J] 一門支持派の貴族であり、父のザハリヤも、リューリクの兄弟スヴァトスラフ [J4] の支持派だった (上注 67 参照)。

200) *Ин* 6682 年 (および *Лер* 6680 記事) にはロマン [J1] のキエフ公座就位の経緯が記されている。それによれば、アンドレイ愛神公 [D173] がスモレンスクに使者を遣って、ロマン [J1] にキエフ公となることを指示し、これを受けてロマンは 1171 年 7 月にキエフ公座に就いている [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 567-568][ПСРЛ Т.1 : Стб. 364]。

201) 「同じ年の冬」は 1171/72 年冬の冬のこと。リューリク [J2] のノヴゴロド退去については、*Ин* 6681 年記事に「この年の冬、リューリクがノヴゴロドから立ち去った」(выиде Рюрик из Новгорода) とあり、*Лер* 6682 年記事冒頭には「リューリクがノヴゴロドから逃げ出した」(выбѣже Рюрик из Новгорода) とある。この二つの記事の時系列から判断して、1172 年 3 月頃である可能性が高い。リューリクは 1171 年 6 月頃にはアンドレイの影響から離れ、ノヴゴロド行政において独自路線をとっていたが、これに反発したアンドレイ支持派の貴族に半ば追放されたのではないかと推察される。

202) 異読があり、*Сн* по князь (公を求めて) ; *Ак, Км* по сынъ (息子を求めて) となっている。

203) アンドレイ愛神公のもとへのノヴゴロド人使節については、*Ин, Лер* ともに同じ記事が、上注 201 のリューリク退去記事の直後に「その後、ノヴゴロド人はスーズダリのアンドレイ公に使者を派遣した」とある。

204) ジロスラフは、1171 年 6 月頃にリューリクの手で市長官職を解かれ、スーズダリのアンドレイのもとに亡命しているが (上注 195, 198)、リューリクの退去とノヴゴロド人のアンドレイへの公派遣要請 (前注) にともなって、再度ノヴゴロド市長官職に就いている。ノヴゴロド内政におけるアンドレイ一門派貴族の支持を固め、新しい公の出迎えを準備するために、先行して派遣されたのである。「家臣とともに」とは、予想される反アンドレイ派貴族たちの抵抗を排除するために付けられた、アンドレイの従士たちを指しているだろう。

6680〔1172〕年

ユーリイ [D17] の孫であるユーリイ・アンドレエヴィチ公²⁰⁵⁾ [D1733] がノヴゴロドに到着した²⁰⁶⁾。

同じ年、ネレフスキ区 (Неревский конец)²⁰⁷⁾ に、石造りの聖ヤコブ教会が定礎された²⁰⁸⁾。

同じ年、冬のこと²⁰⁹⁾、ロマン・ロスチスヴィチ [J1] が自らの意志でキエフを去り²¹⁰⁾、ミハルコ・ユーリエヴィチ [D175] がキエフの公座に就いた²¹¹⁾。

同じ年、冬のこと、大主教イリヤ〔イオアン二世〕がアンドレイ [D173] のもとへ、ヴラジ

205) ユーリイ [D1733] の生年は 1060 年頃と推定されており、当時はまだ少年だった。ノヴゴロド市長官ジロスラフを初めてとするアンドレイ支持派の貴族の補佐による公支配が前提とされていた。

206) 記事の時系列から判断して、1172 年 3 月後半から 4 月にかけてのこと。*Ин, Лев* ともに同じ記事が、上注 203 の使節派遣記事の直後にあり「〔アンドレイは〕かれら〔ノヴゴロド人〕に自分の子ユーリイを与えた。かれは名誉をもって受け入れられた」[ПСРЛ Т. 2 : Стб. 566][ПСРЛ Т. 1 : Стб. 365] とある。

207) 「ネレフスキ区」(Неревский конец) はソフィア地区にある区 (конец) のひとつで、その名称はフィン＝ウゴル系の部族「ノロマ人」(норомы) (別形「ネレヴァ人」(нерева)) から発している。「ナルヴァ川」(река Нарва) の語源もこの部族名に求めることができる [Янин 2008: С. 27]。なお、ここで「ネレフスキ区に」と言っているのは、ソフィア地区のリューディン区 (Людин конец) ドブリニヤ街 (улица Добрынина) にもヤコブ教会があることから、区別するためである。

208) この「聖ヤコブ教会」(церковь камена святого Якова) は、「主の兄弟使徒ヤコブ」に献堂された教会で、ネレフスキ区のヤコヴ街 (Яковлева улица) にあった。完成についての記事はないが、1226、1459 年には建て替えについて記され、1299、1342 年の火事の記事で言及されている [Великий Новгород 2009: С. 529]。

209) *Км* に на зиму (冬のこと) とあるが、*Сн, Ак* にはこの句はない。*Км* 系列の写本における後代の挿入によるもので、信憑性に乏しい。

210) このロマン [J1] のキエフ公座からの退去については、*Ин*6682 年記事に詳しい。それによると、スーズダリのアンドレイ愛神公は「ロスチスラフ一族」に不信を抱くようになり、ロマン [J1] にキエフからの、ダヴィド [J3] にヴィシエゴロドからの、ムスチスラフ [J5] にベルゴロドからの退去を要求した。これを受けて、ロマンはキエフから、おそらく、1172 年後半 (8 月以降) に退去した [ПСРЛ Т. 2: Стб. 569-570]。「自らの意志で」(волею своею) とは、退去が武力による強制的なものではなかったということ。

211) アンドレイ愛神公の弟ミハルコ [D175] がキエフ公座に就いたことについては、*Ин*6682 年記事では異なった経緯が伝えられている。それによれば、アンドレイは確かにミハルコをキエフ公座に就けようとしたが、それまでトルチェスク (Торческ) にいたミハルコ自身はキエフに行くことを望まなかった。そのため、アンドレイは、弟のフセヴォロド [D177:K] と甥のヤロ波尔ク [D1712] をキエフに派遣し、フセヴォロドは、1173 年 2 月頃にキエフの公座に就いた。これに対して、ロスチスラフ一族諸公 (リューリク、ダヴィド、ムスチスラフ) はこれを認めないことをアンドレイに宣言し、キエフを攻めて、1173 年 3 月 24 日に攻略・入城し、リューリク [J2] がキエフの公座に就いている [ПСРЛ Т. 2: Стб. 570-571]。つまり、本年代記のミハルコ [D175] のキエフ公座就位は名目的なものであり、年代記記者が不確実な情報に基づいて記事を書いたことによるものと思われる。

ミル〔・ザレスキイ〕へと行った。真っ正直な²¹²⁾〔ヴラジミル行き〕だった²¹³⁾。

この頃、イヴァンコ・ザハリイニチ (Иванко Захарьиничъ) [A-28] に、再び市長官職が与えられた²¹⁴⁾。[223]

6681(1173) 年

ユーリイ・アンドレエヴィチ [D1733] は、ノヴゴロド人、ロストフ人とともに、ロスチスラフ [D116:J] の息子たち²¹⁵⁾ を攻めるべく進軍した²¹⁶⁾。そして、〔かれらを〕キエフから追放し

212) この句には異読があり、*Сн на всю правду; Ак ходилъ на всю правду; Км ходилъ бяше на всю правду*。「真っ正直な」は *на всю правду* の句の訳。これは、交渉事についての定型表現で、策を弄することなく、本心だけを伝えるような場合に用いられる。

213) 重要な政治的交渉のために、大主教自らが使節としてロストフ＝スーズダリへ赴くことについては、1154年の主教ニフォントによるユーリイ手長公 [D17] 訪問がある〔ノヴゴロド第一年代記(5): 注464〕。ここでは、大主教イリヤ (イオアン二世) は、アンドレイ愛神公の要求に従ってヴラジミル＝ザレスキイへ行き、まだ年少のユーリイ [D1733] をノヴゴロド公として保持し、後ろ盾になること、ロスチスラフ一門の諸公と同盟しないことを誓わされたのではないか。

214) 「イヴァンコ・ザハリイニチ」(Иванко Захарьинич) については上注 199 を参照。かれは先に市長官だったときには親リユーリク公 [J2] 派であり、スモレンスクのロスチスラフ一門支持陣営の市長官だった。

215) 「ロスチスラフの息子たち」は異読があり、*Сн на Ростиславице; Ак на Ростиславича; Км на Ростиславица*。全て複数対格のヴァリエーション形。具体的には当時のキエフ公リユーリク [J2] およびヴィシェゴロド公のダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5] を指している。

216) この遠征は 6681 年記事の冒頭に置かれており (*Ип* では 6682 年記事冒頭)、またダヴィド [J3] とリユーリク [J2] によるキエフ公座奪取のクーデター (1173 年は 3 月 24 日夜) (次注) を受けて行われたことから、出陣は 1173 年 5 月～6 月頃のことと考えられる。

本記事の遠征軍のヴィシェゴロド包囲戦については、*Ип* 6682 年記事に長い物語 ([ПСРЛ Т. 2: Стб. 572-578]) が記されている。それによると、アンドレイ愛神公 [D173] はキエフ公リユーリク [J2] に対して、グレーブ公 [D178] の死に責任があるキエフ貴族の処罰を求めたが叶えられなかったため、1173 年に「怒りを発して」、ロスチスラフ一族 (リユーリク、ダヴィド [J3]、ムスチスラフ [J5]) にルーシの地からの退去を要求する使者を派遣する。そして、使者が侮辱されたことを知り、息子のノヴゴロド公ユーリイ [D1733] と配下の貴族ボリスに対して、キエフへ遠征してロスチスラフ一族を追放することを命じた。アンドレイが集めた軍兵は「配下のロストフ人、スーズダリ人、ヴラジミル人、ペレヤスラヴリ人、ペロゼロ人、ムーロム人、ノヴゴロド人、リャザン人でその数は 5 万に及んだ」([ПСРЛ Т. 2: Стб. 573]) として、大遠征であったことが分かる。アンドレイはさらに、ポロツク、トゥーロフ等の諸公にも遠征を命じた。ユーリイの遠征軍は途中でオレーグ一族 (スヴァトスラフ [C411:G] と兄弟たち) と合流し、さらにミハルコ [D175]、フセヴォロド [D177:K]、ムスチスラフ [D1711]、ヤロ波尔ク [D1712] 等も加わって、キエフへと迫った。

なお *Леп* 6682 年記事では、ダヴィド [J3] とリユーリク [J2] がキエフに入城したとき (1173 年 3 月 24 日夜) に、フセヴォロド [D177:K] とヤロ波尔ク [D1712] を捕らえたことを、遠征の直接の理由としている。

た²¹⁷⁾。そして〔遠征軍は〕ヴィシエゴロドの城下に7週間布陣した²¹⁸⁾。それから,〔ユーリイの遠征軍は〕全員が無事にノヴゴロドに帰還した。

他方, ヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] は, キエフ〔の公座〕に座した²¹⁹⁾。

同じ年, ノヴゴロド大主教イリヤ〔イオアン二世〕が《ノヴゴロドにおいて》内城にある²²⁰⁾ 聖殉教者ボリスとグレーブの石造りの教会²²¹⁾を献堂した。10月14日のことである²²²⁾。

さらに,〔大主教イリヤは〕聖ゲオルギオス〔ユーリイ修道院〕の門上の《石造りの》聖救世主(святого Спаса)教会を〔献堂した〕²²³⁾。

217) *Ип*6682 年記事によれば, キエフ公リユーリク [J2] はキエフ城内に閉じ籠ることはせず, 自らベルゴロドへ行き, そこで籠城したと記されている [ПСРЛ Т.2: Стб. 575]。

218) さらに, *Ип*6682 年記事によれば, ムスチスラフ [J5] はダヴィド [J3] の部隊とともにヴィシエゴロドで籠城し, ダヴィド自身は援軍要請のため, ガーリチへ向かった [ПСРЛ Т.2: Стб. 575]。遠征軍がヴィシエゴロドを包囲したのは, *Ип* の物語によれば, 1173 年 9 月 8 日であり, 20 人の諸公が参戦したという (*Лер* 記事では派遣された諸公は 20 人とある)。指揮は年長者のスヴァトスラフ [C411:G] がとった。ヴィシエゴロドのムスチスラフ [J5] は, 最初は出撃戦を敢行したが, その後は籠城に移り, 包囲戦は「9 週間」のあいだ続いたとある (*Лар* 並行記事も同じく「9 週間」)。その場合, 包囲戦は 1173 年 9 月～11 月の期間になる。その後, ルチェスク公ヤロスラフ [I2] が軍を率いてやってきて, ロスチスラフ一族と手を結んだことから, 包囲軍はドニエブル川を渡って逃げ出し, この「ヴィシエゴロド包囲戦」は包囲側のアンドレイ陣営の撤退によって終わった [ПСРЛ Т.2: Стб. 575-577]。

本記事では, 包囲期間は「7 週間」と *Ип*, *Лер* 記事とは異なっており, またノヴゴロド人はあたかも戦勝凱旋したように書かれているが, これは, 史料を年代記記者がノヴゴロドびいきに構成したことによっているだろう。実際の包囲戦はヴィシエゴロドを攻略できず, 遠征軍側に成果をもたらさずに終わっている。

219) ヤロスラフ [I2] のキエフ入城は, 1173 年 11 月後半だったと想定される。かれの公座就位について, *Ип*6682 年記事には「ロスチスラフ一族はヤロスラフ [I2] を年長者として定め, かれにキエフを引き渡した」[ПСРЛ Т.2: Стб. 578]とある。実際には, リユーリク [J2], ダヴィド [J3], ムスチスラフ [J5] 等が, ヴィシエゴロドの包囲をはね返した (上注 218) 功労者であるヤロスラフに報いたということだろう。

220) 「内城にある」(в градѣ)は *Сн*, *Ак* にあるが, *Км* にはない。*Км* では削除されたと考えられる。

221) この「聖ボリスとグレーブ教会」(церковь святую мученику Бориса и Глеба)は, 1167 年春にソトコ・シティニチが定礎した石造りの教会のことで, 大主教イオアン (イリヤ) も定礎式に参加していた (上注 110 参照)。6 年を経てようやく完成したことになり, 大規模な建築だったと推定される。

222) 10 月 14 日は, 3～4 世紀の聖人ナザリオス, ゲルバシオス, プロタシオス, ケルシオス (Назарий, Гервасий, Протасий, Келсий; Ναζάριος, Γερβάσιος, Προτάσιος, Κέλσιος) の祝祭日であり, 本来相互関係が薄いかれらは, 「聖殉教者」(святые мученики)としてひとまとめにこの日に祝祭されている。ボリスとグレーブ教会の献堂式がこの日に行われたのは, やはり, かれらが聖殉教者であることによると考えられる。

223) 「聖ユーリイ〔修道院〕」(у святого Георгия)において, 「聖なる救世主の変容」(Преображение Господне)に奉献された「門上教会」(надвратная церковь)が完成して, 大主教の手による献堂式が行われたということ。1166 年の項に定礎についての記事があり (上注 98 参照) 7 年かけてようやく完成したことになる。

6682(1174) 年

ヴラジミル [= ザレスキイ] で、アンドレイ公 [D173] を、かれの寵を受けていた者たち²²⁴⁾ (свои милостыници) が殺した。聖使徒ペテロとパウロの祝祭日の前日で、夜のことがあった²²⁵⁾。ボゴリュービイ²²⁶⁾ (Боголюбии) でかれ [アンドレイ] が眠っていたときだった。かれとともにいたのは年少の小姓²²⁷⁾ 一人だけだった。[かれらは] 館の衛視たちを殺し²²⁸⁾、階上の間²²⁹⁾ (сѣни) にやって来た。[アンドレイ] 公は気がついて、長剣を掴むと²³⁰⁾、[寝室の] 扉のところに立ち、かれらと闘った。かれらは多勢であり、[アンドレイ] 公は独りだけだった。[か

224) 「寵を受けていた者たち」(милостыници) の語は、*Ип* 並行記事に殺人者たちが「下賜された馬に」(на милостыньѣ конѣ) に略奪品を積み、「公から下賜された武器」(оружья княже милостыное) を手に取ったという記述があることから [ПСРЛ Т.2 : Стб. 589]、これを参照した可能性がある。なお、殺人者たちについては、*Ип*、*Лвр* ともに 20 人いたとされ (実際は 12 人だった可能性が高い)、そのうち 3 ~ 4 人の名が挙がっている。また、*Ип* 並行記事では、かれらについては他に、убиини, поробынцѣ の語が用いられている。

225) これは 1174 年 6 月 29 日 (土) のいわゆる「ペトロの日」(Петров день) の祝祭日を指しており、襲撃された時間は、その「前日の夜」(на канун... в нощи) だから、現在の時刻で言うと、6 月 28 日の日没から深夜頃まで (およそ 21 時 ~ 0 時頃) の時間帯、死亡が確認されたのは 6 月 29 日の早朝になる。なお、*Ип*、*Лвр* の並行記事にも殺害の日時についての記述があり、部分的に「土曜日の夜に殺され、日曜日 [6 月 30 日] の夜明けに」発覚したと記されている箇所があるが、これは、後代の物語作者の誤認によるものである。

226) 「ボゴリュービイ」(Боголюбии) は形容詞形の地名で、「神を愛する都市 (град)」の意味か。ヴラジミル = ザレスキイの中心地から北東へ 11km ほどはなれた付属城市で、現在のボゴリューボヴォ (Боголюбово) に相当する。ヴラジミルに公座を置いていたアンドレイにとって郊外屋敷 (居住地) の役割を果たしていた。この城市の創建については、15 世紀編集の *СЛ*、H46666(1158) 年の記事に「[アンドレイ] がボゴリューボエの城市を定礎した」(град заложи Боголюбое) という記事がある。歴史文献に用いられるアンドレイにつけられた「愛神公 (神を愛する)」(боголюбский) の通称 (あだ名) は、*Ип* 記事ではかれ自身に対する形容語としても用いられており、カラムジン は、このあだ名は城市名に由来すると推定している [ИГР-3: Прим. 26]。

227) この「小姓」(кощеи) とは、隷属民出身で公や貴族の身の回りに仕える従僕のこと [Словарь-СПИ 3: С. 16]。*Ип* 並行記事では、「かれの寵を受けた者プロコピイ」(Прокопѣ милостыник его) が公殺害後すぐに殺されたことあり [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 589]、明らかにこの人物のことを指している。ただし、милостыник の語は殺害者たちについてすでに用いられていることから (上注 224)、*Ип* 記者は кощеи という別の語を使ったと考えられる。*Ип* では порабок, паробок の語でも呼ばれている。

228) 「館の衛視たちを殺した」(избивше строжеви дворныя) ことについては、*Ип*、*Лвр* 並行記事には書かれていない。ノヴゴロドに伝えられた独自の情報に基づいた記述かもしれない。

229) 「階上の間」(сѣни) は公の館 (двор) の二階の屋根付きの回廊形式をもつ中心的な居住空間で、階下から階段を渡して登れるようになっていた。

230) 「長剣を掴むと」(попад меч) は、*Ип*、*Лвр* の並行記事では共通して「長剣を手にとろうとしたが、そこに剣はなかった。鍵番のアンバルが持ち去ってしまった。その長剣は聖ボリスの剣だった」と、別の書き方がなされている。*Ип*、*Лвр* では剣を失ったことが聖ボリスの加護を失ったことと結びつけられ、文学的粉飾がうかがえることから、本年代記 *Ип* 記事の記述が史実に近いと考えられる [Ковалев 2010: С. 4] も参照)。

れらは〕実力で押し寄せると、扉を破り、かれを討つべく突入した。そこで槍で²³¹⁾突き刺した。
〔アンドレイ公は〕自らの命を落とした。

大いなる騒乱(мятеж)が、大いなる災い(бѣда)がその地で起こった²³²⁾。多くの者が斃れた。
数えきれないほどだった²³³⁾。

そして、〔ロストフおよびヴラジミルの〕公座にはムスチスラフ・ロストスラヴィチ [D1711]
が、兄弟のヤロ波尔ク [D1712] が据えられた²³⁴⁾。

リユーリク [J2] がノヴゴロドから退去した²³⁵⁾。

同じ年、キエフにおいて、ムスチスラフ [D11] の孫であるロマン・ロストスラヴィチ [J1] が

231) 異読があり、*Сн* рогатинами; *Ак, Км* копий/копъи となっている。前者のロガティナという武器は、幅広の両刃の穂先と短く太い柄の槍で、狩に用いられたが武器にもなった。後者のコピイ(槍)は鋭い穂先の一般的な武器としての槍のこと。後者は難語置換による二次的なものだろう。

232) この мятеж(騒乱)と бѣда(災い)は、アンドレイ殺害直後に起こった、かれの領地における大規模な住民による掠奪のことを言っており、「この地で」(в земли тои)は、ノヴゴロドから見たロストフ＝スーズダリ＝ヴラジミルの地を指している。*Ин, Лер* 並行記事によれば、ボゴリユービイの館やその領地の従士たちの家が掠奪され、ヴラジミル城内でも掠奪が始まったという。

233) 「騒乱」で「斃れた」(паде), すなわち殺されたのは、*Ин, Лер* 並行記事によれば、アンドレイ配下の官吏である親衛従士や執行官(дѣтцкии, мечники)であり、過酷な徴税や裁判への住民の恨みが暴発したものだろう。その数が「無数」(яко и числа нѣту)だったということは *Ин, Лер* になく、ノヴゴロド独自の情報に拠るものかもしれない。

234) この二人の公座就位については複雑な経緯がある。*Ин*6683 年記事によれば、当時、アンドレイ愛神公の息子たちはノヴゴロド公の年少のユーリイ [D1733] を除いて亡くなっており、そこで、ヴラジミル人は、当時チェルニゴフのスヴァトスラフ [C411:G] の庇護を受けていた、ムスチスラフ [D1711] とヤロ波尔ク [D1712] (愛神公の甥にあたる)の兄弟を公として招聘することを決め、使者を派遣した(1174 年 7 月頃)。しかし、年少の兄弟ミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] もチェルニゴフにいたため、4 人で後継について話し合い、ミハルコとヤロ波尔クの二人が最初にロストフへ向かった。ところが、ロストフ人はミハルコを受け容れなかったため、ミハルコはいったんヴラジミル＝ザレスキイを占拠するが、ヴラジミル人の懇請を受けてチェルニゴフへ戻った。その結果、ヴラジミル人はヤロ波尔ク [D1712] を公として受け入れ、ロストフ人はムスチスラフ [D1711] を受け容れた。1174 年の 9 月以降のことと考えられる。なお、ここで公座に「据えた」(посадиша)主体は、ロストフ人およびヴラジミル人である。

235) この記事の原文 *Выиде Рюрикъ из Новагорода* は *Ак, Км* のみの読みで、*Сн* には記事そのものがない。リユーリク [J2] は 1171/72 年冬にノヴゴロド公座を去っており(上注 201)それ以降公座に就くことはなかった。それゆえ、この記事は時代錯誤であり、*Н1-М* 編集過程での編者の誤った挿入の結果である。

なお、*Ин*6681 年記事に *выиде Рюрик из Новгорода*。と全く同じ文言があり、また、本記事と同じ年紀の、*Лер*6682 年記事に *выбѣже Рюрик из Новгорода*。の文言があることから、*Ин* もしくは *Лер* (あるいは両方とも)の文言を見た 15 世紀の編者が、これを無批判に借用したのではないか。

〔公座に〕座した²³⁶⁾。

6683(1175)年

ユーリイ・アンドレイヴィチ公 [D1733] がノヴゴロドから連れ出された (выведоша)。そして、ムスチスラフ [D1711] は、自分の息子スヴァトスラフ²³⁷⁾ [D1711] をノヴゴロドで〔公として〕据えた²³⁸⁾。

同じ年〔の夏〕, 〔ムスチスラフ [D1711]〕自身がノヴゴロドに入城した。かれは、自分の父方の叔父ミハルコ (Михалко) [D175] と戦った。そして、かれ〔ムスチスラフ〕はノヴゴロド〔の公座に〕座した²³⁹⁾。

一方、ミハルコ [D175] はヴラジミル〔の公座〕に座した。そして、〔ミハルコは〕自分の弟のフセヴォロド [D177:K] をペレヤスラヴリ (Переяславль)〔の公座〕に据えた²⁴⁰⁾。

236) *In*6683 年の項の記事の最後に、このキエフ公座交代の記述がある。それによれば、スモレンスク公ロマン [J1] がキエフへ「兄弟たちの支援のために」到来した。これによって、ロスチスラフ一族の支持を失ったことを知ったキエフ公ヤロスラフ [I2] (上注 219) は、自主的に退去して自分の旧領ルチェフスクへ去り、ロマンがキエフ公座に就いた [ПСРЛ Т. 2: Стб. 600]。 *In* および *HI* の記事配置の時系列から見て、1175 年 1 月～2 月頃のことと考えられる。

237) 「スヴァトスラフを」 (Святослава) は *Ак*, *Км* の読みで、*Сн* にはない。これは、*HI-M* の編集段階で注記的に付加されたもの。その名はムスチスラフ追放の記事(下注 259)に記されており、ここからとったのだろう。

238) この記事の初めの「連れ出された」 (выведоша) とは、上位の権力者の命令で公座を退いたという意味があり、ここでは、ロストフ公になったムスチスラフ [D1711] (上注 234) が自らの権力基盤を固めるために、父アンドレイの後盾を失ったノヴゴロド公ユーリイ [D1733] を廃して、自分の息子スヴァトスラフ [D1711] をノヴゴロドの公座に据えたということ。このノヴゴロド公の交替は、記事配置の時系列から見て、1175 年春 (3 月～4 月) に行われた。

239) このムスチスラフ・ロスチスヴィチ公 [D1711] のノヴゴロド入りについては、*In*6683 年および 6684 年記事にその経緯が述べられている。ロストフ公となったムスチスラフ (上注 234) は所領の教会財産を取り上げ始め、民の不満を買うようになった。1175 年 5 月にチェルニゴフに退去していたミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] はヴラジミルへの遠征に出発し、6 月 15 日のヴラジミル郊外コロクシャ河岸のベレホヴォの平原 (Белехово поле) でムスチスラフ [D1711] 軍を打ち負かした。戦いに敗れたムスチスラフは、敗走して、息子がいるノヴゴロド (上注 237) へ入り、息子の代わりに公座に就いた。1175 年 6 月後半～7 月のことである。

なお、ムスチスラフ追放の記事 (下注 259) によれば、息子のスヴァトスラフ [D1711] はそのままノヴゴロドに留まって、父親の補佐をしていたと思われる。

240) *In* 6684 年記事によれば、ムスチスラフ [D1711] との戦いに勝利したミハルコ [D175] とフセヴォロド [D177:K] は、1175 年 6 月 15 日にヴラジミルに入城して市民の歓迎を受け、ミハルコはすぐにヴラジミルの公座に就いた。

なお、弟のフセヴォロドが、ペレヤスラヴリ (Переяславль) (現ペレスラヴリ=ザレスキイ、ロストフとスーズダリの間ほどに位置している) の公座に据えられたことについては、*In*, *Лер* の並行記事ではなく、*HI* の独自の情報である。

同じ年、デングーニツィ²⁴¹⁾ から (от Денгуницъ) 《火事が》燃え始めた。そして、三つの教会が焼けた。聖ミカエル²⁴²⁾ (святого Михаила), 聖ヤコブ²⁴³⁾ (святого Якова), 聖なる〔主の〕昇天²⁴⁴⁾ (святое Възнесение) [教会だった]。

この年、ノヴゴロドの市長官、イヴァンコ・ザハリニチ²⁴⁵⁾ (Иванко Захарыниці) [A-28] が逝去した。そして、ジロスラフ (Жирслав) [A-27] に再び〔市長官職が〕与えられた²⁴⁶⁾。

この年が終わる頃²⁴⁷⁾, [224]ジロスラフ (Жирслав) [A-27] が市長官職から追放された²⁴⁸⁾。そ

241) 「デングーニツィから」には異読があり、*Сн от Денгуницъ; Ак, Км от Денгунинъ*。このДенгуницъ/Денгуницъは、1113年の火事の記事で「ルカ地区」(Лукини)が火元として示されているのと同様に、火元となった地区(区 *конец* の一画)の呼び名と考えられる。火災に遭った三つの教会が、リューディン区のブルースカヤ街(улица Прусская)が内城を巡る土塁壁(земляной вал)にぶつかる辺りに集中していることから、ブルースカヤ街の中ほどあたりに位置していたのではないか。なお、Денгуницъの地名について、ザバーリンは、*Daugawa* (西ドヴィナ川のラトヴィア語名)から発しているとして、ラトヴィア人居住区のことと推定しているが[Забелин 1876: С. 184] 根拠に乏しい。ただ、ブルースカヤ街、すなわちバルト系のブルシア人居住区に近いことや、-ицы/-ничиの地名語尾は、バルト=フィン系の -i 語尾の地名をスラブ化するとき用いられる傾向があること(Nirgl > Ниргиничи, Vingl > Винницы)[Васильев 2005: С. 281]から推定して、バルト系の住民の居住区の名称だったのではないか。

242) 「ミカエル教会」は大天使ミカエル(「コロサイにおける大天使ミカエルの奇跡」(Чудо Архистратига Михаила в Хонех) 祝祭日9月6日)に献堂された教会で、リューディン区ブルースカヤ街(Прусская улица)に位置している。この地区を地盤とする市長も務めた貴族ミハイル(ミハルコ)・ステパノヴィチ[A-30]が自分の守護聖人に献堂した木造教会である可能性が高い(下注271参照)。

243) 「ヤコブ教会」は、主の兄弟使徒ヤコブに献堂された教区教会。リューディン区ドブリニャ街(Добрыня улица)の西端の、ブルースカヤ街に近いところに位置している。

244) 「聖主の昇天教会」は、ブルースカヤ街(Прусская улица)の西端で、土塁壁のかたわらにあった木造聖堂[Янин 2008: С. 106, прим. 16]。

245) 市長官イヴァンコ・ザハリニチについては上注199参照。1171年夏～秋からこの1175年夏～秋まで市長官職に就いていた。

246) ジロスラフはアンドレイ愛神公一門支持派の市長官で、1170年9月頃～1171年6月頃、1172年2月頃～1173年1月あるいは2月に市長官職にあり、今回(1175年夏～秋)は3度目の市長官の務めになる。前の2回はいずれもイヴァンコとの入れ替わりだった。かれが市長官になったのは、1175年6月末～7月の愛神公一門が推すムスチスラフ[D1711]のノヴゴロド公座就位(上注239)と連動していることは疑いない。かれの市長官就任はムスチスラフ公の後押しによるものだったか。

247) 1176年2月頃のことを言っている。

248) ジロスラフが短期(半年ほど)で市長官職から追放(выгнаша)されていることから、1176年2月頃のこの市長官職の交替は、貴族内部の政争によるもの、もしくは、ジロスラフが庇護者のノヴゴロド公ムスチスラフ[D1711]の寵を失った結果によるものだろう。

して、ザヴィド・《ネレヴィニチ》²⁴⁹⁾ (Завид Неревениць) [A-29] に「市長官職が」与えられた²⁵⁰⁾。

6684(1176) 年

ヴォルホフ川で5日のあいだ再び²⁵¹⁾ 逆流があった²⁵²⁾。

この年の春、ノヴゴロドでムスチスラフ公 [D1711] が結婚した。ヤクーン・ミロ斯拉ヴィチ (Якун Мирославич) [A-22] の娘を娶ったのである²⁵³⁾。

そしてその後、《ロストフ人》²⁵⁴⁾ (ростовцы) は「ムスチスラフ公を」自分たちのもとへと「公として」招聘した。「ムスチスラフは」自分の従士たちとともにロストフ (Ростов) へと向かっ

249) この父称には異読があり、*Сн* Неревениць; *Ак* Невероничь; *Км* Невероничь。HI-M の読みは、ノヴゴロド市長官表 Б の Завидь Невероничь [A-29] [НПЛ: С. 472] と同じである。この読みは HI-M の写本に限られているのに対して、Неревиничь は H4 6694(1186) 年記事に Гаврил Неревениц (Неревичь, Неревиничь) の名にも見えることから [ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, Вып. 1 (H4): С. 173], HI-C (*Сн*) の読みを本来とし、HI-M (*Ак*, *Км*) の読みは誤写による二次的なものとすべきだろう。その場合、このザヴィド (Завид) [A-29] は、1167 年に市長官ザハリヤ [A-25] とともに殺されたネレフスキイ区の貴族で伝令官 (бирич) だったネレヴィн (Неревин) (上注 128) の息子と考えることができる ([Янин 2003: С. 151] も参照)。

250) 新しい市長官「ザヴィド」(Завид) [A-29] は、ネレフスキイ区の貴族で、今回 (1176 年) が初めての市長官職だが、1177-80 年、1184-86 年にも市長官を務めている。その後の政治的経緯から見ると、ロスチスラフ一門 (スモレンスク) 諸公の支持派だったようである [Великий Новгород 2009: С. 180]。

251) 「再び」опять は *Сн*, *Км* にあり *Ак* にはない。年代記記者は前年にも増水があったことを考慮に入れているのかもしれないが、その記述はない。*Ак* では逆流がたびたびあるのは不自然なことから опять を削除したのだろう。

252) 異読があり、*Сн* на възводье; *Ак* на возвод; *Км* на зводь。どの読みも、「増水」と訳すことが可能だが、ここでは、「増水」すなわち水位の一時的上昇によって起こった川の水の逆流のことと理解すべきだろう。16 世紀の『シメオノフスカヤ年代記』(Симеоновская летопись) 6884(1376) 年記事には въ Новѣгородѣ въ Великомѣ иде рѣка Волховъ семь дней на возводъ, на въспять, рекше вверхъ [ПСРЛ Т. 18: С. 117] と「возводъ」が「逆流」であることが注記されている。

253) ヤクーン・ミロ斯拉ヴィチ [A-22] (上注 4 参照) はブルスカヤ街の貴族で、最初の市長官になったのは 1137 年 3 月であり、その時から 40 年もの時間が経っていることから、この時点でヤクーンは物故していたかもしれない。いずれにせよ、ムスチスラフ公 [D1711] は、1170 年対スーズダリ軍防衛戦の功労者でもある名門貴族の娘と結婚することによって、ノヴゴロドにおける公支配の基盤を固めようとしたのである。

254) ここは大きな異読があり、*Сн* ростовьци; *Ак*, *Км* Ростиславици (ロスチスラフの息子たち) となっている。*Ин*, *Лер* の記述では、ムスチスラフはロストフへ行っていることから、明らかに前者が本来の読みで、後者は HI-M 編者による誤解に基づく誤りである。

た²⁵⁵⁾。ノヴゴロドには息子〔スヴァトスラフ [D17111]〕を残した²⁵⁶⁾。〔ムスチスラフは〕ロストフに到着した。この時、ミハルコ [D175] は〔すでに〕死んでいたのである²⁵⁷⁾。

そして〔ムスチスラフは〕ロストフ人とスーズダリ人とともに〔ロストフから〕ヴラジミルへと進軍を始めた。フセヴォロド [D177:K] は、ヴラジミル人とペレヤスラヴリ人とともに、かれ〔ムスチスラフ〕を迎え撃とうとして、かれ〔ムスチスラフ〕に対抗して部隊を配置した。戦いが行われた。そして、双方の非常に多くの者が斃れた。そして、フセヴォロド [D177:K] が打ち勝った²⁵⁸⁾。

ムスチスラフ [D1711] はノヴゴロドへ戻って来た。そして、ノヴゴロド人はかれを受け入れず、かれ〔ムスチスラフ〕に対して、その息子スヴァトスラフ [D17111] とともに〔退去するよう〕道を示した²⁵⁹⁾。

255) ムスチスラフ [D1711] にとってロストフの公座就位は突然のことだった。*Ип* 6685 年並行記事によれば次のような経緯だった。1175 年にミハルコ [D175] はロストフ＝ヴラジミル公座をめぐる抗争に打ち勝って（その結果ムスチスラフはノヴゴロドへ逃げてその公座に就いた）ヴラジミル公になった。しかし、一年後の 1176 年 6 月 20 日に病没してしまう。これを知ったロストフ人と貴族たちは、ムスチスラフを招聘し、みずからは部隊を結成すると、ヴラジミルの公座を奪還しようとした。これに対して、ミハルコの弟フセヴォロド [D177:K] は、ヴラジミル人とともに迎撃部隊を進めた。そして、和を結んで、ロストフはムスチスラフの所領に、ヴラジミルはフセヴォロドの所領、スーズダリは共有の所領とすることで約定した。

256) この「息子」はあとに記されているように（下注 259）、ムスチスラフの前にノヴゴロド公だったスヴァトスラフ [D17111]（上注 237）のこと。

257) ミハルコ [D175] の死については、*Лер* 6685 年記事の冒頭にあり、1176 年 6 月 20 日に病没したと記されている。この文は умерль быше Михалко とブルパーフェクト（過去完了）形が使われていることから、ミハルコの死は、ムスチスラフ招聘の前の出来事だったと理解できる。

258) このムスチスラフ [D1711] とフセヴォロド [D177:K] との戦いは、研究の上では「1176 年リービツィの戦い」(Ливичская битва 1176 г.) と呼ばれているが、*Ип* にはテキストに欠落があり記述がないが、*Лер* 6685 年記事に経緯が詳しく記されている。それによると、1176 年 6 月 20 日のミハルコの死の直後から、ヴラジミル公フセヴォロドとロストフ公ムスチスラフの対立は顕在化した。フセヴォロドはヴラジミルから進撃し、途中でヴラジミル城市が空中に浮かぶ聖母イコンの奇蹟を見て勝利を確信すると、6 月 27 日にヴラジミルに近いリービツィの野における戦いでフセヴォロドはムスチスラフ軍を打ち負かした。ムスチスラフはロストフへと撤退し、そこから息子のいるノヴゴロドへと逃げた [ПСРЛ Т. 1: Стб. 382]。

259) *Лер* 6685 年記事には、ノヴゴロド人がムスチスラフに [D1711] に「道を示した」すなわち、公座からの退去を促した経緯が具体的に述べられている。それによると、「ムスチスラフはノヴゴロドに逃げ込むと、ノヴゴロド人はかれに言った。『あなたはかつてノヴゴロドをかかどで蹴ったことがある。あなたはかつて、自分の叔父のミハルコ [D175] を討伐しようとしたことがある。ロストフ人からの呼びかけによって。そして、神がミハルコ [D175] を召したとき、神はその弟のフセヴォロド [D177:K] との間で裁きを下したのです。なぜ、われらのところに來たのか?』。こう言って、ノヴゴロド人はムスチスラフを受け入れなかった。そこで、ムスチスラフはノヴゴロドからリャザンへ行き、自分の義理の兄弟であるリャザン公グレーブ [C542:H] に自分の受け入れを懇願した」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 382]。

そして、ノヴゴロド人はフセヴォロド [D177:K] から、自分のところ〔公座〕に、ヤロスラフ・ムスチスラヴィチ公²⁶⁰⁾ [D17A1] を受け容れた²⁶¹⁾。

その年の冬²⁶²⁾、ムスチスラフ [D1711] は、自分の女婿グレーブ²⁶³⁾ [C542:H]、および兄弟のヤロ波尔ク [D1712] とともに、スーズダリを攻める遠征を行った²⁶⁴⁾。かれらは、コロクシャ川²⁶⁵⁾ (Калакша) を越えたところで戦った。そして〔スーズダリ勢は〕リャザン人を打ち負かし、グレーブ [C542:H] とその息子〔ロマン [H2]〕 およびムスチスラフ [D1711] とその兄弟ヤロボ

260) 異読があり、*Сн Ярослав; Ак, Км князя Ярослава Мъстиславиц*。後者は補足解説的な後代の挿入である。ヤロスラフの父ムスチスラフ [D17A] は、1155 年 1 月 30 日にノヴゴロド公座に就いたが、1157 年 3 月にスモレンスク派ノヴゴロド貴族の決起によって、ロストフの兄アンドレイ愛神公のもとに逃亡していた。ヤロスラフ [D17A1] は、愛神公の庇護の下にロストフ＝スーズダリで成長したと考えられ、この時にはフセヴォロド [D177:K] の庇護を受けていたのだろう（上注 30 を参照）。

261) 上注 259 でも分かるように、ノヴゴロド行政府はムスチスラフ [D1711] の公としての資格を見限って公受け入れの政策転換を行い、ここでは、その敵手であるヴラジミル公フセヴォロド [D177:K] に公座を委ねたことになる。

262) この記事は、フセヴォロド大巢公のヴラジミル＝スーズダリにおける支配を決定づけた「コロクシャ川の戦い」(Сражение на Колокше) (下注 264) 前後の事件の記述であり、「冬」とは、1177 年 1 月～2 月頃に相当している。

263) 「女婿グレーブ」(зять Глѣб) とは、当時のリャザン公グレーブ・ロスチスラヴィチ [C542:H] のこと。この記事から、ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] (1151 年没) の娘(ムスチスラフ [D1711] とヤロスラフ公 [D1712] の姉妹) がグレーブに嫁いでいたことが分かる。研究ではかの女の名を「エフロシニア」(Евфросиния) とするものがあるが、その典拠は不明。

264) *Лвр* 6685 年記事によれば、リャザン公グレーブ [C542:H] は、「リーピーツィの戦い」(上注 258) に敗れノヴゴロド人から拒否された義理の兄弟ムスチスラフ [D1711] を受け入れて庇護を与えると、自らフセヴォロドの領地であるモスクワに遠征して焼き払うなどして、側面支援を行った。これに対してフセヴォロドは、1176/77 年冬に諸公を動員した大規模な、グレーブ討伐のリャザン遠征を行った。遠征軍がヴラジミルからコロムナに達したとき、グレーブとポロヴェツ人の軍がヴラジミル地方を攻撃し、ボゴリュービイを掠奪しているとの報告が入った。フセヴォロドはすぐに引き返し、1177 年 1 月末頃にヴラジミル近くのコロクシャ川(次注)で、グレーブ軍と対峙した。氷結が不十分で渡河できないことから、そこで一か月間川を挟んでにらみ合った。そして、3 月 6 日にグレーブ軍は渡河したが、反撃されて最初にムスチスラフ [D1711] の部隊が逃げ出し、まもなくグレーブ軍が総崩れになって、フセヴォロド軍の完勝で戦いは終わった[ПСРЛ Т. 1: Стб. 382-384]。研究上、この戦いは「1177 年コロクシャ川の戦い」(Сражение на Колокше 1177 г.) と呼ばれている。

265) コロクシャ川は、*Сн, Км* Калакша, *Ак* Колакша。他の史料では Колакша, Кулакша などのヴァリアントがある。現在のヴラジミル州のコロクシャ川(река Колокша)に相当する。クリャジマ川(Клязьма)左岸支流で、その河口からヴラジミルまでは 17km ほどしか離れていない。

ルク [D1712] を捕虜にとった²⁶⁶⁾。そしてかれらを牢舎に投獄した²⁶⁷⁾。

その年の冬、チューズ人のすべての地 (вся Чюдская земля) がプスコフへ (Плесков) 向けて到来した²⁶⁸⁾。〔プスコフ人は〕かれらと戦った。ヴァчесラフ (Вячеслав) とミキータ・ザハリニチ²⁶⁹⁾ (Микита Захарыничи) [B-5] とスタニミール (Станмир) とイヴァネツ (Иванец)²⁷⁰⁾ とその他の者たちが殺された。チューズ人 (чуди) も多数が撃ち殺された。

同じ年、ミハルコ・ステパノヴィチ²⁷¹⁾ (Михалко Степановиць) [A-30] が新しい聖ミカエル教会²⁷²⁾ を建てた。モイシ・ドマネジチ²⁷³⁾ (Моиси Доманѣжиць) は別の教会を、聖ヨハネ斬首〔教

266) *Леп* 6685 年記事によれば、ムスチスラフ [D1711] の弟ヤロ波尔ク [D1712] はコロクシャ川の戦いに参加しておらず、ここでは捕虜になっていない。本記事はやや不正確である。かれは、後にリャザンから身柄を引き渡されて捕虜となっている (下注 267)。なお、この戦いで捕虜となった者については、ここに挙げられた諸公の他に、グレーブの従士たちと、ボリス・ジヂスラヴィチ、オリスチン、デディレツなどのグレーブの側近たち (думцы) の名が記されている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 384]。

267) *Ин* 6685 年記事によれば、グレーブと息子のロマンおよびムスチスラフ [D1711] はヴラジミルに連行して投獄された。ヤロ波尔ク [D1712] については、リャザンから引き渡しを受けて、ヴラジミルに連行して投獄したという [ПСРЛ Т. 2: Стб. 605-606]。

268) これまで、チューズ人の地への掠奪遠征は 1113, 1116, 1131, 1134 年と繰り返し行われていたが、チューズ人からの遠征軍に対する防衛についての記事は、*Н1* においてはこれが初めて。おそらく、オチェラ＝アゼル地方 (下注 310) のチューズ人が、プスコフ方面へ向けて、プスコフ地方の徴税拠点地を破壊し、住民を掠奪するための遠征を行ったと思われる。

269) ミキータ (Микита) すなわち、ニキータ・ザハリチニ (Никита Захарьевич) [B-5] は 1174 年に没した市長官イヴァンコ (Иванко) [A-28] (上注 245) の兄弟で、市長官ザハリヤ [A-25] の息子ある可能性が高い。いずれにせよ、プスコフにおける防衛部隊の指揮を執った、貴族の出身の軍司令官である。

270) ここに名が挙がっている 4 人は、プスコフ防衛のために派遣されたノヴゴロド人部隊の軍司令官であろう。ミキータ (前注) は父称とともに記されているから貴族の出身者であり、残りの 3 人も特定はできないが身分のある市民だったはずである。

271) ミハルコ・ステパノヴィチ [A-30] は、ブルースカヤ街 (Прусская улица) (後のザゴロッキイ区 (Загородский конец)) を地盤とする親フセヴォロド [D177:K] 派として活発に活動した貴族。その一門は代々市長官を輩出している。この箇所が初めての言及だが、1176-77 年、1180-84 年、1186-89 年、1204-05 年と 4 回にわたって市長官職に就いている。1205 年 5 月 18 日にスヒマ修道士ミトロファンとして没している [Великий Новгород 2009: С. 297]。

272) この「新しいミカエル教会」(церковь нова святого Михаила) とは「新しい」(нова) とあることから、ブルースカヤ街 (Прусская улица) にあり、自らの守護聖人 (大天使ミカエル) に献じた教会が 1175 年に焼失したので (上注 242)、ミハルコ (前注) が木造で建て直したこと指している。なお、*H4*, *H5* では本記事は 1174 年の項に置かれている。

273) Доманег の名については、トロイツキイ区発掘による白樺文書 № 685 の発信人にその名が記されており、このモイシ (モイセイ) の父親である可能性もある [Янин 1998: С. 329-330]。

会]²⁷⁴⁾をチューヂンツェヴァ街²⁷⁵⁾(Чюдѣнцева улица)に〔建てた〕。

6685(1177)年

リャザン公のグレーブ[C542:H]が、《ヴラジミルの》²⁷⁶⁾牢舎で逝去した²⁷⁷⁾。

同じ時、ムスチスラフ公²⁷⁸⁾[D1711]は、兄弟のヤロボルク[D1712]とともに、その父方の叔父フセヴォロド[D177:K]の手で、目を潰された²⁷⁹⁾。〔フセヴォロドは〕かれら〔二人〕を解放してルーシへ²⁸⁰⁾と〔行かせた〕。

274) 「聖ヨハネ斬首〔教会〕」(святого Иоанна Усѣкновеніе главы)は同名の祝祭日(8月29日)に献堂された教会で、H3 並行記事では「木造の」(древяную), H5 では сруби (伐り出して組んだ)の語が付加されており木造建築だったことが分かる。また、H5 では1174年, H2, H4 では1180年の項に置かれている。1402年には石造りに建て替えられている。教区教会だったようで、16世紀初めまでチューヂンツェヴァ街(次注)の内城濠近くにあったが、その後場所を移動している[Великий Новгород 2009: С. 529]。

275) 「チューヂンツェヴァ街」(標準綴り Чудинцева улица)はザゴロツキイ区(Загородский конец)の通り。チューヂ人(чудь)出身の住民が多く居住していたことから名付けられたか。

276) 「ヴラジミルの」(Володимири)は前置詞なしの所格形。これは、Сн のみの読みで、Ак, Км にはない。後者における削除と考えられるが、この語を不要とした理由は不明。

277) グレーブが「牢舎」にいた(в порубѣ)ことについては、前年1176年記事に「投獄した」(порубиша)とあることから(上注267)確認できる。なお、Ил6685年記事によれば、キエフ公スヴァトスラフ[C411:G]は、フセヴォロド[D177:K]に使者を遣って、囚われのグレーブを解放してルーシに行かせるよう申し入れた。しかし、グレーブ自身は「自分はここで死んだ方がましだ」と言い、実際に1177年6月30日に没した、としている[ПСРЛ Т. 2: Стб. 606]。

278) ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ[D1711]は、このエピソードから、歴史学においては「無眼公」(Безокий)のあだ名で呼ばれることがある。

279) 支配者が、自分の政敵の眼を潰すという政治的な刑罰の方法は、1097年のヴァシリコ・ロスチスラヴィチ[A13]に対するものが有名。これはビザンツ式の刑罰であり、ルーシにも取り入れられたが、公族の間ではキリスト教的倫理に反するものとしてあまり受け入れられなかった[Савченко 2017: С. 5]。フセヴォロドが二人の叔父に対して、このような不名誉な刑罰を行ったのは、かれが少年時代(1162-69年)に流刑に遭ってコンスタンティノポリスに滞在していたことと関係があるかもしれない。

なお、本記事では、フセヴォロド公の主導でムスチスラフとヤロボルク兄弟は目を潰されたように書かれているが、Лер6685年記事では異なった経緯が記されている。それによると、フセヴォロドはリャザン人から引き渡されたヤロボルクを牢舎に入れたが、「数日の後、すべての〔ヴラジミルの〕人々と貴族たちが決起して、非常に多数の者たちが武器を手に公の館に押しかけて言った。〈なぜ二人を捕らえたままにしておくのだ。目を潰してしまおうじゃないか〉。フセヴォロド[D177:K]は悲しかった。人々を押さえることができず、かれらの多数の者の叫び声のために…」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 385-386]とある。この記事はすべての写本で記述が断絶しており、これ以降の事態の推移は分からないが、二人が目を潰されたのは、支配を受けたときの悪政に対するヴラジミル人の報復として書かれている。ここには、フセヴォロド公の罪を減じようとする、Лер記者の意図による編集がほどこされているかもしれない。

280) 「〔二人を〕ルーシへ行かせた」(пусти я в Русь)とは、スモレンスクのロマン公[J1]のもとに送り出したということではないか。

二人は両目が腐りかけた状態で連れられてきて、[225] スモレンスクに到達したとき、スミャディンの聖殉教者ボリスとグレーブ教会²⁸¹⁾にやって来た。そこで、たちまち神と聖なる女宰、われらが聖母および聖殉教者《ボリスとグレーブ》の恩寵が降った。二人は目が見えるようになったのである²⁸²⁾。

同じ年の秋、ネレフスキイ区 (Неревъскыи конецъ) が焼けた。イヴァンコの寡婦²⁸³⁾〔の館〕が火元だった。5つの教会が焼失した。

そして、冬にムスチスラフ公 [D1711] は、兄弟のヤロポルク [D1712] とともに〔スモレンスクから〕ノヴゴロドにやって来た。ノヴゴロド人はムスチスラフ [D1711] を〔ノヴゴロドの〕公座に据えた²⁸⁴⁾。ヤロポルクを [D1712] ノーヴィ・トルグ〔の公座に据え〕²⁸⁵⁾、ヤロスラフ [D17A1] をラムスキイのヴォロク (Ламскыи Волок) 〔の公座に据えた〕²⁸⁶⁾。このようにして、〔ノヴゴロド人は〕自由に統治を行った²⁸⁷⁾。

281) これは、本年代記 6653(1145) 記事に、「スミャディン (Смядин) でボリスとグレーブの石造りの教会が定礎された。スモレンスクでのことである」と記されている教会に相当する。〔ノヴゴロド第一年代記(5)：注 394〕参照。

282) 『ヴォスクレセンスカヤ年代記』(Воскресенская летопись)6685(1177) 年記事の末尾には、経緯がより詳しく記されている。それによれば、二人の眼が開いたのは、グレーブ殺害の記念日の9月5日(1177年)のことである [ПСРЛ Т. 7: Стб. 95]。

283) 「イヴァンコの寡婦」(от Иванковѣи) の *Сн Иванковее; Ак Иванковѣ; Км Иванковѣи* は Иванкоの所有形容詞 *Иванковъ* の女性生格形。ここでは、1175年に没した市長官イヴァンコ・ザハリチニ (Иванко Захаръницъ) [A-28] (上注 199) の寡婦のことを指しているだろう。なお、本記事は市長官の寡婦が一定の知名度と権威を保つという(最も有名な例は15世紀のイサーク・ボレツキイ (Исак Борецкыи) の寡婦マルファ (Марфа)) ノヴゴロドの政治風土の最も古い事例と考えられる。

284) 史料に直接の記述はないが、ノヴゴロド人は、スモレンスクのロマン公 [J1] のもとに庇護されていたムスチスラフとヤロポルク兄弟のところに使節団を派遣して、ノヴゴロドの公座に就くことを要請したのである。この1177/78年冬の公座交代によって、ノヴゴロドは、親フセヴォロド路線から、独立的な統治路線に政策を転換したことになる。

285) ノーヴィ・トルグ=トルジョク (Новый Торг, Торжок) は、ノヴゴロドにとっては、対ロストフ=ヴラジミル公(この時はフセヴォロド [D177:K])に対抗する最前線であり、この国との交易の拠点でもあった。ノヴゴロド行政府は、フセヴォロドとの間の外交・交易における調整役をヤロポルク [D1712] に期待したと思われる。

286) ムスチスラフの公座就位によって、それまでノヴゴロド公だったヤロスラフ [D17A1] (上注 260, フセヴォロドによって据えられた) は、ノヴゴロド、ロストフ=スーズダリ、スモレンスクの三国の国境地帯に位置するヴォロク・ラムスクへと追いやられた。かれは、これ以降はフセヴォロドの意志ではなく、ノヴゴロド人の意志に従うようになった。

287) 「自由に統治を行った」(управишася по волѣ)の主語はノヴゴロド人(новгородцы)であり、大主教と市長官・貴族からなるノヴゴロド行政府を指している。ノヴゴロドは、二人の亡命公を迎え入れることによって、これまでのように、ロストフ=スーズダリ公、キエフ公、スモレンスク公などが派遣した人物を公座に受け容れて、派遣元の諸公の意を汲んだ行政を行うのではなく、自分たちの意志だけを体现する、独立した公を持つことができた、という意味合いがある。

6686(1178) 年

《第 10 インディクトの 4 月 20 日》²⁸⁸⁾ ロスチスラフ [D171] の息子、ユーリイ [D17] の孫のムスチスラフ公 [D1711] が逝去した²⁸⁹⁾。〔遺体は〕聖ソフィア〔聖堂〕の啓蒙所 (притвор) に安置された²⁹⁰⁾。一方、かれの兄弟のヤロボルク²⁹¹⁾ [D1712] がノヴゴロドで公座に据えられた。

そして、フセヴォロド [D177:K] はノヴゴロドの大商人たちを捕らえた。そして、ノヴゴロ

288) この日付については *HI-C (Cn)* のみにあり、*HI-M* にはない。この「インディクト 10 年」は 1176 年 9 月 1 日～1177 年 8 月 31 日の期間に相当するが、もしこのインディクト年が正しければ、1177 年の 4 月 20 日ということになる。しかし、記事の年記と位置 (6686 年冒頭) および、これまでのムスチスラフの就位の年以降の時系列から見る限り、この没年は矛盾する。それゆえ、*HI-C (Cn)* の記者の誤記もしくは写字生の誤写 (例えば、.aī. の a が脱落して .i. になった) と見なして、ムスチスラフ無眼公は 1178 年 4 月 20 日に没したと考えるのが妥当だろう。

289) ムスチスラフ無眼公 [D1711] の死については、*Лвр*6687 年記事の冒頭に記述があり、「ノヴゴロドで、ユーリイ [D17] の孫であるムスチスラフ・ロスチスラヴィチ公 [D1711] が逝去した。復活祭の祝祭期間のことだった。〔遺体は〕聖ソフィア教会に埋葬された」(Преставися Новѣгородѣ пороздноѣ недѣлѣ князь Мстиславъ Ростиславичъ, внукъ Гюргевъ, положень бысть въ святѣи Софѣи.) とある。この「祝祭期間」(пороздноѣ недѣлѣ) は、праздная неделя のことで、「復活祭の祝祭の週」、つまり狭義には、復活祭から次の日曜日までの 1 週間である光明週間 (Пасхальная неделя) のことを指しているが、その場合、1178 年では、1178 年 4 月 9 日～4 月 15 日に当たっており、*HI-C* の 4 月 20 日と合致しない。ここでは、праздная неделя を広義に解釈して、次の週 (いわゆる、Антисаха, неделя вторая по Пасхе) までを含むと解釈し、前注の通り、*HI-C* の 4 月 20 日が史実に対応していると考えたい。

290) ソフィア聖堂の「啓蒙所」(притвор) については上注 78 を参照。*H4* 6686(1178) 年並行記事 (*H5* も同じ) では、同じ記事のあとに「ウラジーミル・ヤロスラヴィチ [A] の墓廟の内に」(в гробнице Володимире Ярославича) の追加の文言があり [ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, Вып. 1 (*H4*): С. 169]。さらに、17 世紀の *H3* の同年記事には въ гробницѣ Володимировъ Ярославича のあとに「受胎告知の〔副祭壇〕で、アプスの棺を設置した。それは、今にいたるまでそこにある」(у Богородицы честнаго ея Рождества, и устроиша гробъ аспидной, идѣже и донынѣ лежить) とさらなる追加文言がある [ПСРЛ Т. 3 (*H3*), 1841: С. 216]。以上の追加文言は、ムスチスラフ無眼公の遺体は最初「マルティエーリイ側廊」(Мартыревская паперть) (*HI* では「啓蒙所」と呼んでいる) に埋葬されたが、15 世紀に改葬して、南東のアプスにある「受胎告知副祭壇 (祭室)」(Рождественный предел) へ移したということ。このことは、考古学発掘によっても確認されている [Янин 1988: С. 131-135, 194-195 (схема № 8)]。

291) ヤロボルク [D1712] は兄ムスチスラフ [D1711] とともにノヴゴロドへ逃げて (上注 286)、トルジョクの公となっていたが、兄の死によって 1178 年 4 月にノヴゴロドの公座へと移されたのである。「ノヴゴロド公表」[№ 107] では、「兄弟ヤロボルクがトルジョクから連れてこられた」とある。

ド人はヤロ波尔ク [D1712] に道を示した²⁹²⁾。

その時、フセヴォロド [D177:K] はノーヴィ・トルグ (Новый Торгъ) を急襲して、占領した²⁹³⁾。

そして、その頃、ノヴゴロド人はロマン公 [J1] を²⁹⁴⁾〔ノヴゴロド公として〕求めて、スモレンスクへ使者を派遣した。そして、〔ロマンは〕大斎第一週の主日²⁹⁵⁾〔1179年2月18日〕に〔ノヴゴロドに〕入城した²⁹⁶⁾。

292) *Лер* 6686(1178)年記事の冒頭に、フセヴォロド [D177:K] がトルジョクを攻めるに至った経緯についての記述がある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 386-387]。それによると、フセヴォロドのトルジョク遠征は、「ノヴゴロド人はフセヴォロドに貢税の支払いを約束したが、これを守らなかったこと」(бѣша бо обѣщалися дань дати ему Новоторжъци. и не управиша) が理由とされている。この記事と本年代記の記事を総合して、次のような事態の推移が想定できるだろう。

まず、フセヴォロド [D177:K] は、ヤロ波尔ク [D1712] がトルジョク公だったとき (1177/78年冬以降) にかれと約定を結んだ。その内容は、ロストフ＝スーズダリ地方からノヴゴロドへ穀物を売ることとを認めるが、その見返りにノヴゴロド (トルジョク) 商人は、フセヴォロドに対して貢税 (дань) を支払うというものだった。ところが、1178年4月にムスチスラフ [D1711] が没して、ヤロ波尔クがトルジョクからノヴゴロドへと公座を移ると、かれは先の約定を破棄して、ノヴゴロド商人たちは貢税を払わなくなった (1178年夏～秋頃)。これに対して、フセヴォロドはまず、自国 (ロストフ＝スーズダリ地方) で活動しているノヴゴロド商人たちを捕らえて、おそらく商品を没収した。そしてさらに、トルジョクへの遠征を組織した。ノヴゴロド人は、このようなフセヴォロドの強硬策に驚いて、その原因となったヤロ波尔クに公座から離れるように促した。ヤロ波尔クはチェルニゴフへ行き、スヴァトスラフ [C411:G] の庇護を受けたが、まもなく、1180年に再びトルジョクの公座に据えられている。

293) この1178年末のフセヴォロド [D177:K] によるトルジョク攻略については、*Лер* 6686(1178)年の項に並行記事がある。それによれば、フセヴォロドはトルジョクへ向けて遠征を組織したが、この都市を攻略するつもりはなかった。おそらく、ノヴゴロド人はヤロ波尔ク [D1712] を公座から去らせると同時に、なんらかの譲歩 (貢税支払の復活など) を行ったのだろう。ところが、フセヴォロドの従士団がこの方針に異を唱えて、「トルジョク人は、神と公に対して嘘をついた」ことを理由に、自分たちで馬を駆って、トルジョク城市を攻め落としてしまった。そして、「男は縄で縛り、女子供は捕虜に獲り、財物を掠奪し、城市をすべて焼き尽くした」。占領したのは1178年の12月8日だった [ПСРЛ Т. 1: Стб. 386-387]。

294) ロマン・ロストスラヴィチ [J1] は、1175年1月～2月頃にキエフの公座に就いたが (上注200)、*Ил* 6685年記事によれば、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の攻勢に耐え切れず、1176年7月20日にキエフを離れ、自分の旧領であるスモレンスクに逃れて、スモレンスクの公座に就いていた。

295) 「大斎第一週主日」(на сборъ по чистой недѣли) は「テオドロスの主日」(Феодорова неделя) あるいは「集会の日曜日」(соборное воскресенье) という呼び名もあり、原文の на сборъ はそこからきている。чистая は大斎の「清め」が始まった週ということ。1179年2月18日に相当し、本年代記の三月暦法では6686年が終わる時期に当たっている。

296) ノヴゴロド行政府は、フセヴォロド [D177:K] の強硬策によって、自分たちで公を擁立する独立路線をあきらめ、スモレンスク公ロマン [J1] にノヴゴロド地方の防衛と交易の維持を託したと考えられる。

6687(1179) 年

大主教イリヤ〔イオアン二世〕は《兄弟²⁹⁷⁾とともに》, 聖母の聖なる受胎告知の石造りの教会を定礎した²⁹⁸⁾。そして教会の建設を始めたのが《聖なるコンスタンティノス帝とヘレナの祭日》²⁹⁹⁾の5月21日で、終えたのが《聖使徒ティトスの祭日》³⁰⁰⁾の8月25日だった。すべての教会建設は全部で70日だった³⁰¹⁾。〔この教会は〕キリスト教徒にとって避難所³⁰²⁾になった。

《同じ年, 聖ヨハネ〔女子修道院〕の典院, 神の僕エリサヴァ (Елисава) が逝去した。かの女の代わりにフェグニヤ (Фегния) が任じられた》³⁰³⁾

同じ年, ロマン [J1] が《ノヴゴロドからスモレンスクへ》³⁰⁴⁾ 行った³⁰⁵⁾。

同じ年³⁰⁶⁾, ノヴゴロド人はかれ〔ロマン [J1]〕の兄弟のムスチスラフ [J5] を〔ノヴゴロド公

297) この「兄弟」は大主教イオアン (イリヤ) の実の弟ガヴリールのこと。上注 188 を参照。

298) この「聖なる聖母の受胎告知」(святыя Богородиця Благовѣщение) の教会は, 内城から南西方向 3.7km ほどのミヤチノ湖 (Мячино) 南側の湖畔にある, 現在のアルカージ受胎告知教会 (церковь Благовещения в Аркажах, на Мячине) のこと。1170 年記事にやはり大主教イオアン (イリヤ) と弟のガヴリールが同名の木造の教会を建てたという記事があり, これを石造りの聖堂に建て替えたのである (上注 189)。

299) 「聖使徒聖コンスタンティノス帝とヘレナ母后」(Святыя равноапостольные цари Константин и Елена) の祝祭日は, 確かに 5 月 21 日に当たっている。なお, 次注の「聖使徒ティトス」とともに, *НЛ-С(Сн)* にのみ祝祭日が記されている。これは, *НЛ-М* の編集段階で祝祭日が削除され, 日付だけが残されたことによっている。

300) 「聖使徒ティトス」の祝祭日は, 確かに 8 月 25 日に相当している。

301) これは, 石造り教会の完成までの期間が非常に短く, 集中的な事業だったことから日付を示したのだろう。なお, 5 月 21 日～8 月 25 日の期間は日数では 96 日になり「70 日」は不思議である。70 の数字のスラヴ語標記が ѿ, と簡単なことから, 写本流通過程で誤りが生じたものか。

302) この「キリスト教徒にとって避難所」(крестыаном прибѣжище) の表現は, 1153 年の典院アルカージによる聖母就寝教会 (церковь святыя Богородиця Успение) 定礎記事に同じ表現がある。

303) この記事は, *Сн* だけにあり, *Ак, Км* にはない。女子修道院関係の記事は, *НЛ-М* では一貫して削除されており, 何らかの編集方針に基づくものなのだろう。

304) 次の異読がある。*Сн* из Новагорода Смоленску; *Ак, Км* и-Смоленска (スモレンスクから)。ノヴゴロド公であるロマンが退去して, スモレンスクへ去ったという内容なので, 明らかに前者の *Сн* が本来の読みで, 後者は誤解による誤訂正である。

305) 1179 年 9 月～10 月頃の出来事。1179 年 2 月 18 日にノヴゴロド公になったロマン [J1] が, 短期間 (7～8 か月) 務めただけで, 公座を離れてスモレンスクへ戻ったのは, おそらく, ロマン自身の事情によるものだろう。*Ин* 並行記事によれば, その後ロマンはスモレンスクの公座に就いていることから, かれは, スモレンスク公座就位の条件が整ったことを知って, より有利なスモレンスクへ公座を移したと思われる。

306) 異読があり, *Сн* тогда же (その時); *Ак, Км* того же лѣта (同じ年)。前者の тогда は, 前述の内容と時間的筋立てにおいて連関がある場合に使われる接続詞であることから, 前者が本来の読みで, 後者は改変によると考えられる。

として]求める使者をルーシに派遣した³⁰⁷⁾。ムスチスラフ [J5] はノヴゴロドに入城した。11 月 1 日、《廉施者聖コスマスとダミアノスの祝祭日》³⁰⁸⁾ だった。

冬に³⁰⁹⁾、ムスチスラフ [J5] はノヴゴロド人とともにチューヂ人を攻める遠征を、オチェラ (Очела) に向けて行った³¹⁰⁾。[ムスチスラフは] かれらの地をすべて焼き払った。かれら自身 [チューヂ人] は海まで逃げて行った³¹¹⁾。だが、そこでかれらの多くは³¹²⁾ 斃れた³¹³⁾。[226]

6688(1180) 年

ムスチスラフ公 [J5] がノヴゴロドで逝去した。[かれは] ロスチスラフ [D116:J] の子で、ム

307) このノヴゴロドの使者とムスチスラフ [J5] との交渉、およびかれがノヴゴロド公座に就くまでの経緯については、*Ип*6686 年の項の冒頭に詳しい記述がある。それによると、ムスチスラフ [J5] は、最初は「ルーシの地から離れることを望まなかった」とある。さらに「父の地から離れる」ことはできないとあることから、この「ルーシ」とはスモレンスク（もしくはその付属都市）を指すだろう。しかし、ムスチスラフは家臣および兄弟たちの説得を受けて、ノヴゴロド行きを決意したと記されている [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 606-607]。

308) 「廉施者聖コスマスとダミアノスの祝祭日」(на святую безмезднику Къзмы и Дамияна) は確かに 11 月 1 日 (1179 年) に当たっている。これは、*Сп* のみの読みで、*Ак*, *Км* にはない。上注 299 と同じく、後者の編者が削除したものである。

309) 1179/80 年の冬のこと。記事の時系列から判断すると、1179 年 11 月～1180 年 2 月の期間になる。

310) 「オチェラ」(Очела) は「アゼル」(ラテン語 *Agzele*, ドイツ語 *Adzelle*, *Atzel*, *Adsel*, ラトヴィア語 *Atzele*) に相当するラトガリ族の歴史的な地域名。現在のラトヴィア、エストニア、ロシア三者の国境の周辺で、現ラトヴィアのガウイエナ村 (*Gaujiena*) に中心地があったとされる。ノヴゴロドから西南西方向へ 300km ほど、プスコフからだと 120km ほど離れた場所になる。*Ип* 1111 年の項に「ムスチスラフ [D11] がオチェラを攻めた」とある。

311) 「海まで」(къ морю) の海とはリガ湾のことで、居住地から西へ 100～120km ほど行くと湾に到達する。

312) 異読があり、*Сп* ихъ досыти паде; *Ак*, *Км* много их падоша。意味に大きな違いはないが、前者 *досыти* は「飽きるほど、十分に」という主観性のある副詞であることから、*много* という中立的な語に換えたのだろう。

313) ムスチスラフ [J5] による 1179/80 年の冬の対チューヂ人遠征について、*Ип*6686 年記事に詳しい記述がある。それによると、ムスチスラフはノヴゴロド公座に就いた直後から遠征を企てており、ノヴゴロド人有力者に対して、チューヂ人がノヴゴロドの地に侮辱（損害）を加えていることから、ノヴゴロドの地を解放したい意向を告げて、賛同を得た。そして、総勢 2 万人におよぶノヴゴロド人軍兵を集めると、チューヂ人の地に侵入し、かれらの全土を焼くと、奴隸や家畜を捕獲して帰郷したという。これは、これまでにない規模の大遠征だった [ПСРЛ Т. 2 : Стб. 607-608]。

スチスラフ [D11] の孫だった³¹⁴⁾。6月14日のことだった³¹⁵⁾。〔遺骸は〕聖なるソフィア〔教会〕の聖なる聖母の副祭壇に³¹⁶⁾ 安置された。

そして、ノヴゴロド人はスヴァトスラフ³¹⁷⁾ [C411:G]のもとへ、ルーシへ、使者を派遣して〔ノヴゴロド公として〕息子を求めた。そして、ウラジーミル³¹⁸⁾ [G2](Володимир) がノヴゴロドへ連れてこられた。そしてかれを公座に据えた。8月17日のことだった³¹⁹⁾。

その頃、ザヴィド (Завид) [A-29] から市長官職が取り上げられた。そして、ミハルコ・ステパノヴィチ (Михалко Степанович) [A-30] に〔市長官職が〕与えられた³²⁰⁾。

314) 後代の歴史学では、このムスチスラフ [J5] に「勇猛公」(Храбрый) のあだ名を付けて呼ぶことがある。これは、「武運公」(Удалой, Удатный) と呼ばれる、同名の息子 Мстислав Мстиславич [J51] と区別し、また同時代に活躍した同名・同父称のムスチスラフ・ロスチスラヴィチ無眼公 [D1711] と区別するための便宜でもある。

315) これは1180年の6月14日に相当する。ムスチスラフ勇猛公 [J5] の死没の日付は、*Леп*6688 年記事では「五旬節の週の土曜日」となっており [ПСРЛ Т. 1: Стб. 387], 1180 年の場合には6月14日に当たることから確認できる。なお、*Ин*6686 年記事では「6月13日の殉教聖女アキリナの祭日の金曜日」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 609] とあり一日ズレている。その理由は不明。

316) 「副祭壇に」(въ предѣлѣ) は *Км* のみの読みで、*Сн*, *Ак* にはない。*Км* 系写本流過程における説明的補足編集によるもの。なお、「聖母の副祭壇」とは、聖母生誕 (Рождество Богородицы) に奉献されたソフィア聖堂南東角のアプスに設けられた副祭壇 (предел) のこと。*Ин*6686 記事にも「遺体は大いなるヤロスラフ [13] の息子ウラジーミル [A] が眠る同じ棺の中に安置された」[ПСРЛ Т. 2: Стб. 610] とあり、当時存在したウラジーミルの墓廟 (гробница) に葬られたことが分かる。ただし、考古学的調査によると、棺は南側廊の啓蒙所 (Мартирьская паперть) で発掘されており、後代 (15 世紀) にここに移されたと考えられている [Янин 1988: С. 194 (схема № 10)]。

317) スヴァトスラフ [C411:G] は、1180 年当時はキエフ公であり、「ルーシへ」とはキエフを指している。ノヴゴロド人〔行政府〕は公を求める勢力として、スモレンスク公一門から、キエフ公であるスヴァトスラフ (およびその一門) へと方針転換したことになる。

318) ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] については、*Ин*6686 年記事で、フセヴォロド [D177:K] がかれをヴラジミル = ザレスキイに呼び寄せ、亡き兄弟ミハルコ [D175] の娘で自分の姪にあたる娘と結婚させ、それから若い夫婦はチェルニゴフへ行ったとの記述がある [ПСРЛ Т. 2: Стб. 612]。これは、記事の時系列から見て1179年のことであり、その一年後に、ウラジーミル [G2] はノヴゴロド公になったことになる。まだ20歳前後で若かった。

319) 記事の文脈から見て、ノヴゴロドからの使者 (使節団) は、キエフでスヴァトスラフ公 [C411:G] の同意を得ると、その帰路に、ウラジーミル [G2] 一家とその配下の従士たちを引き連れて、ノヴゴロドに戻ったと考えられる。ウラジーミル [G2] の公座就位は、1180 年の8月17日である。

なお、*Леп* 6690 年記事にも、「ノヴゴロド人は、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] を自分たちのもとの連れてきた」という短い並行記事がある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 388]。

320) 1180 年秋に行われたこの市長官の交替は、ムスチスラフ勇猛公 [J5] の死去にともない、スモレンスクからではなく、チェルニゴフ公家からウラジーミル [G2] をノヴゴロド公として招聘したことに関係している。すなわち、スモレンスク支持派の市長官ザヴィド (Завидъ) [A-29] が引退させられ、代わりに、チェルニゴフ支持派の「ミハルコ・ステパニチ」(Михалко Степанич) [A-30] が市長官に選ばれたのである。

同じ年、神を愛するノヴゴロド大主教イリヤ狓下が、兄弟のガヴリールとともに、聖なる受胎告知(святого Благовѣщения)修道院に³²¹⁾ おいて、聖なる神現(святого Богоявления)の門上の《石造りの》教会を定礎した。

同じ年の冬³²²⁾、オレーグ[C4]の孫である、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ公[C411:G]が、フセヴォロド[D177:K]を攻める戦争のために、ルーシからスーズダリへと進軍した。一方、かれの息子のウラジーミル[G2]はノヴゴロド人とともにノヴゴロドから〔進軍した〕。

〔両軍は〕ヴォルガ川のトヴェーリ川河口で合流した³²³⁾。ヴォルガ川の全流域を荒廃させ、すべての城砦(городы)を焼いた。ペレヤスラヴリ³²⁴⁾(Переяславль)の手前40ヴェルスタのと

321) この「聖なる受胎告知修道院」(монастырь святого Благовѣщения)は、アルカージイ(ミャチノ)の受胎告知修道院(монастырь Благовещенский в Аркажах, на Мячине)と呼ばれ、内城から南西方向3.7kmほど、ユーリイ修道院から西へ3kmほどのところに位置する郊外修道院。本年代記6678(1170)年の項に、主教イリヤ(イオアン二世)と兄弟のガヴリールが、この木造の修道院と教会堂を建て(上注189)、1179年には二人がこれを石造りに建て替えている(上注298)。この度は、この修道院の門の上に、あらたに門上教会(上注189)を定礎したということで、二人が行った建築事業についての一連の記事のひとつである。なお、この門上教会は1182年に完成している(下注351)。

322) 1180/81年冬のこと。この段落は研究上「ヴレナ川の対峙」(Стояние на реке Влене зимой 1180/81 г.)と呼ばれる事件の記述。*Ил*6688年の項に詳しい記述がある。それによると、1180年夏・秋にキエフの公座を去ったスヴァトスラフ[C411:G]はチェルニゴフに行った。そして、チェルニゴフのオレーグ[C4]一族諸公を集めると、ヤロスラフ[C412]とイーゴリ[C432]を残して、従兄弟のフセヴォロド[C433]、息子のオレーグ[G5]、およびヤロ波尔ク・ロスチスラヴィチ[D1712]とともに、スーズダリへ向けて遠征すると宣言した。フセヴォロド[D177:K]のもとに囚われていた息子グレーブ[G3]の救出がその名目だった。そして、遠征の途上で、ノヴゴロドから来た息子ウラジーミル[G2]と合流した。一方、フセヴォロド[D177:K]は、スーズダリ人、リャザン人、ムーロム人の部隊を率いて出陣し、ヴレナ(Влена)川の河岸で、川を挟んでスヴァトスラフ軍と対峙した。川の流れは激しく、岸は険しいため、両軍は兩岸に陣を張り、この川を挟んで2週間射撃をしたが、白兵戦はなかった。スヴァトスラフは使者を遣って和議を試みたが、フセヴォロドは使者を捕らえて返事をせず、むなしく時間が経った。スヴァトスラフは、何日も〔返事を〕待っていたが、暖かい天候になることを恐れて(雪や氷が解けると戦闘や通行・輸送が困難になる)、ついに撤退した。かれは、撤退の道中でドミトロフ(Дмитров)の都市に火をかけた。それからスヴァトスラフは、同行した諸公をルーシ(チェルニゴフ)に帰すと、自分は息子ウラジーミル[G2]とともに、ノヴゴロドへ行った[ПСРЛ Т. 2: Стб. 619-620]。なお、*Лвр* 並行記事にも同様の短い記述があり、フセヴォロド公[D177:K]もヴラジミルへ帰還したとある[ПСРЛ Т. 1: Стб. 388]。

323) 「ヴォルガ川のトヴェーリ川河口で」(на Волзѣ усть Твѣри)は現在のトヴェルツァ川(Тверца)がヴォルガ川に流れ込む河口で、現トヴェーリ市がある場所のこと。当時はまだ城砦が形成されていなかったと思われる。

スヴァトスラフ[C411:G]率いるチェルニゴフ人とボロヴェツ人の部隊は、ドニエプル川上流から連水陸路経路でヴォルガに入り、ウラジーミル[G2]とノヴゴロド軍はムスタ川(Мста)からトヴェルツァ川(Тверца)の行路でヴォルガ川に向かうと、ちょうどこのトヴェーリの場所で合流することになる。

324) この「ペレヤスラヴリ」(Переяславль)は、現在のペレスラヴリ=ザレスキイ(Переяславль-Залесский)のこと。

ころ、ヴレナ川³²⁵⁾ (Влена река) のところまで達して、そこで引き返した。なぜなら、そこでスーズダリ人が遠征部隊を出しており、自分たちの周りに防壁 (твердь) を築いていたからである。しかし、神はその慈悲によってキリスト教徒の血をそれ以上流すことはなかった。少しの時間だけ戦っただけだったのだから。そして、ノヴゴロド人はかれら〔敵軍〕を 300 人ほど殺した。それで、自分たちは全員が無事で帰還した。

そして、〔ノヴゴロド人は〕スヴァトスラフ公 [C411:G] 自身をノヴゴロドに〔公として〕受け入れた³²⁶⁾。他方、ヤロボルク [D1712] をノーヴィ・トルグ〔の公座〕に据えた³²⁷⁾。こうして、大いなる³²⁸⁾ スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はノヴゴロドに入城した。

6689(1181) 年

7 月 3 日のこと、落雷で市場区 (Торговище) のヴァリャーグ教会³²⁹⁾ (церкви Варяжская) が燃えた。晩課³³⁰⁾ のとき《昼の第 10 刻》³³¹⁾ だった。さらに、もう一つ、イシコフ (Ищеков) の聖

325) 「ヴレナ川」(Влена) は、ヴォルガ川右岸支流のドゥブナ川 (Дубна) の支流で現在のヴェリャ川 (Веля) に同定されている。その河口はトヴェーリから東に約 70km、ペレヤスラヴリ (現ペレスラヴリ = ザレスキイ) からだと西に約 50km 離れており、両者のほぼ中程に位置している。現在のセルギエフ・ポサド (Сергиев Посад) 市に近い。なお、「ペレヤスラヴリの手前 40 ヴェルスタ」(не дошедше Переяславля за 40 версты) の距離は 45km ほどになる。

326) 「ヴレナ川の対峙」の帰路、スヴァトスラフ [C411:G] は息子のノヴゴロド公ウラジーミル [G2] とともにノヴゴロドに行っており (上注 322)、そのまま、息子に代わってスヴァトスラフがノヴゴロドの公座に就いたと考えられる。その場合、これは 1181 年の 2 月～3 月頃のことである。

327) ヤロボルク [C1172] は、ヴレナ川の対峙の遠征に参加して、撤退後はいったんチェルニゴフに戻っていたが (上注 322)、まもなく、ノヴゴロド人の招聘を受けて、トルジョク (ノーヴィ・トルグ) の公座に再度就いた。ノヴゴロド人は、フセヴォロド [D177:K] とはっきりと対抗しているスヴァトスラフ [C411:G] 自身を公として受け入れることによって、フセヴォロドに遠慮する必要はもはやなくなったということだろう。

328) 「大いなるスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ」の原文は Святославъ великий Всеволодиць である。この「大いなる」(великий) は、チェルニゴフのオレーグ一族の年長者を公に迎えたことに自信を持った年代記記者が、スヴァトスラフ公を称揚する表現である。

329) 「ヴァリャーグ〔教会〕」(Варяжская) は、研究上は Варяжская божница と呼ばれ、ゴットランド館 (Готский двор; Готенгоф) に付設されたノルウェー王聖オーラフに奉献された教会のこと。当時のノヴゴロドで「ヴァリャーグ人」(варяги) は、主にゴットランド出身者 (商人・海運業者) (=ゴート人 готы) を指していた。ヤロスラフ館に接して、ミカエル街近くにあった [Великий Новгород 2009: С. 520-521]。1152 年の火事の記事でも言及されている ([ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 455] 参照)。

330) 「晩課」(вечерня) は平日に行われ、中世ルーシでは、ほぼ日没までの時間帯に行う教会の奉事のこと。現在の午後 4 時から午後 6 時くらいの間に晩課が始まり、ほぼ日没まで 1.5～3 時間くらい続いた。

331) 「昼の第 10 刻」(в час 10 дни) は *Сн* だけの読み。なお、この日の第 10 刻は、現在のノヴゴロド時間 (GMT+3 時間) で 15:20～16:15 の時間帯に相当する (考え方については下注 376 参照)。前注の晩課が始まるときにはほぼ当たっている。

ヨハネ³³²⁾〔教会〕〔も燃えた〕。

同じ年、スラヴノ³³³⁾で、コスニャチンの屋敷³³⁴⁾ (Костянин двор) が火元の《火事が》燃えた。二つの教会が焼失した。〔それは〕聖ミカエル³³⁵⁾〔教会〕と聖教父³³⁶⁾〔教会〕だった。盛土に沿って³³⁷⁾ほとんど小川³³⁸⁾ (ручьё) のところまで屋敷の多く〔が燃えた〕³³⁹⁾。〔227〕

同じ年、〔次の〕教会が木造で建築された (рубища)。すなわち、ドブリニャ街の聖ヤコ

332) この「イシコフの聖ヨハネ」(святого Иоана Ищекова) 教会は、研究では「ネメツ人館近くの洗礼者ヨハネ教会」(Иоанна Крестителя у Немецкого двора) と呼ばれているものを指している [Великий Новгород 2009: С. 523]。「イシコフ」(Ишьков; Ищеков) はこの聖ヨハネ教会の通称 (あだ名)。Ишко は (標準形 Ишков はその所有形容詞形) Иоанн; Иван の指小形で、現在でもウクライナ南部で用いられている。ヤロスラフ館 (Ярославово дворище) の近くにあり、やはり近隣にある на Опоках の洗礼者ヨハネ教会と区別するために通称が付されたのだろう。この教会については 6811(1303), 6819(1311) 年の記事にも言及されている。ヴァリヤーク教会に近いことから、延焼したのではないか。

333) 「スラヴノ」(Славно) は、スラヴェンスキイ区をほぼ南北に走るスラヴナヤ街 (улица Славная или Большая-Пробойная) の周辺地区のこと。ここでは、スラヴェンスキイ区のヴォルホフ川沿いの地区を指している。

334) 異読があり、Сн от Къснятина; Ак от Костянтинова двора; Км от Коснятина двора。コスニャチン (Коснятин), すなわちコンスタンチン (Констинтин) はノヴゴロド貴族もしくは大商人・貿易商人などの名士の名と考えられるが、同名の貴族や市長官は年代記にも複数登場することから、特定は難しい。

335) 「聖ミカエル〔教会〕」(святого Михаила) は、大天使ミカエル (архангел Михаил) に奉献された教会で、スラヴェンスキイ区のみハイロヴァ通り (Михайлова улица) とヴィトコフ通り (Витков переулоч) の交差点、市場 (Торг) の近くにあった木造教会 [Великий Новгород 2009: С. 478] ([ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 452] も参照)。

336) 「聖教父〔教会〕」(святых Отець) は「ニケア公会議の 318 人聖教父」(Отцов Святых 318 Никейского собора; Ἀγίων πατέρων 318 Σύνοδος τῆς Νικαίας) の祝祭日に奉献された教会で、スラヴェンスキイ区ヤロスラフ館跡 (Ярославово дворище) 近くの「教父街」(Отцовская улица) にあった木造教会 [Великий Новгород 2009: С. 526]。

337) 異読があり、Сн по берегу (岸に沿って); Ак, Км по гребле/гребли (盛土に沿って)。「盛土」(гребля) とは、ヴォルホフ川岸に沿って築いた河岸堤防のことで、берег と意味としては同じ。ミハイロヴァ街の南橋から小川までの間の 1km ほどの川沿いにあった大型木造家屋 (дворове) の多くが焼失したということ。

338) この「小川」(ручьё) は、商業地区のプロトニツキイ区 (Плотоничский конец) とスラヴェンスキイ区 (Славенский конец) を隔てる小川のこと。フョードロフスキイ小川 (Феодоровский ручей) とも呼ばれている。

339) この火災は、1152 年の火災と場所が類似している ([ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 451-455] 参照)。

ブ³⁴⁰⁾〔教会〕、廉施者聖コスマスとダミアノス³⁴¹⁾〔教会〕、聖サヴァス³⁴²⁾〔教会〕、聖ゲオルギオス³⁴³⁾〔教会〕、イシコフの聖ヨハネ³⁴⁴⁾〔教会〕である。

同じ年、ノヴゴロド人がオレーグ [C4] の孫であるスヴァトスラフ [C411:G] とともに、ドルーツク (Дръючк) へ向けて進軍した³⁴⁵⁾。

同じ時、フセヴォロド [D177:K] が、自らの全軍およびムーロム人、リャザン人とともに、ノーヴィ・トルグを攻めるべく進軍した。ノーヴィ・トルグ人 (новоторжъци) は、ヤロ波尔ク公 [D1712] とともに城内に籠城した。城市は包囲され、5 週間籠城したが、人々は疲弊した。か

340) 「ヤコブ教会」(церковь святого Якова) は、主の兄弟使徒ヤコブに献堂された教区教会。リューディン区の下ブリニャ街 (Добрыня улица) の西端の、ブルースカヤ街に近いところに位置している。1175 年に聖堂が火災で焼失しており (上注 243)、これを木造で再建したということだろう。

341) 「聖コスマスとダミアノス〔教会〕」(святого Кузмы и Дамиана) は、ネレフスキ区のコズモデミアンスカヤ通り (Козмодемьянская улица) にあったもので、1146 年に木造で建てられている [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 411]。この教会堂が焼失したため、再建されたのだろう [Великий Новгород 2009: C. 524]。

342) 「聖サヴァス〔教会〕」(святого Саву) は、1154 年にネレフスキ区コズモデミアンスカヤ通り (Козмодемьянской улице) に建てられており [ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 411]、前注の「聖コスマスとダミアノス教会」に近いことから、同じ火事で焼失したものが再建されたのではないか。

343) 「聖ゲオルギオス〔教会〕」(святого Георгия) はネレフスキ区のパルコヴァ街 (Баркова улица) にあった教会。この箇所が初出 [Великий Новгород 2009: C. 522]。

344) 市場区の「イシコフの聖ヨハネ」教会については上注 332 を参照。1181 年 7 月に焼失した木造教会堂の再建である。

345) これは、研究上では、スヴァトスラフによる「1181 年ドルーツク攻城戦」(Осада Друцка 1181 г.) と呼ばれる事件についての記事。In6688 年記事には詳細な記述がある。それによると、この 1181 年夏のポロツク公領ドルーツクへの遠征は、チェルニゴフ公とヤロスラフ [C412] とノヴゴロド=セヴェルスキイ公イーゴリ [C432] の主導によるもので、多数のポロヴェツ人を率いた大がかりなものだった。

スヴァトスラフ [C411:G] もまた、遠征の援軍としてノヴゴロド人を率いて、ノヴゴロドからドルーツクへ向けて遠征を始めた。これに対しては、ヴィテプスク公ブリャチスラフ [L222] とポロツク公フセスラフ [L221] をはじめとして、ポロツク地方の諸公とリープ人、リトアニア人が、スヴァトスラフを迎撃してドルーツク行きを妨害するために集合した。

一方、ドルーツク公グレーブ・ログヴォロドヴィチ [L112] は、スモレンスク公ダヴィド [J3] の援軍を求め、ダヴィドはドルーツクに入城すると、グレーブとともに遠征軍を迎撃すべくドルーツクを出撃した。

これに対してヤロスラフ [C412] とイーゴリ [C432] の遠征軍は、スヴァトスラフ [C411:G] の到着を待って、ダヴィド [J3] 等との戦闘を行わず、両者はドルチ川 (Друть) の両岸で一週間対峙して、小競り合いがあった。ようやく、スヴァトスラフ [C411:G] がノヴゴロド人を引き連れて到着すると、遠征軍はドルチ川を渡り、敵に圧倒されたダヴィド [J3] はスモレンスクへと逃走した。遠征軍はドルーツク城の防柵を焼いたが攻略はせず、ノヴゴロド人はそこから帰郷した。一方、スヴァトスラフ自身は、そこからロガチェフ (Рогачев) へと軍を進め、ロガチェフからはドニエプル川に沿ってポロヴェツ人とともにキエフに向けて進軍して、ついにはキエフの公座を獲得することになる。[ПСРЛ Т. 2: Стб.620-621]。なお、Лврにはこの遠征についての記述はない。

れらには食料がなくなったからである。馬肉を食べる者もいた。城内のヤロポルク公 [D1712] に矢が射かけられた。かれらには大いなる災いがあった。

ノーヴィ・トルグ人は降伏した。ヤロポルク [D1712] は捕まえられ、鎖をかけられて引き立てられた。ノーヴィ・トルグ人たちも妻子とともに引き立てられた。城市は焼かれた³⁴⁶⁾。

他方、ノヴゴロド人は、ドルーツク (Дръючк) から帰還した。その城市〔ドルーツク〕を焼いた³⁴⁷⁾。

その頃、冬のこと、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2] に道が示された。かれ〔ウラジーミル〕は父〔スヴァトスラフ [C411:G]〕のもとへ、ルーシ (Русь) へ行った³⁴⁸⁾。

一方、ノヴゴロド人はフセヴォロド [D177:K] のもとに、公を求める使者を派遣した³⁴⁹⁾。〔フ

346) スヴァトスラフ [C411:G] とノヴゴロド人がドルーツクへ遠征を行っているあいだ（本記事の上下にドルーツク遠征関係記事がある）の 1181 年夏頃に、フセヴォロド [D177:K] は、ノヴゴロド地方の防備が手薄になったことに乗じて、トルジョクに対して、再度の（一度目は 1178 年末：上注 293）懲罰遠征を行った。その経緯については、*Леп6690* 年の項に、本記事と類似した記述がある。それによると、1181 年春頃にトルジョクの公座に就いたヤロポルクは、ヴォルガ川流域の、フセヴォロド [D177:K] の支配民に対する掠奪をはじめた。これに対して、フセヴォロドは、トルジョクを攻めるべく遠征を行い、トルジョクに到達すると、1 ヶ月のあいだ（本記事では「5 週間」）城市を包囲した。ヤロポルクの家来たちは、飢えのために城内で疲弊し、馬肉を食べるありさまで、ついに降伏した。フセヴォロドは、トルジョク城市を占領すると、ヤロポルクを捕虜として、ヴラジミルへと凱旋した。また、捕虜として連行したノヴゴロド人について、後になってトルジョクへと帰郷させている [ПСРЛ Т. 1: Стб. 388]。

347) 本年代記には明記されていないが、ドルーツク遠征を行ったスヴァトスラフはノヴゴロドに戻ることはなく、自分はキエフの攻略に着手し、ノヴゴロドへは息子のウラジーミル [G2] を行かせて公座に就かせようとした（1181 秋～冬）。「ノヴゴロド人が帰還した」とは、スヴァトスラフがノヴゴロドへ帰還しなかったことを暗示した言い方であり、ノヴゴロド人にとっては不本意な事態だった。

348) *Ин6688* 年記事によれば「その年の秋」、すなわち 1181 年の秋にウラジーミル [G2] を「ノヴゴロドから追放した」(выгнаша из Новагорода) となっている。しかしながら、本年代記では「道を示した」と自主的な退去を促した表現になっており、さらに、公の交替の際に市長官のミハルコ [A-30] は市長官職を続けていることから見て、この公の交替はノヴゴロド行政府にとっては穏便に行われたと考えるべきではないか。なお、ウラジーミル [G2] が「父のもとへ、ルーシへ行った」とは、当時、リユーリク [J2] と合意してキエフの公座に就いていた父スヴァトスラフ [C411:G] のもとへ、すなわちキエフへ行ったということ。

349) この使者派遣によって、ノヴゴロドの行政府は、それまでのスヴァトスラフ [C411:G] との提携の方針から、フセヴォロド [D177:K] と同盟する方向へと大きく政治方針を転換したことになる。トルジョク攻囲戦と占領、ヤロポルクの捕縛（上注 346）というフセヴォロドの強硬策に屈服したということだろう。

セヴォロドは〕かれら〔ノヴゴロド人〕に自分の姻戚の者³⁵⁰⁾ (свояк)〔ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153]〕を〔公として〕与えた。

6690(1182) 年

ヤロスラフ公 [D1153] がノヴゴロドへやって来た。かれは、ウラジーミル [D115] の息子で、大いなるムスチスラフ [D11] の孫である。

同じ年、ノヴゴロド大主教**猊下**イリヤが、兄弟の**ガヴリール**とともに、門上の聖なる神現教会 (святое Богоявление) を建て終えた³⁵¹⁾。

その頃、〔大主教と兄弟は〕聖教父教会 (Святых Отець церковь) を建てた³⁵²⁾。

6691(1183) 年

ラディオコが兄弟とともに³⁵³⁾ (Радько съ братом), ロガティツァ街³⁵⁴⁾ (на Рогатѣи) に、**奇跡成就者**にして**ガングラ**主教**聖イパチオス**³⁵⁵⁾ の教会を建てた³⁵⁶⁾。

350) 「姻戚の者」(свояк) が誰であるかについては、H4, C1, HK1 並行記事では、свояк своего Ярослава Володимери́ча, H5 では своего Ивана Володими́рица と記事への付加によって名指されている。この公については、次の年の 6690(1182) 年記事で「ムスチスラフ [D11] の孫であるヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153]」であることが確認できることから、H4, C1, HK1 の記述が正しく、H5 は誤りである。

なお、「姻戚の者」(свояк) はここでは、妻の姉妹の夫のことを指しており「義理の兄弟」とも訳せる。フセヴォロド [D177:K] はオセチヤ人 (ヤース人) の女性と結婚しており、ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] はその姉妹を妻としていることから、フセヴォロドのもと (ヴラジミル=スーズダリ) に食客として滞在していたのではないか。

351) 「門上の聖なる神現教会」(святое Богоявление) は 1180 年に定礎されており (上注 321), 3 年かかって完成したことになる。

352) この「聖教父教会」とは、1181 年に火災で焼失した聖堂 (上注 336) を木造で再建したということ。

353) 「ラドコが兄弟とともに」(Радько съ братом) の Радко (もしくは Рядко) はスラヴ系の人名で 6732(1224) 年記事にもノヴゴロド人として記されている。教会を兄弟とともに奉献するほどであるから、商業区の在地貴族 (豪族) もしくは在地の大商人・貿易商人 (гость) ではないか。

354) 「ロガティツァ街」(на Рогатѣи; Рогатица старая) はスラヴェンスキー区の北側を東西に横切る 900m ほどの通り [Великий Новгород 2009: С. 465]。

355) ガングラ (現トルコのチャンクル (Çankırı)) の主教イパチオス (Ипатий Гангрский; Υπάτιος Γαγγρών) は 4 世紀の殉教聖人。正教の祝祭日は 3 月 31 日。おそらく、献堂者 (κτίτορ) ラドコ (上注 353) の守護聖人であり、この 1183 年 3 月 31 日に献堂式が行われたのだろう。

356) なお、この建設記事は、H4 では 6698(1190) 年の項に記されている。

同じ年³⁵⁷⁾、フセヴォロド [D177:K] は、自分の全ての領地 (область) 「の軍兵」とともに³⁵⁸⁾、ブルガール人を攻める遠征を行った³⁵⁹⁾。ブルガール人「の地で」イジャスラフ・グレーボヴィチ公 [D1781] が殺された³⁶⁰⁾。

同じ年の冬、プスコフ人はリトアニア人³⁶¹⁾と戦った。そして、**邪悪**が³⁶²⁾プスコフ人に起こった。[228]

357) このブルガール人討伐遠征の時期については、*Ин*6690 年と *Леп*6692 年の項に並行記事がある。*Ин* では 1183 年 7 月と推定される ([Карпов 2017: С. 361][Бережков 1963: С. 201]) 洞窟修道院典院ボリカルプ死去の記事の直前に記述があることから、1183 年の河川航行期 (春～夏) に遠征が行われたと推定できる。これは、本記事の年紀 6691(1183) 年と合致している。

358) ここで、「自分の全ての領地とともに」(со всею областью своею) とは、自分の配下にある戦力をすべて動員してということ。*Леп*6692 年の並行記事には、フセヴォロド公 [D177:K] が動員した諸公が記されており、それによると、甥のイジャスラフ・グレーボヴィチ [D1781]、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [G2]、ムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J31]、リャザン公グレーブ [C542:H] の息子たち、すなわち、ロマン [H2]、イーゴリ [H3]、フセヴォロド [H5]、ウラジーミル [H4] たち、そして、ムーロムのウラジーミル [C51111] の諸公だった [ПСРЛ Т. 1: Стб. 389]。

359) *Ин*, *Леп* の並行記事によれば、遠征部隊は川船で、ヴォルガ川とカマ川の合流地点まで行って上陸し、そこからブルガール人の地の掠奪を行って、首都にあたるビリヤル (次注) まで到達している。しかし、ブルガール人の反撃部隊と会戦し、都市を占領することはできず和議を結んで撤退している。

360) イジャスラフ [D1781] の死については、*Леп*6692 年記事にやや詳しく書かれている。それによると、遠征軍がブルガール人の拠点の「大いなる都市」、すなわちビリヤル (Биляр; Bilär) の城市を攻めようとしたとき、イジャスラフは従士たちとともに武装して、槍を手に堤に向かった。すると、敵の歩兵が城市から出てきたので、堤の向こうの城門まで追い詰めたが、槍を折ってしまった。そのとき、矢が飛んできて、かれの心臓のところの鎧に当たり、かれは、虫の息で後方の天幕へ運ばれて行った。フセヴォロドはこの城市を 10 日包囲したが、イジャスラフが衰弱しているのを見て、和議を結んで、川船を係留した中州までもどったが、イジャスラフは川船に載せられたところで息を引き取ったという。かれの遺体は、ウラジミルの聖なる聖母教会に安置された [ПСРЛ Т. 1: Стб. 390]。

361) 本年代記では、1044 年の項に「ヤロスラフ [13] がリトアニア人を攻める遠征を行った」とあり、HCC 系列年代記では 1131 年の項にはムスチスラフ [D11] による対リトアニア遠征について記されている。*НІ* ではほぼ 150 年を経て、ここで「リトアニア人」(литва) について再び言及されたことになる。本記事の書き方から見て、リトアニア人がプスコフの領地に攻め込み (ポロツク領への掠奪遠征の途上だったか)、プスコフ人だけで防衛の戦闘を行ったが圧倒されたと、解釈することが妥当だろう。リトアニアにとっては、国家形成直前の時期だが、すでに十分な軍事力を有していたことが分かる。なお、*СІст* 6691(1183) 年並行記事では、「そして、多くのプスコフ人が斃れた」(и много паде плесковичъ) と別の表現が使われている [ПСРЛ Т. 6: С. 246]。

362) 異読があり、*Сн* ся издѣя зла; *Ак* ся издѣя прокуды; *Км* ся пакости издѣя。下線部の語はニュアンスが異なり、зло はもっとも一般的な「悪」で「善」(добро) と対比される言葉。прокуда は人に呪術をかけて害すること。пакость は殺人・掠奪など具体的な悪の行為を指す。「忌まわしいこと」「邪悪なこと」という感じ。おそらく、本来は зла であったものが、*Ак*, *Км* のそれぞれの写本系統の編者によって、それぞれの解釈で言い換えられたものだろう。

6692(1184) 年

ノヴゴロド大主教イリヤが兄弟ガヴリールとともに、市場区(Торговище)で石造りの聖ヨハネ教会(святого Иоанна)を定礎した³⁶³⁾。

同じ年、フセヴォロド[D177:K]は、〔配下の者たちを〕派遣して³⁶⁴⁾、自分の姻戚の者³⁶⁵⁾(свояк)であるヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ[D1153]をノヴゴロドから連れ出した〔連れ帰った〕。ノヴゴロド人がかれ〔ヤロスラフ〕に不満だったからである。なぜなら、〔ヤロスラフの配下の者たち〕はノヴゴロドの所領に多くの悪行なしていのだから³⁶⁶⁾。

363) この「聖ヨハネ教会」は、フセヴォロド公[D111]が1127年に定礎し、1130年に完成した〔ノヴゴロド第一年代記(5):注153, 176〕「ペトリヤタの屋敷」に建てられた聖堂のこと。現在の「オボキの聖ヨハネ教会」(храм св. Иоанна на Опоках)に相当しており、洗礼者ヨハネの生誕(祝祭日6月24日)に献堂されている。新たに「石造り」を定礎したということは、古い石造り聖堂を撤去して建て直したのだろう。場所の言い方が「市場」(Торговище; Торг)と異なっているのは、当時の市長官の名を付した「ペトリヤタ[A-18]の屋敷」の言い方が古くなり、通用しなくなったためと考えられる。

364) 邦・ボ・英訳は「自分の義理の兄弟を派遣した」と訳しているが、これはC_Hの誤解されやすい構文を誤読したもので、A_K, K_Mでは語順が訂正され「義理の兄弟を連れ出した」と読める文になっている。また、ここでフセヴォロド公[D177:K]が「派遣した」(прислав)のは、かれの配下の家来たちであり、ヤロスラフをスーズダリへ連れ帰る任務を与えられていたはずである。ヤロスラフもフセヴォロド公の命令には従わざるを得なかったはずである。

このように、あたかもフセヴォロド公の主導によって公座交替がなされたと記されているのは、スーズダリ諸公(フセヴォロド)に好意的な年代記記者(おそらくゲルマン・ヴォヤタ:下注423)の政治的立場の反映ではないか。これに対して、Лер 6694 記事では「その年、ノヴゴロド人はヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ[D1153]を追放した。そしてムスチスラフ・ダヴィドヴィチ[J32]を公支配のためにノヴゴロドに受け入れた。このようなことは、かれらの慣習なのである」[ПСРЛ Т. 1: Стб. 400]と、ノヴゴロド人の公交替に対する放恣な姿勢を非難する語調で書かれている。

365) フセヴォロド[D177:K]は、1181/82年冬に姻戚の者(свояк)、すなわち義理の兄弟であるヤロスラフ[D1153]をノヴゴロド公として据えており(上注350)、ここで公座を退くまでヤロスラフは約2年間ノヴゴロド公の地位を保っていた。なお、その後かれは、1187-96年、1197-99年と再三度ノヴゴロドの公座に就いており、あわせると13年の長きにわたってノヴゴロド公だった人物である。

366) 「なぜなら、ノヴゴロドの領地に多くの悪行をなしていたのだから」の原文は、C_H Зане много творяху пакости волости Новгородьскеи で、下線部の動詞は、A_K творяхуть; K_M творяше の異読がある。この文の主語は示されていないが、C_H, A_K がインパーフェクト三人称複数形であること(K_Mの読みは二次的な改変)、また пакости творити (悪行をなす)の表現は土地からの収奪や財物の掠奪の場合に通常用いられることから、「ヤロスラフの配下の者たち」(люди Ярославли)を主語として想定できるのではないか。つまり、ヤロスラフ公は配下の従士たちに命じてノヴゴロドの領地に酷税を課したり、不当な過料や裁判手数料を得ていたという事態が考えられる。

そして、ノヴゴロド人は協議をして³⁶⁷⁾、スモレンスクへ、ダヴィド³⁶⁸⁾ [J3]のもとへ、その息子を〔公として〕求める³⁶⁹⁾ 使者を派遣した。〔ダヴィドは〕かれら〔ノヴゴロド人〕に、ムスチスラフ³⁷⁰⁾ [J32]を〔ノヴゴロド公として〕与えた。〔使者たちは〕かれ〔ムスチスラフ〕をノヴゴロドへ連れてきて³⁷¹⁾、かれを公座に据えた。《9月のことだった》³⁷²⁾
《同じ年、聖ヴラシオスの新しい教会が木造で建てられた》³⁷³⁾

6693(1185) 年

5月1日³⁷⁴⁾、《昼の第10刻、晩課の鐘のとき》³⁷⁵⁾、太陽が暗くなった。1刻かそれ以上の間だっ

367) この、1184年春～夏のヤロスラフ [D1153] のノヴゴロド公座からの退去と同時に、1180年以降市長官だったミハルコ・ステパニチ (Михалко Степаниць) [A-30] も市長官の職から追われ、スモレンスク支持派のザヴィド (Завидь) [A-29] と交替したと考えられる (下注 385)。ミハルコは、1180年に市長官になったときにはチェルニゴフ公家支持派だったが (上注 320)、ウラジーミル [G2] からヤロスラフ [D1153] へと公が交替した (1181/82 年冬) 際にも依然として市長官職を続けていることから、職を追われた 1184 年の時点ではスーズダリ公 (フセヴォロド [D177:K]) 支持派へと転向していたと考えられる。

368) ダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] は、1180年に兄弟でスモレンスク公のロマン [J1] が没すると、かれを次いでスモレンスクの公座に就き、1197年の死没のときまで公座を守っていた。

369) 異読があり、*Сн просяще сына у него; Ак, Км по сын.*

370) このムスチスラフ [J32] の生年は、1163-68 年項と推定されており、その場合、この時点 14-15 歳の少年だった [Домбровский 2015: С. 502]。かれは、1187 年 9 月頃に追放されるまでノヴゴロドの公座に就くことになるが、その期間の本年代記記事には、父ダヴィド [J3] については頻繁に言及されるが、かれ自身のノヴゴロドにおける活動に触れたものはない。父の意を汲んだ傀儡として派遣されたということなのだろう。

371) 「かれをノヴゴロドへ連れてきて」は異読がある。*Сн приведоша и Новугороду; Ак, Км ведоша и къ Новугороду.*

372) 「九月のことだった」(мѣсяця септября) は *Сн* のみの読みで、*Ак, Км* にはない。これは、1184 年 9 月のことである。

373) 「聖ヴラシオス」(св. Власий; Ἀγιος Βλάσιος) は、4 世紀のセヴァステの殉教主教で祝祭日は 2 月 11 日。*НЗ* 6673(1165) 年記事には、大主教イオアン (イリヤ) が修道士になる前には、「ソフィア地区に住み、ヴォロス街 (Волосова улица) にある木造の聖殉教司祭ヴァシオス教会の司祭だった」ことが記されており [ПСРЛ Т. 3 (*НЗ*), 1841: С. 215]、大主教にちなんだ教会である。年代記記者ゲルマン・ヴォヤタ (下注 423) が、自分の上司である大主教の意を迎えるために書き込んだものか。なお、ここで「新しい教会」とあるのは、前にあった教会堂を木造で再建したということ。

374) この記事は、1185 年 5 月 1 日に起こった皆既日食のことで、これについては、*Ин* 6693(1185) 記事や『イーゴリ軍記』の中でも触れられている。「日月食等データベース」によれば、現在のノヴゴロド時間〔世界標準時 (GMT=UTC) + 3 時〕で換算すると、16:30 頃が食の最大 (食分 1.037) で、日食はほぼ 15:00 ~ 17:40 の間続いた。

375) この句には異読がある。*Сн въ час 10 дни, яко въ звонение вечернее; Ак въ звонение веченьнее; Км в год пѣння вечернии.* もっとも詳しい *Сн* が本来の読みではないか。なお「晩課の鐘」(звонение вечернее) は晩課の始まりを知らせる鐘のことで、18:00 前後のことと思われる。

た³⁷⁶⁾。星が現れた。そして、再び明るくなった。われらは喜んだ。

同じ月〔5月〕の6日、ルカ街の住人³⁷⁷⁾ (лукинци) が、石造りの聖使徒ペトロとパウロ教会を定礎した³⁷⁸⁾。シニリシチェ³⁷⁹⁾ (Синилище) においてだった。

同じ年、ミロネグ³⁸⁰⁾ (Милонѣг) が、聖なる主の昇天 (святого Вознесения) の石造りの教会³⁸¹⁾ を定礎した。大主教イリヤ〔イオアン二世〕が〔定礎式に〕立ち合い、《ムスチスラフ・ダヴィドヴィチ公 [J32] も立ち会った》³⁸²⁾。

冬のこと、ダヴィド [J3] が、ノヴゴロド人とスモレンスク人とともに、ポロツクへ向けて

376) 当時の慣習によれば、「昼」(день) は日の出から日没までの時間帯を指し、これを 12 等分して、最初から第 1 刻 (первый час), 第 2 刻 (второй час) … と数えていた。5 月 1 日のノヴゴロド (GMT + 3 時) の日の出は 5:00、日没は 20:45 だから、「昼の第 10 刻」(в час 10 дни) は、14:50 ~ 16:05 に相当する。上注 374 のように、日食の始まりが 15:00 だから、これは「第 10 刻」の始まりにほぼ対応している。また、日食が続いた時間についても、「一刻かそれ以上」(на час и боле) という記述に対応していることが分かる。

377) ルカ街 (Лукина улица) はリューディン区のもっとも南にあり、ヴォズドヴィジェンスカヤ街 (次注) と合流している。そこから城外に出れば「ペテロとパウロ教会」の場所は近くにある。「ルカ街の住民」(лукиничи) とは、その街で営業しているなんらかの職業組合を指し、かれらの守護聖人に献じた教会が「ペテロとパウロ教会」だったのかもしれない。

378) この教会は、「シニチャ丘の聖使徒ペテロとパウロ教会」(церковь св. Петра и Павла апостолов на Синичей горе) (もしくは「シリニシチェの」на Сильнице) と呼ばれているもので、聖堂は後代のものが現存している。ソフィア地区リューディン区のヴォズドヴィジェンスカヤ街から外城の壕 (土塁) を渡って城外に出て、600m ほど南西方向へ行ったところに位置している。後代の文献では、1092 年に主教ゲルマンによって建てられたという記録もあり [Великий Новгород 2009: С. 496-497]、その場合には木造の聖堂を石造りに建て替えたのかもしれない。

379) 「シニリシチェ」については前注参照。なお、異読があり、Сн на Сильнице; Ак, Км на Синилище。前者の読みが通用しており、後者の音位転換形は *НЛ-М* における固有読みだろう。

380) ミロネグ (Милонѣг) については、1191 年の教会献堂記事ではノヴゴロドの千人長 (тысяцкий) とされている。さらに、Лер 6685 年記事では、ノヴゴロドがスーズダリ公フセヴォロドと同盟した直後に、フセヴォロドへの援軍としてヴォルガ川まで駆けつけたノヴゴロド人の「ミロネグの配下の者たち」(Милонѣжжъкова чадь) についての言及がある [ПСРЛ Т. 1: Стб. 383]。これはこの 10 年前の 1176 年秋の事件についてであり、この時点ですでに、ノヴゴロド人の軍兵を統括する千人長の役職にあったと思われる。

381) 1191 年の教会献堂記事によれば、この教会堂はソフィア地区のブルースカヤ街にあった [Великий Новгород 2009: С. 521]。

382) Сн а князи Мъстиславе Давыдовици; Ак, Км なし。教会の定礎式に大主教とノヴゴロド公が立ち会った事例は、1167 年のボリス = グレーブ教会定礎の記事にもある (上注 111)。構文から見て、Сн の読みが本来であり、Ак, Км の編集段階で、ムスチスラフ [J32] 公の存在を軽く見た編者が削除したのではないか。

進軍した³⁸³⁾。そして和を結ぶと、帰還するためにエメネツ³⁸⁴⁾へと(на Еменьци)向かった。

6694(1186)年

ザヴィド³⁸⁵⁾(Завидь)[A-29]がダヴィド[J3]のもとへ、スモレンスクへ行った³⁸⁶⁾。そして、ミハルコ・ステパニチ(Михалко Степанич)[A-30]に市長官職が与えられた³⁸⁷⁾。

同じ年、ギリシアの皇帝(цесарь грѣчьскыи)でマヌエルの子アレクシオス(Олекса

383) この、1185/86年冬に行われた、スモレンスク公ダヴィド[J3]が主導したポロツク遠征については、*Лер* 6694記事の末尾に長い記事がある。それによると、「その年の冬のこと、ダヴィドはポロツクを攻めるためにスモレンスクから進軍し、かれの息子ムスチスラフ[J32]はノヴゴロドから進軍し、ヴァシリコ・ヴォロダレヴィチ[L531]はログジェスク(Ложьск)から進軍し、フセスラフ[L111]はドルーツク(Дреютъск)から進軍した」。つまり、スモレンスク諸公と同盟していたポロツク領諸都市の諸公を糾合した、大規模な掠奪目的の遠征だった。これに対して、ポロツク人は(このとき城市ポロツクの支配公はいなかったようである)遠征軍の大軍に抵抗することをあきらめ、使節を「国境」(おそらくノヴゴロド、スモレンスク、ポロツクの)に派遣して、諸公に対して莫大な贈り物を与えて、和議に持ち込んだ。諸公はそれぞれの国へと別れて帰郷して行った。[ПСРЛ Т. 1: Стб. 403-404]。

384) 「エメネツ」の地名表記には異読があり、*Си Еменьци; Км Емници, Км Ёмнициѣ* となっている。いずれにせよこれは、現在のロシア、プスコフ州ネヴェリ地区(Псковская область, Невельский район)のエメネツ湖(озеро Еменец)とその一帯のことを指している。ポロツクからだと、西ドヴィナ川およびその支流オボリ川(Оболь)をさかのぼって85kmほど北東方向へ行くことになり、そこからノヴゴロドまではさらに直線距離で約300kmある。このエメネツ湖は、ポロツクが位置する西ドヴィナ川水系とノヴゴロドへ通じるロヴァチ川(Ловать)水系を結ぶ連水陸路(волок)になっており、ポロツク領とノヴゴロド領とのいわば境界にあたることから、「エメネツへ」(на Еменьци)という表現を使ったのだろう。

385) ヤーニンによれば、ザヴィド(Завидь)[A-29]は、1184年9月にスモレンスクからムスチスラフ・ダヴィドヴィチ[J32]を招聘する使節として活躍し(上注367)、ムスチスラフの到着と同時に市長官に就いたと想定できるという[Янин 2003: С. 153]。ただし、このことについて、史料に明確な記載はない。

386) この1186年春の市長官職の交替で、スモレンスク派の市長官ザヴィド[A-29]は、たんに市長官職を離れただけでなく、スモレンスクへの亡命を強いられている。この時、ノヴゴロドにおけるスモレンスク(ダヴィド公[J3]および現公ムスチスラフ[J32])支持派貴族グループとスーズダリ(フセヴォロド公[D177:K])支持派貴族グループとの間の紛争がいかに激しかったかが分かる。

387) ミハルコ・ステパノヴィチ[A-30]は、ブルスカヤ街(Прусская улица)を地盤とする親フセヴォロド[D177:K]派(上注367)の貴族(上注271を参照)。1184年に市長官職を離れてザヴィドと交替したが、この度の紛争(前注)によって、反ザヴィド・親フセヴォロド(スーズダリ)派貴族の代表として、再び市長官に選ばれたことになる。

Мануиловиць) がノヴゴロドへやって来た³⁸⁸⁾。

その頃、ノヴゴロド人³⁸⁹⁾ がエミ人を攻める遠征を行った³⁹⁰⁾。ヴィシャタ・ヴァシーレヴィチ (Вышата Василевич) の配下の者たちだった。かれらは捕虜を獲得して、**全員**が無傷で帰還した³⁹¹⁾。

同じ年、ノヴゴロド大主教イリヤが逝去した。9月7日のことだった。〔遺骸は〕聖ソフィアの啓蒙所に**恭しく**³⁹²⁾ 安置された³⁹³⁾。

ノヴゴロド人は、ムスチスラフ公 [J32] と典院たちと司祭たちと**聖ソフィアの教衆たちと**³⁹⁴⁾ 評議をした。自分たちのために、かれ〔イリヤ〕の兄弟のガヴリール (Гаврил) を〔大主教候補に〕選任した。そして、請願のための使者を府主教ニキーフォルのもとへ、**キエフへ**³⁹⁵⁾ 派遣した。

388) この記事をそのまま読めば、マヌエル一世コムネノス大帝 (Μανουήλ Α' Κομνηνός ο Μέγας; Мануил) (在位 1143-1180 年) の息子でビザンツ皇帝のアレクシオス二世コムネノス (Αλέξιος Β' Κομνηνός; Алексей) (在位 1180-1183 年) のこと解釈できるが、かれは 1183 年、15 歳のときに共同皇帝で従弟のアンドロニコス一世の手で殺害されている。この記事については、伝承が書き留められたとする説もあるが、もっともあり得るのは、死を免れたとして、アレクシオス帝を僭称した人物が実際にノヴゴロドに亡命してきたというもの。カルポフは、ニケタス・コニアテス (Νικήτας Χωνιάτης) の『年代記』に記されている、北アナトリアのパフラゴニア地方 (Παφλαγονία; Paphlagonia) に複数出現した、アレクシオス二世を僭称した人物のいずれかが、ノヴゴロドに渡ったのではないかと推定している [Карпов 2014]。

389) 異読がある。Сн молодьци; Ак, Км новгородци。前者が本来の読みで、15 世紀には前者の語の意味が通用しなくなっていたことから、後者では言い換えられたのだろう。

390) 「エミ人」(εμь, ѣмь) は、現在のフィンランドの南部一帯に居住していたバルト＝フィン系の部族。〔ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 140〕参照。この遠征は記事の時系列から見て、1186 年の春・夏の航行期に行われたと考えられ、船でヴォルホフ川からラドガ湖に入り、ラドガ湖の北に広がるエミ人の集落を襲撃したということではないか。

391) 北方の隣接異族に対する、交易商品としての奴隷獲得を目的とした掠奪遠征は、これまでも主にノヴゴロド公によって組織されてきたが、ここでは私的に組織された武装集団による遠征について記されている。本記事では、組織者として Вышата Василевич が名指されているが、父称が付されていることから、貴族もしくは貿易商人と推定できる。集団は Сн で «молодци» (若衆) と呼ばれており (上注 389.)、これは、старѣишии / молодшии の親族用語が社会関係に転用されたもので、遠征のための私兵として下層民から (たとえば、操船に長けた漁民や武器を操る樵・獵師など) 徴募されたものだろう。かれらは、特定の遠征の時に雇われる以外は、通常の生業に就いていたと思われる。このような、私的掠奪遠征については、本年代記 1187 年、1191 年記事にも記されており、この時期に活発化したものか。なお、このような武装掠奪集団は、時代が下ると (14 世紀以降)、かれらが利用した軍船の呼び名から、ушкуйники と呼ばれることもあった ([Быков 2006: С. 92-93] 参照)。

392) 「恭しく」(честно) は Км のみの読みで、Сн, Ак にはない。Км 系統の写本での挿入である。

393) 考古学的発掘によれば、大主教イオアン二世 (イリヤ) の遺骸は、ソフィア聖堂の「コルスーン側廊 (拝廊)」(Корсунская паперть) と呼ばれる西側の啓蒙所 (притвор) に埋葬された [Янин 1988: С. 94]。

394) 「聖ソフィアの教衆たちと」(с крилосом святыя Софѣя) は Км のみの読みで、Сн, Ак にはない。Км 系統の写本での挿入である。「教衆」については上注 18 を参照。

395) 「キエフへ」(в Киев) は Сн ではなく、Ак, Км の補足解説的な読みである。

府主教〔ニキーフォル〕とルーシの全ての諸公は、かれ〔ガヴリール〕を迎えるための使者を〔ノヴゴロドへ〕派遣した。そして、かれらはかれ〔ガヴリール〕を、親愛をもって受け入れた。

同じ年の冬、ノヴゴロド人は³⁹⁶⁾、ガヴリール・ネレヴィニチ³⁹⁷⁾ (Гаврил Неревинич) とイヴァチ・スヴェネヴィチ³⁹⁸⁾ (Ивач Свеневиц) を殺害した。橋から [229] 投げ落としたのである³⁹⁹⁾。

同じ時、スモレンスクにおいて、ダヴィド公 [J3] とスモレンスク人との間で暴動 (встань) が起こった。そして身分ある人士 (лучшии мужи) の多くが斃れた⁴⁰⁰⁾。

6695(1187) 年

ガヴリール (Гаврила) がノヴゴロドの大主教に叙任された。3 月 29 日《聖ヴァラキシオス⁴⁰¹⁾ の〔祝祭日〕》だった。ノヴゴロドに 5 月 31 日《聖殉教者エルミアス⁴⁰²⁾ の〔祝祭日〕》に到着した。

396) 異読があり、Сн Новгородѣ (ノヴゴロドにおいて) ; Ак, Км новгородци (ノヴゴロド人は)

397) ガヴリールは、父称から見て、1186 年春にスモレンスクへ逃れた (上注 386) 市長官ザヴィド (Завид Неревинич) [A-29] の兄弟と考えられ、やはりスモレンスク支持派の貴族だっただろう。

398) 「イヴァチ・スヴェネヴィチ」(Ивач Свеневиц) の Ивач は Иван, Иванец の通用形。かれについてはこの箇所が唯一の言及だが、ガヴリール (前注) 同様のスモレンスク支持派の貴族だろう。

399) この 1186/87 年冬に起きたこの事件は、ノヴゴロドにおける、スモレンスク (ダヴィド公 [J3] および現公ムスチスラフ [J32]) 支持派貴族グループとスーズダリ (フセヴォロド公 [D177:K]) 支持派貴族グループとの紛争 (上注 386) が激化したもの。「橋から投げ落とす」すなわち、ヴォルホフ川に架かる大橋 (великий мост) から敵手を投げ落とすことは、民会における裁判の判決の執行であり、後者が民会を掌握したことを示している。その帰結として、翌 1187 年の 11 月には、スーズダリからヤロスラフ [D1153] を再び公に招聘することになる (下注 420)。

400) この 1186/87 年冬にスモレンスクで起きた「暴動」(встань) は、住民が支配公に対して決起して、暴力事件が起こったことを意味するが、他の年代記にはこれについての記録はない。ここで殺害された「身分ある人士」(лучшии мужи) とは、上流のスモレンスク市民 (豪族、大商人) とダヴィド公 [J3] の上級家臣の双方を指しているだろう。「暴動」の原因については、1186 年春～夏にノヴゴロド市長官ザヴィドが、スモレンスクのダヴィド公のもとに逃れたこと (上注 386)、および、直前記事のザヴィドの兄弟ガヴリール等が殺害されたこと (上注 399) とおそらく関連があり、また暴動が本年代記で特に取り上げられていることから、スモレンスクとノヴゴロドの関係が関わっていると推定できる。市民がダヴィド公の対ノヴゴロド政策に反発したものか。いずれにせよ、12 世紀末から 13 世紀初めにかけて、スモレンスクの市民 (民会) の力は強く、たびたび支配公との衝突が起こっていた [Алексеев 1980: С. 115]。

401) 聖ヴァラキシオス (Βαραχισιος; Варахисий) は 4 世紀前半のペルシアの殉教聖人で、兄弟のイオナス (Ιωνας) 等とともに祝聖されている。その祭日は、ギリシアの伝統では 3 月 29 日であり、11-12 世紀のスラヴ語の月課経 (служебные мнен) にもこの日が祝祭日とされている。

402) 聖エルミアス (Ерми; Ерμία; Ἑρμείας) は、2 世紀中葉カッパドキアのコマナ (τὰ Κόμανα τῆς Καππαδοκίας) の軍人の殉教者。祝祭日は、11-12 世紀のスラヴの伝統では 5 月 31 日だった。

ノヴゴロド人は自分たちの猊下⁴⁰³⁾〔の到来〕喜んだ。

同じ年、アントーニイの聖なる聖母の典院モイシイ (Моисии) が逝去した。かれの後任に⁴⁰⁴⁾ヴォロス⁴⁰⁵⁾ (Волос) が任じられた⁴⁰⁶⁾。

同じ年、非常に恐ろしい雷と稲妻があった。十字架を掲げて聖ソフィア〔教会〕から聖ミカエル⁴⁰⁷⁾〔教会〕へとやって来て、第9歌頌を歌っていたときだった⁴⁰⁸⁾。雷と稲妻が〔人々を〕打ち、すべての人々は倒れた。そして、教会が燃え始めた。しかし、神はご自身の慈悲と聖ミカエルの祈りによって庇護された⁴⁰⁹⁾。教会に被害はなかったが、二人の人が死んで命を落とした⁴¹⁰⁾。

403) 「自分たちの猊下」(своему владыцѣ) は *Ак, Км* だけの読みで、後代の追加によるもの。владыка (猊下) は主教職にある者に対する呼びかけに用いられる親愛がこもった表現。「主宰者」とも訳すことができる。

404) 異読があり、*Сн на мѣсте его* (かれの地位に) ; *Ак, Км по немъ* (かれの後任に) 。どちらが本来の読みかは定めがたい。

405) 「ヴォロス」(Волос) の名は以下の記事にもあらわれるが、典院(修道院長)の名として記されているのは興味深い。これはおそらく、洗礼名ヴラーシイ (Власий; Βλάσιος) のノヴゴロドにおける通称名であり [Кюршунова 2010: С. 98-100], 年代記記者をはじめとして周りの人々(修道士など)がかれを呼んでいた呼び名がこの記事に使われたと考えられる。

406) これは、一連の「アントーニイ修道院」関連記事(上注 37, 73)のひとつ。

407) 「聖ミカエル」(святѣи Михаил) 教会は、ブルースカヤ街にあり、この時の市長官だったミハルコ・ステパノヴィチ [A-30] の守護聖人教会と考えられる。この十字架行進は、ソフィア聖堂から内城出口(現ポクロフ塔(Покровская башня))まで 450m ほどで、そこからブルースカヤ街を歩いて教会まで 520m ほどあり、あわせて 1km ほどの道行で、聖ミカエル教会の聖堂祝祭日(престольный праздник)9月6日に、その祝祭行事として行われたと考えられる。落雷が発生する季節ということでも符合する(次注も参照)。

408) 「第9歌頌を歌っていたとき」(поюшимъ 9 пѣснь) とは、朝課(утреня)の最後に歌われる「規程」(カノン, канон) と呼ばれる九つの歌頌(пѣснь) (実際には八つ) の9番目の歌頌のこと。ここでは、9月6日に祝われる「コロサイでの大天使ミカエルの奇跡」(Чудо Архистратига Михаила в Хонех) のカノン(ビザンツ聖歌作家イオシフ Ио́сѣф 作) の第9歌頌のことを言っている。興味深いのは、このカノンのまさに第9歌頌のテキストには、Се благолепие твоего, Архангеле, Божественаго храма, сияющее светозарным твоимъ присутствиемъ, чудесъ молнии испускает и тьмы недуговъ всегда отгоняетъ Божественною благодатию. の一節があり、下線部の大天使ミカエルが「稲妻を消した奇跡」が、稲妻による教会の火災が消えたという記事内容と対応している。これは、年代記記者の作為によるものだろう。

409) この落雷によって部分的に燃えたのは、おそらく聖ミカエル教会(上注 407)の聖堂であり、1175年に焼失したために(上注 242), 1176年にミハルコ・ステパノヴィチ [A-30] が新たに建て直した木造聖堂(上注 272)だったろう。この度も火事は発生したが、神と守護聖人のおかげで全焼には至らなかったことが強調されている。

410) 「死んで命を落とした」は до конца мѣртва で *Ак, Км* の読み。*Сн* には ко конца (命を落とした) はない。この句は *НЛ-М* における説明的加筆だろう。

同じ年、ペチョーラ⁴¹¹⁾ (Печерьскыи) とユグラ⁴¹²⁾ (Югорьскыи) 〔に派遣された〕徴税官たち⁴¹³⁾ (даньници) が、《ペチョーラ地方で⁴¹⁴⁾》打ち殺された。他の〔徴税官たちは〕ヴォルクの向こうで⁴¹⁵⁾ 〔殺された〕。およそ 100 人の兵士たち⁴¹⁶⁾ が斃れた⁴¹⁷⁾。

同じ年、太陽にしるし (знамение) があった。正午だった。〔太陽が〕月のように暗くなった。それから、しばらくして、〔太陽は〕満ちて、再び明るくなった。9 月 9 日のことだった⁴¹⁸⁾。

同じ年⁴¹⁹⁾、ノヴゴロド人はムスチスラフ・ダヴィドヴィチ公 [J32] を追放した。

そして、フセヴォロド [D177:K] のもとへ、ヴラジミル〔・ザレスキイ〕へ使者を派遣して、ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ [D1153] を〔ノヴゴロド公として〕求めた。そして、かれ〔ヤ

411) 「ペチョーラ」は「ペチョーラ人」(печора)という意味で、ペチョーラ川(Печора)中上流域に居住する現在も同名のフィン＝ウゴル系の民族を指している。下流域に住む現在のネネツ人も指していたかもしれない[Latopis nowogrodzki 2019: S. 281] なお、HK1, H4 の並行記事では、Пермьскыи, Пермьскыи (ベルミ人) になっているが、後代の改変によるものだろう。

412) 「ユグラ」(Югорьскыи)は「ユグラ人」の意味で、ユグラ地方(オビ川とペチョーラ川に挟まれた地方)のフィン＝ウゴル系在地民族を指している。現在のマンシ人(ヴォグール人)やハント人(オスチャク人)の祖先に相当している。

413) 「徴税官たち」(даньници)は、Ak, Km のみの読みで、Cn にはない。даньници の語は、H1-M の編集段階で行われた文法的かつ説明的な意図からの補足と思われる、1169 年冒頭の類似の記事を参照したのだろう(上注 159)。しかしながら、そのために文意が変わってしまった。Cn テキストでは「ペチョーラ人とユグラ人がペチョーラ川で〔ノヴゴロドの兵士たちを〕打ち殺した」という意味で、こちらが本来の読みと思われる。なお、翻訳では、H1-M のテキストを訳した。

414) 「ペチョーラ地方で」(въ Печере)は、Cn のみの読みだが、現在のペチョーラ川(Печора)一帯の地方を全体として指している。

415) 「ヴォルクの向こうで」(за Волоком)は、1169 年冒頭の類似の記事にも同様の表現があるが、ここでは広く「ザヴォロチエ地方」(Заволочье)、つまり、ペチョーラ地方(前注)の西側の主にチューズ人(フィン＝ウゴル系民族)が居住している一帯を指しているのではないか。

416) 「兵士たち」には異読があり、Cn кьметьство; Ak добро именитых (高位の良民たち); Km кмети となっている。Ak は説明的読み替えて、Cn, Km が本来の読み。この語のスラヴ語本来の意味は「農民」だったが、年代記では「兵士」の同義語として用いられており、ここでも、下級の従士たち、もしくは戦場に動員された平民出身の兵士という意味だろう[Gorsky 2019: C. 173-174]。

417) この記事は、ペチョーラ地方、さらにザヴォロチエ地方へと徴税のために派遣されたノヴゴロドの武装兵が、現地の原住民の抵抗にあつて殺された事件が各地で起きたということだろう。избити (打ち殺す) は異民族や外国人の暴動の際の殺害に場合に使われる言葉である。

418) これは、1187 年 9 月 4 日の皆既日食のことで、現在のノヴゴロドの時間 (GMT + 3 時間) にすると 14:00 頃に太陽が完全に隠れる中心食である。この日の「正午」(польдень)、すなわち日の出と日没の半ばの時刻は、13:06 になることから、「正午」から太陽が隠れ始めたと理解すれば、ほぼ実際と一致している。なお、Hn6695 年記事にも「太陽のしるし」(знамение)の記事があるが、ここでは「9 月 15 日のこと」となっている。二つの年代記ともに、日付が実際と合致せず、しかも誤った日付が互い異なっているのは、間接的な情報として伝えられたことによるか。

419) 記事の時系列から見て、1187 年 9 月の後半の起こった事件と考えられる。

ロスラフ公 [D1153] はノヴゴロドに入城した。そして、11月20日に公座に就いた⁴²⁰⁾。

6696(1188)年

セミョーン・ドイブーチュヴィチ⁴²¹⁾ (Семьонъ Дыбучевиць) は、アルカージイ修道院に聖なる聖母就寝の石造りの教会を定礎した⁴²²⁾。

《同じ年、ヴォルホフ〔川〕(Волхово)に架かる新しい橋を、古い〔橋〕の傍らに建てた。》

《同じ年、聖ヤコブ〔教会〕の司祭、ヴォヤタ(Воята)と呼ばれた神の僕ゲルマン⁴²³⁾ (Германъ)が逝去した。かれは、聖ヤコブ〔教会〕⁴²⁴⁾で45年のあいだ⁴²⁵⁾温順と謙抑のうちに〔司祭の〕勤めを行った。大主教ガヴリール(Гаврила)はプスコフ(Пльсков)へかれ〔ゲルマン〕を連れて行った⁴²⁶⁾。かれはプスコフに着くと、病気になった。〔大主教〕猊下はかれにスヒマ修道士としての剃髪を施した。かれが逝去したのは10月13日の聖殉教者聖カルポスとパピュ

420) フセヴォロド公 [D177:K] による、姻戚であるヤロスラフ公 [D1153] のノヴゴロドへの派遣については、*Лер* 6696年の項に短い記事がある。フセヴォロドは「大いなる名誉をもって、ヤロスラフをかれらの使節とともに、ノヴゴロドへ行かせた」[ПСРЛ Т. I: Стб. 406]と記されている。

421) 「セミョーン・ドイブーチュヴィチ」(Семьонъ Дыбучевиць)についてはこの箇所が唯一の言及。父称とともに示されていることから、ノヴゴロドの在地貴族もしくは大商人で、聖堂修復のために巨額の寄進をしたということだろう。*Сн Дыбачевиць, Ак, Км Дыбучевиць*の異読がある。

422) この「聖なる聖母就寝の石造りの教会」(церковь камена святых Богородица Успение)は、ノヴゴロド内城から南方およそ3kmに位置するアルカージイ修道院(Аркажский Успенский монастырь)の主教会のことで、本年代記1153年記事に、木造教会定礎と修道院開基の記事がある〔ノヴゴロド第一年代記(5):注458〕。本記事はこの木造教会を石造りの聖堂に改築する作業が始まったということ。

423) 「ゲルマン」(Герман)が司祭としての名で洗礼名、「ヴォヤタ」(Воята)はスラヴ系の通用名。かれの名については、研究ではГерман Воятаと並記して表記されており、翻訳でも「ゲルマン・ヴォヤタ」と記す。

424) この「聖ヤコブ教会」は、リューディン区の下ブリニャ街(Добрыня улица)の西端の、ブルースカヤ街に近いところに位置していた、おそらくは教区教会だった。

425) この1188年の時点で45年のあいだ司祭を務めていたということは、ゲルマンは1144年に下ブリニャ街のヤコブ教会司祭に叙任されたことになる。一方、*НІ-С (Сн)* 1144年の項には、「同じ年、聖なるニフォント大主教が、わたしを司祭に叙任した」とあり〔ノヴゴロド第一年代記(5):注390〕、この記事の年代と計算上のゲルマンの司祭になった年が合致する。そのことから、1144年記事の「わたし」はゲルマン・ヴォヤタであり、さらに、一人称単数で記されていることから、記事の作者、すなわち本年代記の記者を務めていたというのが現在の定説になっている。かれが年代記の記録を担当していた期間は、ほぼ大主教イリヤ(イオアン二世)の在任期間(1165-1186年)に重なっており、さらに、ガヴリールが後任の大主教になった1186年から1188年までの期間も、ゲルマンが年代記の記録に携わっていた可能性が高い[Великий Новгород 2009: С. 136]。本記事は、ゲルマンを引き継いだ年代記記者が、かれの事績を称揚するために記したものと考えられる。

426) この主教ガヴリールのプスコフ行きの用務は、プスコフの新築聖堂の献堂儀礼(освящение)のためなどが考えられるが、詳細は不明。ゲルマン・ヴォヤタは、主教に仕える秘書として同行したのだろう。

ロスの日⁴²⁷⁾だった。そして、〔遺体は〕修道院の聖救世主⁴²⁸⁾〔教会〕に安置された。主よ、あなたの僕ゲルマンの魂に安らぎを与え、知ってか知らずしてか犯したかれのあらゆる罪を赦し給え⁴²⁹⁾。》

同じ年の冬、〔モノの〕値段が高くなった。パン〔一個〕を2ノガタで、ライ麦1カヂを6グリヴナで売買していた⁴³⁰⁾。しかし、神の慈悲⁴³¹⁾によって、人々のあいだに忌まわしいこと⁴³²⁾は起こらなかった。

同じ年、ヴァリャーグ人⁴³³⁾ (варязи) はゴート人のところ (на гѣтъх)⁴³⁴⁾ で、〔また〕ネメツ

427) 「殉教者聖カルボスとパピュロス」(святая мученика Карп и Папул)のカルボス(Карп, Κάρπος)は3世紀の小アジア、ティアティラ(Фиатира, Θυάτειρα)主教、パピュロス(Папил, Πάπυλος)はかれに仕えた輔祭とともに殉教聖人(святые мученики)。スラヴの正教世界では最初期から10月13日が祝祭日とされていた。

428) 「修道院の聖救世主〔教会〕に」(у святого Спаса въ монастыри)とは、プスコフ市内に現存する、ミロージ修道院の聖救世主教会(Спасо-Преображенский собор Мирожского монастыря)のことを指している。本年代記1156年の項に主教ニフォントがこの教会堂を建設したという記事がある(上注13)。

429) 「主よ」から始まるこの文は、聖体礼儀(Литургия)において、死者の名を挙げて唱和される「故人のための連祷」(Заупокойная ектения)のなかの輔祭の唱句「さらにわれらは祈願します。故人、神の僕〈何某〉の魂の安らぎについて。知ってか知らずかして犯したその者のあらゆる過ちが赦されることについて」(Еще молимся о упокоении души усопшаго раба Божия <имярек> и о еже проститися ему всякому прегрешению, вольному же и невольному)を祈祷文に書き改めたもの。

430) 類似の記述が6678(1170)年記事にある。表現はこれに倣ったのだろう。

431) 「神の慈悲」には異読があり、*Си, Ак* Божию милостию; *Ки* милосердием Божиимъ。後者は固有読みで、前者が本来の読み。

432) 「忌まわしいこと」(пакости)とは、ここで食物の掠奪や倉庫打ち壊しなどの騒動を含意しているだろう(上注366参照)。

433) この「ヴァリャーグ人」(варязи)は、ゴットランド(次注)の出身者(主に商人や海運業者)のことを指している(上注329および[Шаскольский 1978: С. 102]参照)。

434) 「ゴート人のところ」と訳した地名の原語は、*Си* на гѣтъхъ; *Ак* на хтъх; *Ки* на гѣтъх となっている。この「ゴート人」(готы)は現ゴットランド島(Gotland)の住人のことで、1130年記事でも言及されている(上注329)。

人⁴³⁵⁾(нѣмци)はホリユージク⁴³⁶⁾(Хрюжык)およびノヴォトルジェツ⁴³⁷⁾(Новоторжыц)[ニュヒューピング]で、ノヴゴロド人を《投獄した》⁴³⁸⁾。

春⁴³⁹⁾になると、[ノヴゴロド人は]、自分たちの仲間に対して、ノヴゴロドから海を渡ることを、[230] どのような人物に対しても許さなかった。[ヴァリャーグ人が派遣した]使節団をヴァリャーグ人に引き渡すこともしなかった。結局、和を結ぶ[協定を締結する]ことなしに、かれら[使節団]を帰らせた⁴⁴⁰⁾。

6697(1189)年

ノヴゴロド大主教ガヴリール(Гаврила)が教会を献堂した。それは、アルカージ修道院

435) ここで「ネメツ人」(Сн немцы; Ак, Км нѣмци)と言っているのは、スカンジナビア半島に居住している住民のことを指しており、ゴットランド島の居住者である「ヴァリャーグ人」(上注433)とは区別して記されている。かれらはその後ノヴゴロドとの交易を主に担うことになるハンザ商人の前身と考えられる。

436) 「ホリユージク」には異読があり、Сн Хоружык; Ак, Км Хорюжк. この地名については、スウェーデンの都市トルシヘラ(Torshälla)の古名「フォルシャーグ」(Porsharg; Thorsharg)(上記ニュヒューピングから北北西に78kmほど離れたメラル湖岸の都市)の音訳とする説が出されている。他にこれをトゥルク(Turku)(現在のフィンランドの都市、スウェーデン語でオーボÅbo)に同定する説もあるが[Шаскольский 1978: C.103], その可能性は低い[Линд 1994: C. 194]。

437) 「ノヴォトルジェツ」(Новоторжыц)の読みに写本間の大きな異読はない。普通の読みと理解では、これはノヴゴロド付属都市の「ノーヴィ・トルグ」(Новый Торг)(別称 Торжокで「新しい市場」の意)の別形と解釈できる。しかし、記事の文脈から見て、海外の地名であることは間違いない。そのため、スウェーデンの都市ニュヒューピング(Nyköping)に同定する説が出されており[Линд 1994: C. 194][Шаскольский 1978: C.102-103], これはスウェーデン語で「新しい市場」という意味を持っている。年代記記者が、音訳ではなく、翻訳(カルク)によって地名を写したと考えれば、説得力のある説である[Линд 1994: C. 201]。

438) 「投獄した」には異読があり、Сн рубоша; Ак, Км рубиша. これは1134年記事[ノヴゴロド第一年代記(5): 注225]と同じパターンの異読であり、рути も(по)рубити もともに「投獄」の意味がある([СлРЯ XI-XVII: Вып. 17, C. 135; Вып. 22, C. 261])。なお、このノヴゴロド人の投獄(商品の没収も伴っていた可能性がある)の原因について、シャスコリスキイは、1187年にスウェーデンに対して行われた、シグトゥーナ(Sigtuna)への遠征と都市の破壊・掠奪に対する報復と解釈している[Шаскольский 1978: C. 101-102]。この遠征は、ノヴゴロド史料には記述はなく、私的な掠奪遠征としてノヴゴロドでカレリア人など異族の軍兵を集めて組織された可能性がある(上注391参照)。

439) 1189年春のこと。

440) この段落の叙述は断片的で解釈が難しい。ノヴゴロドに滞在していたゴットランド商人がノヴゴロドへ派遣した使節団との和平協定(мир)交渉が、この、ゴットランド島とメラル湖岸都市におけるノヴゴロド商人投獄事件の影響で、御破算になったということだろうか。なお、この時期、ノヴゴロドとゴットランド及びスカンジナビア半島の商人組合と、お互いの支配者(王や公)が交替したときなどに、使節団を派遣して、商業活動にともなって起こり得るトラブルを平和的に解決するための協定(мир)を結んでいた(もしくは、従来の協定の確認を行っていた)ことについては、ノヴゴロド人とネメツ人とが1191-92年に互いに批准したと考えられる協定の冒頭にも記されている[ГВНП 1949: C. 55-56]。

(Аркахъ манастирь)の聖なる聖母就寝〔教会〕だった⁴⁴¹⁾。6月4日、《聖ミトロファンの日》⁴⁴²⁾のことだった。

同じ年、大主教ガヴリールがジャトゥーニ⁴⁴³⁾に(на Жатунѣ),《アナニア、アザリア、ミサイルおよび預言者ダニエルの》三少年に献じた新しい教会堂⁴⁴⁴⁾を建てた。

《同じ年、ノヴゴロドで、〔ノヴゴロド公〕ヤロスラフ [D1153] のところで、公妃である娘が生まれた⁴⁴⁵⁾。聖母生誕の日 (на Рожество Богородици) だった⁴⁴⁶⁾》。

同じ年、聖なる受胎告知教会⁴⁴⁷⁾ (церковь святое Благовѣщение) の壁画⁴⁴⁸⁾が完成した。

441) 前年 1188 年にセミョーン・ディブーチェヴィチが定礎した石造りの聖堂（上注 421）が完成して、大主教の手による献堂式（освящение）が行われたということ。

442) 6月4日は、4世紀のコンスタンティノポリス総主教ミトロファン（Митрфан; Μητροφάνης）の祝祭日だった。

443) この「ジャトゥーニ」（Жатунѣ）について、ムーシンはイリメニ湖西岸のヴェリャジャ川（река Веряжа）中流の地名であり、17世紀にはノヴゴロドからルーサやプスコフへ行く街道があった場所の古名としている。そして、この地名は、現在ノヴゴロド中心部（ソフィア聖堂）から南南西方向約 11km に位置するジェルクーン村 Желкун およびトリ・オトロカ（三少年）村 Три отрока（2km ほど互いに離れている）に反映していると解釈している [Мусин 2016: С. 45]。なお、ポーランド語訳注釈は、ブルースカヤ街の大天使ミカエル教会（上注 242）には、三少年に献じた副祭壇（придел）があったことから、この祭壇を設けたことを指すという解釈を提出している [Latopis nowogrodzki 2019: S. 282, Prz. 400]。しかし、本記事では「副祭壇」ではなく「教会堂建設」（постави церковь）とはっきり記されており、また 1219 年記事でこの祭壇を「四日で建てた」ことが記されていることから、可能性は低いだろう。

444) 「建てた」（постави）とは聖堂を建築することで、『ダニエル書』第 3 章のエピソードにある、炉の中で滅びなかった三人の少年（святые три отрок）に献じられた教会のこと。この場合は、「石造り」の注記がないことから、木造の教会堂が建てられたと考えられる。なお、Сн ではそれぞれの少年の名が記されているが、Ак, Км ではこれは省かれている。

445) ヤロスラフ [D1153] の「公妃である娘」（дъщи княгини）について、ドムプロフスキイは、クラクフ公の「レシェク白公」（Leszek Biały）（在位 1194～1198 年, 1199～1202 年, 1206～1210 年, 1211 年～1227 年）と結婚し（1207 年頃）で、15 世紀の史料ヤン・ドゥウゴシュ『年代記』によれば、名はグリミスラワ（Grzymisława）[Щавелева 2004: С. 207, 361] と呼ばれた公妃であると推定している [Домбровский 2015: С. 642-648]。たしかに、ここで「公妃」（княгини）の語が入るのは不自然であり、のちのグリミスラワの活躍（かの女は夫レシェクが 1227 年に暗殺されたのち、執政として息子のボレスワフ五世（純潔公）を支え、クラクフの王宮で権限を振るった）について知っている後代の編者による、加筆である可能性も否定できない。

446) 1189 年の聖母生誕の日（Рождество Богородицы）は 9 月 8 日である。

447) ガヴリールは兄で当時大主教だったイリヤ（イオアン二世）とともに、1179 年にこの聖母受胎告知に献じた石造りの聖堂を完成させている（上注 301）。この聖堂の壁画を、大主教ガヴリールが完成させたということ。

448) 「壁画」には異説があり、Сн пишущее; Км подпись; Ак подписию。意味していることは同じである。

同じ年、ミハルコ (Михалко) [A-30]⁴⁴⁹⁾ から市長官職が取り上げられた。そして、ミロシカ・ネズナニチ (Мирошка Незнаниць) [A-31]⁴⁵⁰⁾ に与えられた。

《6698(1190)年 ノヴゴロドで、〔ノヴゴロド公〕ヤロスラフ [D1153] のところで、息子で〔洗礼名〕ミハイルが生まれた。公としての名はイジャスラフ⁴⁵¹⁾ [D11531] で、ウラジーミル [D115] の孫であった》。

6698(1190)年

同じ年、プスコフ人は、海沿いのチューヂ人を打ち殺した。〔チューヂ人が〕7隻のスネッケ船⁴⁵²⁾ で到来して、早瀬を回避して船を曳いて運び、湖に入った⁴⁵³⁾。そして、プスコフ人はかれらに襲撃を仕掛けて、一人の男も逃すことはなく、また〔捕獲した〕スネッケ船はプスコフ《の城市》へと運び込んだ。

6699(1191)年

ノヴゴロド人は、コレラ人 (корела) とともに、エミ人 (ѡмь) を攻める遠征を行った⁴⁵⁴⁾。そして、エミ人の地 (земля ѡмская) を掠奪した。そして、〔その居住地を〕焼き払い、家畜を斬り殺した。

449) ミハルコについては、上注 271 を参照。かれは、1186 年に三度目の市長官職についており (上注 386)、ここまで 4 年間勤めたことになる。

450) ミロシカ (Мирошка, Мирожка) [A-31] はミロスラフ (Мирослав) の通用名。この 1189 年以降、1204 年まで 15 年という長期にわたって市長官職を務めることになる。リューディン区の貴族で、Незнанич の父称には、Нездинич の表記もあり、1167 年の記事で、市長官ザハリヤ (Захария) [A-25] とともに殺害された、伝令官 (бирич) のネズダ (Несда, Незда) の息子である可能性が高い。かれの名は、1191-92 年にノヴゴロドがネメツ人と結んだ協定のなかにも記されている [ГВНП 1949: С. 55]。

451) イジャスラフ [D11531] は 1198 年、8 歳のときに死去して、ノヴゴロドのユーリイ修道院に埋葬されている。

452) 商用・軍用のオール付き帆船「スネッケ船」(шнека) については〔ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 373〕を参照。一隻に 25 ～ 40 人が乗船して外洋を航海することができた。

453) この事件の「海沿いのチューヂ人」(чудь поморская) とは、フィンランド湾 (もしくはバルト海・リガ湾) の沿岸地方に居住したチューヂ人 (エストニア人) を指しているだろう。本記事の記述から見て、かれらが外洋船 (шнека) を操って、ナルヴァ川 (Нарова) の河口に入り、これを遡上して (このとき「早瀬を回避して船を曳いて運んだ」(оболочилися около порога))、チューヂ (ペイプス) 湖に入り (въ озеро)、プスコフ城市近くまで侵入した事態が考えられる。

454) 1143 年記事で、コレラ人 (кареля) がエミ人を攻めて失敗した記事があり、*Ин*6656(1148) 年記事には、1149 年初め (2 月頃) にイジャスラフ [D112:I] の遠征にコレラ人が参加している (〔ノヴゴロド第一年代記 (5): 注 382〕参照)。このように 1140 年代末にはコレラ人はノヴゴロドの支配下に入っており、この度のノヴゴロド人主導の掠奪遠征も、コレラ人居住地と隣接する地方のエミ人に対するものだろう。

同じ年、ヤロスラフ公 [D1153] は城塞地区 (Городище) に聖ニコライ教会 (церковь святого Николы) を木造で建てた⁴⁵⁵⁾。また、猊下〔大主教ガヴリール〕は《自分の館のそばに》⁴⁵⁶⁾ 主の迎接 (Устрѣтение Господне) 〔教会〕を木造で建てた。

同じ年に、ヴネズデ・ネズディリニチ (Внѣзде Нездылиницъ) が聖顔布 (Святого Образа)⁴⁵⁷⁾ 〔教会〕を、コスチャンチンとその兄弟と (Костянтине с братом) が《市場区に (на Търговищи)》聖ピャトニツァ教会⁴⁵⁸⁾ (святая Пятница) 〔を木造で建てた〕。

同じ年に、神を愛する大主教ガヴリールが、聖なる主の昇天教会 (святое Възнесение) を献堂した。これは、千人長ミロネグ⁴⁵⁹⁾ (Милонѣг тысячкии) によって創建されたものだった⁴⁶⁰⁾。

同じ年、ヤロスラフ公 [D1153] がルーキ (Луки) へ行った。かれは、ポロツク諸公とポロツク人によって呼ばれたのである。かれは、ノヴゴロド人の最良の従士たちを連れて行った。そして、かれら〔ヤロスラフとポロツク勢〕は境界のところで会合して、お互いに〔次のことについて〕同盟を結んだ。すなわち、冬になったら、合同してリトアニア人 (на литву), あるいはチューズ人 (на чюдъ) を攻めるといふこと〔を取り決めた〕。そして、ヤロスラフ公 [D1153] は《貢物を与えられて》ノヴゴロドへ戻って来た。

455) 12世紀にノヴゴロドの公座に就いたノヴゴロド公には、かれらの居所である城塞地区 (городище) に、守護聖人としてのニコライに献じた木造の聖堂を持つ慣習があったようであり、6644(1136)年にスヴァトスラフ [C43] が結婚式を行い、6673(1165)年にはスヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ公 [J4] が、城塞地区におそらく木造のニコラ (ニコライ) 教会を建てている ([ノヴゴロド第一年代記(5): 注284] 参照)。そのような慣習に基づいた建設作業であり、簡単な木造の教会堂を短期間で建てたということだろう。

456) *Сн* には въ дворе у себе (自分の館のそばに) の句があるが、*Ак*, *Км* にはない。15世紀初めの *НІ-М* 編者の時代には、この教会はなかったことから省略 (削除) したものか。なお、「自分の館」とは、ノヴゴロド内城 (Детинец) の北にある主教館 (владычный двор) のことを指している。

457) 「聖顔布」(святого Образа) 教会とは、「手によって作られない救世主の像 (聖顔布)」(Образ Спаса Нерукотворного) の奇跡に奉献された教会で、ソフィア地区のリューディン区 (Людин конец) ドブリーニャ街 (Добрыня улица) にあった教会。本年代記では初めての言及だが、1134年付のイジャスラフ・ムスチスラヴィチ公 [D112:I] 文書で触れられており [Великий Новгород 2009: С. 526]、古くから存在したことがわかる。

458) 「聖ピャトニツァ教会」(святая Пятница) は、3世紀の殉教聖女コニア (イコニウム) の聖パラスケーヴァ (Святая Параскева) に奉献された教会のこと。1156年の記事によれば、ノヴゴロドの大商人たちが、市場区に木造の「聖ピャトニツァ教会」を建てており (上注25)、ここでは、その老朽化した聖堂を木造で改築したということだろう。施工主とされる「コスチャンチンとその兄弟」(Костянтине с братом) とは、やはり大商人の代表者と考えられる。

459) 「ミロネグ」には異読があり、*Сн*, *Км* Милогѣг; *Ак* Мирониг で、前者が本来の読みである。

460) 1185年記事で、ミロネグが、このブルスカヤ街の石造りの「主の昇天教会」の定礎を行ったことが記されている (上注380, 381)。6年かかって完成したことになる。

《その頃、ヤロスラフ公のもとで息子が生まれた》⁴⁶¹⁾

そして、冬には、ヤロスラフ公 [D1153] は、ノヴゴロド人とプスコフ人と [231] すべての自分の領地〔の軍兵〕とともに (во всю область свою), チューズ人を攻める (на чюдь) 遠征を行った。そして、ユーリエフ (Гюргевъ) の城砦を占領し、かれらの地を焼き、数えられないほど〔多数の〕捕虜を連れ帰った。そして、かれら〔遠征軍〕自身は全員が無傷で帰還した。

6700(1192) 年

ヤロスラフ公 [D1153] はプスコフへ行った。ペトロの日 ⁴⁶²⁾ だった。ノヴゴロド人も少人数〔行った〕。そして、〔ヤロスラフ公は〕自らプスコフに座した。そして、自分の宮廷の者たち (дворъ свои) をプスコフ人とともに、掠奪のために派遣した。そして〔かれらは〕行くと、「熊の頭」⁴⁶³⁾ (Медвѣжья Голова) の城市を占領し、焼き払った。そして、全員が無傷で帰還した。

同じ年、修道士ヴァルラーム ⁴⁶⁴⁾ (Варламъ), 世俗名オレクサ・ミハイロヴィチ (Олекса Михайлович) が、フーティン (Хутин) に教会を建てた ⁴⁶⁵⁾。それは、聖なる主の変容 (святое Спаса Преображение) に献ぜられた〔教会〕だった。そして、ノヴゴロドの猊下〔大主教〕ガヴリール (Гаврила) が、祝祭日に ⁴⁶⁶⁾ この〔教会〕を献堂し、修道院と名付けた。

461) 1191/92 年の冬にノヴゴロドで誕生したこのヤロスラフ公 [D1153] の息子 (сынъ) については、通常書かれるべき名が記されておらず、夭逝した男子である可能性が高い。1225/26 年冬にリトアニア人に殺されたトロベツ公ダヴィドに同定する説があるが、ドムブロフスキは根拠が薄いとしている [Домбровский 2015: С. 650-662]。

462) この「ペトロの日」(на Петровъ день) は、1192 年 6 月 29 日の金曜日に相当する。

463) 「熊の頭」(Медвежа Глава) はフィン系の地名「オデンペ」(Oden-päh) をルーシ語に翻訳借用して言い表した地名。ott-, od- は「熊」を指す婉曲語で、päh は「頭」の意味。現在のエストニアのタルトゥー (当時のユーリエフ (Юрьев)) の南南西約 40km にあるオテパー (Otepää) に相当する。プスコフからだと、西北西方向へ 110km ほど離れている。

464) オレクサ (ヴァルラーム) は 13 世紀にはノヴゴロドでの崇敬が広がり、15 世紀に聖人に列せられていることから、聖人伝が書かれ、伝記付きイコン画が描かれている。それによれば、ネレフスキ区ドスラナ街 (Дослана улице) とヤコブ街 (Яковлева) の間に生家があった。本記事に世俗名が記され、オレクサ・ミハイロヴィチ (Олекса Михайлович) と父称が付されていること、自分の一族の土地・資産を修道院に寄進していることなどから、富裕層おそらくは貴族 (бояре) の出身と考えられる。Н4(Никольский список) によればヴァルラームは 1193 年 11 月 6 日に没しておりこれがもっとも確度が高い。他に、1197 年、1208/09 年以降の説もある。[Гордиенко 2010: С. 14-21][Православная энциклопедия Т. 6: С. 635-640: ВАРЛААМ ХУТЫНСКИЙ]。

465) これは「ヴァルラーム=フーティンスキ主の変容修道院」(Варлаамо-Хутынскій Спасо-Преображенскій монастырь) のことで、ヴォルホフ川右岸、ノヴゴロドの中心から北北東 7km ほどのホロフ砦 (Холопий город) と呼ばれる砦の跡に建てられた郊外型修道院。聖人伝によれば、石造りだったという。

466) ここで「祝祭日に」(на праздникъ) と記されているのは、聖堂の祭日 (престольный праздник) にいうことで、「主の顕栄祭〔変容祭〕」(Преображение Господне) の 8 月 6 日 (1192 年) のことを指している。

同じ年、シニリシチェ(Синилище)のペトロとパウロ教会⁴⁶⁷⁾の〔壁画が〕再び完成した。そして、ペトロの日⁴⁶⁸⁾に、大主教ガヴリールがこれ〔教会堂〕を祝聖した。

同じ年、典院マルティーリイ⁴⁶⁹⁾(игумень Мантурии)が、ルーサ(Руса)の中州に教会を木造で建てた。それは、聖なる変容(святое Спаса Преображение)に献じられた〔聖堂〕だった⁴⁷⁰⁾。そして、尊い修道院を開いた。これは、キリスト教徒にとっては避難所だった⁴⁷¹⁾。

同じ年、丘の(на Холмѣ)聖なるペトロとパウロ教会⁴⁷²⁾が、落雷によって焼けた。

同じ年、ズヴェリネツ(Звѣринц)の聖なる聖母〔修道院〕⁴⁷³⁾で、ピョートル・クープツェヴィチ〔の寡婦〕⁴⁷⁴⁾エフロシニア(Ефросиния)が典院に叙任された。

467) 「シニリシチェ(Синилище)のペトロとパウロ教会」の教会名には異読があり、*Сн церковь святыхъ Апостоль*; *Ак, Км церковь Петра и Павла*。また、「シニリシチェ」についても、上注 379 と同じ異読がある。このリュエディン区にあった教会については上注 378 を参照。

468) この「ペトロの日」(на Петровъ день)は上注 462 の日付とまったく同じ、1192 年 6 月 29 日のこと。教会の献堂式(この場合は壁画の祝聖式)を聖堂の祝祭日(престольный праздник)に行うことは、上注 464 の場合もそうだが、当時は慣習的に行われていた。

469) この人名表記には異読があり、*Сн Мартурии*; *Ак, Км Мантурии*。聖人名としての標準表記は *Мартирий*(*Μαρτύριος*)。このマルティーリイは、1193 ~ 1199 年にノヴゴロド大主教となる人物。のちに列聖され、ソフィア聖堂のかれが埋葬された場所はその名をとって「マルティーリイ側廊」(*Мартирьевская паперть*)と呼ばれている。本記事は、かれが大主教のときに書とめられたのだろう。ルーサ(現在の都市 Старая Русса)にゆかりが深い(出身地?)ことから、「ルーサ人」(*Рушанин*)と呼ばれることもある。

470) この「救世主変容修道院」(*Спасо-Преображенский монастырь*)は石造りの断酒修道院の聖堂が現存しているが、当時の木造の聖堂は別の場所にあったようである。「中州に」(на островѣ)とは、ポリスチ川(*Полисть*)に流れる支流が聖堂を迂回するように流れ、あたかも中州にあるようだったためとみられる。

471) 聖堂建設について、「キリスト教徒にとって避難所だった」(*бысть прибежище крестианомъ*)と形容する表現は、1153 年、1179 年の記事にもある。

472) 「ペトロとパウロ教会」には異読があり *Сн святыхъ Апостоль*; *Ак святыхъ Петръ и Павел*; *Км святыхъ апостоль Петра и Паула*。この教会については、1146 年に建設の記事がある〔ノヴゴロド第一年代記(5):注 410〕。この「丘」(*Холм*)はスラヴェンスキイ区(*Славенский конец*)の南東部分を指し、かつて村落があった小高い土地の通称。

473) 「狩場」を意味する「ズヴェリネツ」(*Звѣринц*)の地区は、ソフィア地区側の外壕の北、ヴォルホフ川河岸に位置しており、この「聖母教会」は「聖母の庇護(ボクロフ)」(*Покров Богородицы*)に献堂された修道院を指している。1148 年記事に最初の言及がある〔ノヴゴロド第一年代記(5):注 423〕。

474) この「エフロシニア」については、*НІ-М*のみに *Ак* *Ефросинию Петра Купчевича*; *Км* *Ефросинию Петровую Купчевича* の句が付されているが、*Сн* では叙任された典院の名前がないのは不自然である。そのため、*НІ-М* が本来の読みであり、*НІ-С* では何らかの理由で典院の名が脱落した(削除した)と見るべきだろう。なお、このピョートルはノヴゴロドの貴族もしくは大商人だったと考えられるが、他の史料に言及はない。エフロシニアはおそらくかれの妻であり、年代記記者の記憶に残るほど最近に寡婦になったと推定される。

《同じ年、聖なる復活 (святое Въскресение)〔修道院⁴⁷⁵⁾〕の典院マリアが逝去した。その後任にエヴドキヤ (Евдокия) が叙任された》。

475) 「復活修道院」(святого Въскресения)は、リューディン区から「外城(外周城市)」(окольный город)を出たミヤチノ池のほとりのヴォスクレセンスカヤ街(Воскресенская улица)にあった女子修道院で、石造りの聖堂が現存している[Великий Новгород 2009: С. 300]。1136年の項に、修道院の木造の主教会が焼けた記事がある[ノヴゴロド第一年代記(5): 注 272]。

参考文献

- Алексеев 1980 — Алексеев Л. В. Смоленская земля в IX - XIII вв. Очерки истории Смоленщины и Восточной Белоруссии. М., 1980.
- БЛДР Т. 6 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 6: XIV-середина XV века. СПб., 1999.
- Васильев 2005 — Васильев В. Л. Архаическая топонимия Новгородской земли (древнеславянские деантропонимные образования). Новгород Великий, 2005.
- Великий Новгород 2009 — Великий Новгород. История и культура IX-XVII веков: Энциклопедический словарь. СПб., 2009.
- ВМЧ Сент. 14-24 — Великие Минеи Чети. Сентябрь дни 14-24. СПб., 1883.
- Гордиенко 2010 — Гордиенко Э. А. Варлам Хутынский и архиепископ Антоний в житии и мистериях. XII - XVI века. М.; СПб., 2010.
- Горский 2019 — Горский А. А. Русские средневековое общество: Историко-терминологический справочник. СПб., 2019.
- ГВНП 1949 — Грамоты Великого Новгорода и Пскова. М.; Л., 1949.
- Дмитриев 1976 — Дмитриев Л. А. Реминисценция «Слова о полку Игореве» в памятнике новгородской литературы // Культурное наследие Древней Руси: Истоки. Становление. Традиции. М., 1976.
- Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения (до начала XIV в.). СПб., 2015.
- Забелин 1876 — Забелин И. Е. История русской жизни с древнейших времен. Ч. 1, М., 1876.
- ИГР-3 — Карамзин Н. М. История государства Российского. Т. 3.
- Карпов 2017 — Карпов А. Ю. Русская церковь X-XIII вв.: Биографический словарь. М., 2017.
- Ковалев 2010 — Ковалев, А. Убийство Андрея Боголюбского и его освещение в памятниках летописания // Электронный научный журнал SCRIPTORIUM: История древнего мира и средних веков № 5, Выпуск 6. 2010.
- Кюршунова 2010 — Кюршунова И. А. Словарь некалендарных личных имен, прозвищ и фамильных прозваний Северо-Западной Руси XV-XVII вв. СПб., 2010.
- Линд 1994 — Линд Дж. Загадочная статья новгородской первой летописи. Что случилось в 1188 году? // Архив русской истории. Вып. 4, 1994. С. 191–205.
- Лосева 2001 — Лосева О. В. Русские месяцесловы XI-XIV веков / Под ред. акад. Л. В. Милова. М., 2001.
- Мусин 2016 — Мусин А. Е. Загадки дома Святой Софии: Церковь Великого Новгорода в X-XVI вв. СПб., 2006.
- НПЛ — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.; Л., 1950.
- ПСРЛ Т. 1 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.
- ПСРЛ Т. 2 — Ипатьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том второй.) - 2-е изд. М., 2001.
- ПСРЛ Т. 3 (НЗ), 1841 — Полное собрание русских летописей: IV Новгородские летописи (Новгородская третья летопись). СПб., 1841. С. 207-279.
- ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, Вып. 1 (Н4) — Полное собрание русских летописей. Т. 4, Ч. 1, Вып. 1. Новгородская четвертая летопись. Пг., 1915.
- ПСРЛ Т. 6 — Полное собрание русских летописей: Том 6, Софийская первая летопись старшего извода. М., 2000.

- ПСРЛ Т. 7 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т. 9 — Полное собрание русских летописей: Том 9, Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью. М., 2000.
- Погодин 1848 — Погодин М. П. Древние русские княжества с 1054 по 1240 год. СПб., 1848.
- Поппэ 1996 — Поппэ А. Митрополиты и князья Киевской Руси // Подскальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988–1237 гг.). СПб., 1998. С. 443–511.
- Робежник 2016 — Робежник Л. В. Надвратные храмы Великого Новгорода // Вестник Новгородского Государственного университета, № 94, 2016. С. 122–126.
- Савченко 2017 — Савченко, Д.А. Принудительные меры защиты политического строя в практике древнерусского государства в XI–XIII веках // Историко-правовые проблемы: новый ракурс 4: 2017. С. 151–164.
- СлРЯ XI–XVII Вып. 1–30 — Словарь русского языка XI–XVII вв. Вып. 1–30.
- Словарь-СПИ 3 — Словарь-справочник «Слова о полку Игореве». Вып. 3, Л., 1969.
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1–2. М., 1988.
- Шаскольский 1978 — Шаскольский И. П. Борьба Руси против крестоносной агрессии на берегах Балтики в XII–XIII вв. Л., 1978.
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I–VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.
- Янин 1988 — Янин В. Л. Некрополь Новгородского Софийского собора. М., 1988.
- Янин 1998 — Янин В. Л. Я послал тебе бересту... М., 1998.
- Янин 2003 — Янин В. Л. Новгородские посадники. М., 2003.
- Янин 2008 — Янин В. Л. Очерки истории средневекового Новгорода М., 2008.
- Latopis nowogrodzki 2019 — Zofia A. Brzozowska, Ivan Petrov. Latopis nowogrodzki pierwszy starszej redakcji. Unikatowy zabytek piśmiennictwa staroruskiego i jego polski przekład. Seria Ceranea. Tom 5. WUŁ – Uniwersytet Łódzki, 2019.
- 日月食等データベース — 日月食等データベース (国立天文台暦計算室) <https://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/eclipsedb.cgi>
- ノヴゴロド第一年代記(1) — 中沢敦夫『『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』翻訳と注釈(1)』『富山大学人文学部紀要』(76号, 2022年2月) 113–219頁。
- ノヴゴロド第一年代記(2) — 中沢敦夫『『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』翻訳と注釈(2)』『富山大学人文学研究』(第77号, 2022年8月) 167–271頁。
- ノヴゴロド第一年代記(3) — 中沢敦夫『『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』翻訳と注釈(3)』『富山大学人文学研究』(第78号, 2023年3月) 237–310頁。
- ノヴゴロド第一年代記(5) — 中沢敦夫『『ノヴゴロド第一年代記(新編集版)』翻訳と注釈(4)』『富山大学人文学研究』(第80号, 2024年2月) 181–269頁。
- 松木 2002 — 松木栄三『ロシア中世都市の政治世界—都市国家ノヴゴロドの群像』、彩流社、2002年。

※ 年代記とその写本の略号については、[ノヴゴロド第一年代記(1): 212–213頁]を参照。

〔後記〕

本稿は共同研究「『ノヴゴロド第一年代記』講読会」の研究活動の成果である。講読会の参加者は次の通り。宮野裕（岐阜聖徳学園大学教育学部教授），岡本崇男（神戸市外国語大学名誉教授），今村栄一（公益財団法人河川財団名古屋事務所研究員），草加千鶴（創価大学非常勤講師），伊丹聡一郎（明治大学大学院博士後期課程），岸慎一郎（塾講師）。

